

栃木県埋蔵文化財調査報告第333集

吾妻古墳

—重要遺跡範囲確認調査—

2011.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

あ ず ま こ ふ ん
吾 妻 古 墳

—重要遺跡範囲確認調査—

2011. 3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団



横穴式石室 奥室（南からみる）



横穴式石室 奥室東側壁（西からみる）



横穴式石室 平成21年度調査区（上が南）



横穴式石室 羨門及び川原石積み側壁（南からみる）

序

吾妻古墳は、栃木県の主要な前方後円墳の一つであり、昭和45年7月22日に国史跡に指定されております。今回は古墳の範囲や遺存状況確認を目的に、平成19年度から平成22年度までの4年間にわたって発掘調査を実施いたしました。その結果、堀が一重であること、墳丘下半部も盛り土で作られていることに加え、古文書で伝えられていただけであった「吾妻の岩屋」の実態が明らかになったことなど、多くの古墳のようすが判明しております。

本書はその調査成果をまとめ、報告書として刊行するものです。

この報告が、学術的に活用されることはもとより、今後、吾妻古墳の保護の一助となれば幸いです。最後に、調査に当たり熱心な御指導をいただきました県文化財保護審議会委員等の諸先生方、文化庁、そして多大なご協力をいただいた壬生町、栃木市教育委員会及び地権者や地元の方に深く謝意を表します。

平成23年3月

栃木県教育委員会
教育長 須藤 稔

例　言

1. 本書は、栃木県栃木市大光寺町、下都賀郡壬生町藤井に所在する、吾妻古墳（国指定史跡）を対象として平成 19 ～ 22 年度に実施した、重要遺跡範囲確認調査の調査報告書である。
2. 調査は、栃木県教育委員会が、財団法人とちぎ生涯学習文化財団に委託して実施した。
3. 調査は、以下の担当者が実施した。

平成 19 年度

調査部　調査部長　川原由典　調査部長補佐兼資料整理担当　中山晋

調査第一担当リーダー　副主幹　藤田典夫　主査　中村享史　主査　宮田宜浩

平成 20 年度

調査部　調査部長　川原由典　調査部長補佐　中山晋　調査部長補佐兼整理担当リーダー　初山孝行

調査第二担当リーダー　係長　進藤敏雄　主査　中村享史

平成 21 年度

調査部　調査部長　初山孝行　調査部調査第二担当リーダー　係長　芹澤清八

調査第二担当　係長　進藤敏雄　主査　中村享史

平成 22 年度

調査部　調査部長　初山孝行　調査部調査第二担当リーダー　副主幹　塚本師也

調査第二担当　係長　篠原祐一　主査　中村享史

4. 本文の執筆、編集は中村が行った。第 1 章第 1 節は斎藤恒夫が執筆した。

5. 表土除去は、有限会社大藤工業に、基準杭建植、航空写真撮影は中央航業株式会社に委託した。

6. 遺跡の写真撮影は、中村、宮田、進藤、篠原が、遺物の写真撮影は中村が行った。

7. 調査には次の諸機関及び諸氏に御協力、御指導を賜った。記して謝意を表したい。

文化庁、栃木市教育委員会、壬生町教育委員会、トヨタ自動車株式会社、壬生高校、壬生中学校、南犬飼中学校、太田茂、横山忠一郎、塙静夫、海老原郁雄、竹澤謙、酒寄雅志、広瀬和雄、秋元陽光、秋山隆雄、足立佳代、穴沢義功、穴沢咲光、池上悟、岩崎卓也、内山正之、大塚初重、大橋泰夫、賀来孝代、柏木善治、加部二生、菊池肇、君島利行、木村友則、木村等、草野潤平、黒崎淳、小林青樹、小林孝秀、小森哲也、小森紀男、今平利幸、佐々木憲一、清水英世、白石太一郎、真保昌弘、杉山秀宏、鈴木一男、鈴木芳英、清野孝之、高橋克寿、田辺征夫、谷畑美帆、中條英樹、辻本崇夫、富祐次、中井正幸、橋本澄朗、橋本高志、土生田純之、深澤敦仁、松浦宥一郎、三浦茂三郎、右島和夫、水ノ江和同、宮代栄一、山田じょう、山口耕一、米沢雅美、若狭徹、金在弘、権太龍

8. 本遺跡は既に「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 31 平成 19 年度（2007）」、「埋蔵文化財センタ一年報 第 18 号（平成 20 年度）」、「埋蔵文化財センタ一年報 第 19 号（平成 21 年度）」、「埋蔵文化財センタ一年報 第 20 号（平成 22 年度）」、「国指定史跡吾妻古墳-重要遺跡範囲確認調査概報 I -」、「国指定史跡吾妻古墳-重要遺跡範囲確認調査概報 I -」、「国指定史跡吾妻古墳-重要遺跡範囲確認調査概報 II -」、「とちぎの国指定史跡」等で一部概要が公表されているが、本書をもって正報告とする。

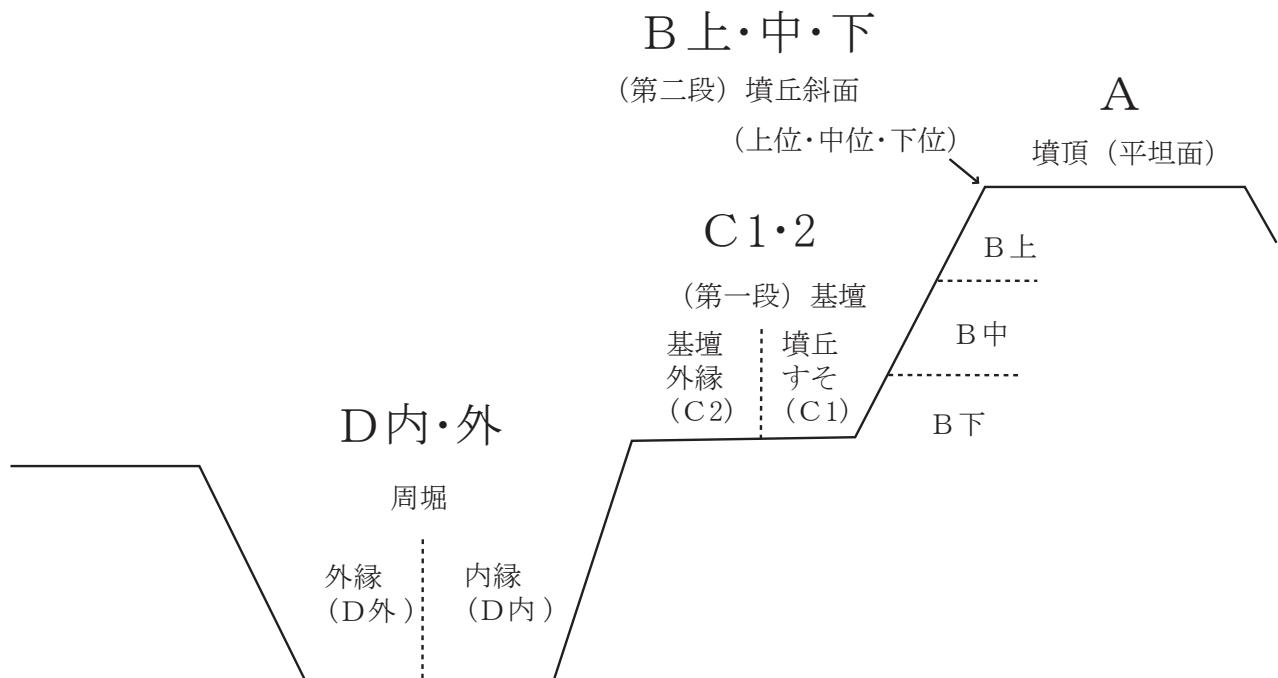
9. 本遺跡の出土遺物、実測図及び図版等は、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

10. 発掘調査、資料整理に従事した作業員は次の通りである。

天野崇弘、五十嵐裕子、磯崎恵子、大久保保江、大場とも子、大高京子、笠野大、菊元美弥子、黒崎喜好、黒崎しづ子、児玉祐美子、佐藤ふじ子、篠原八重、鈴木俊江、高橋洋子、長秀紀、土田和夫、寺崎千恵美、永井寿子、橋本一枝、橋本泰二、林勝彦、深津修、福田昌子、藤原美枝、森下勝、吉葉里美、若林泉、鈴木実花、中山真理、元西幸子、金井千佳子、大出美智子、戸崎真弓、河又智美

凡 例

1. 遺跡の略号は MB-AZ である。
2. 墳丘測量図の座標は世界測地系に基づく。
3. 標高は海拔標高である。
4. 縮尺は図面脇に記した。
5. 図示した方位は座標北である。
6. 本報告での吾妻古墳の計測値は壬生町史に従ったが、将来変更される可能性がある。
7. 遺物への注記は遺跡の略号、トレンチの番号、遺物番号または遺構の部位を示す記号（墳頂：A、墳丘第二段：B、墳丘第一段：C、周堀：D、突出部：E、上位：上、中位：中、下位：下、墳丘第二段裾C-1、墳丘第一段平坦面C-2、外縁：外、内縁：内）を行った。（第1図）
8. 墳輪、土器の観察表における計測値は、cm 単位である。復元値には*、残存値には+ を付して示した。
9. 墳輪、土器の観察表における混和材の同定は、肉眼観察による。「金雲母」は、金色に見える雲母の意味であり、鉱物名ではない。
10. 墳輪、土器の観察表における特徴の記述のうち、「横ナデ」と「横方向のナデ」は別のものである。「横ナデ」は回転によって器面を一周するようなナデで、「横方向のナデ」は回転によらずに断続的に行われたナデである。「横ハケ」と「横方向のハケ」も同様である。
11. 墳輪の観察表における記述のうち、突帯の条数と段数は、底部の有無に関わらず、下から数えた。
12. 墳輪の高さは、口縁高は口縁上端から突帯上縁までの高さ、各段高は突帯上縁から次の突帯上縁まで高さを計測し、底部から一条目突帯までの高さは一高、一条目突帯から二条目突帯までの高さは二高と表現した。
13. 墳輪の直径は、口縁部直径は口径、一条目突帯直径は一径、二条目突帯直径は二径と表現した。突帯が剥落しているものは突帯部分の残存値として計測した。



第1図 吾妻古墳遺物注記出土部位模式図

目 次

序	
例言	i
凡例	ii
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査方法と経過	3
第2章 遺跡の周辺と研究小史	5
第1節 地形と河川	5
第2節 吾妻古墳の現状	6
第3節 周辺の主な遺跡	6
第4節 研究小史	10
第3章 調査の成果	17
第1節 基準杭の設定	17
第2節 各トレンチの所見	17
第3節 前方部主体部の所見	37
第4節 遺物	42
第4章 まとめ	42
第1節 外部施設について	42
規模の問題	42
墳形の問題	68
平面形	68
周堀の問題	69
墳丘における基壇の問題	69
墳丘第二段の問題	69
埴輪列の問題	70
第2節 内部主体について	70
第3節 遺物について	71
埴輪の問題	71
土器の問題	72
金属製品の問題	73
第4節 古墳の年代について	73
第5節 古墳の性格について	73

挿図目次

第1図 吾妻古墳遺物注記出土部位模式図	ii
第2図 吾妻古墳位置図	viii
第3図 吾妻古墳・周辺古墳分布図	2
第4図 吾妻古墳周辺地形図 (S = 1 : 5,000)	4
第5図 吾妻古墳墳丘模式図	5
第6図 吾妻古墳トレンチ配置図 (S = 1 : 1,200)	13・14
第7図 1トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	16
第8図 2トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	18
第9図 3トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	20
第10図 4トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	22
第11図 5トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	24
第12図 6トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	26
第13図 7トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	27
第14図 8・9トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	28
第15図 11トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	30
第16図 12・15トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	31
第17図 13トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	32
第18図 14トレンチ断面図 (S = 1 : 1,250)	33
第19図 17・18・19・20トレンチ断面図 (S = 1 : 250)	34
第20図 前方部主体部平面図 (S = 1 : 40)	36
第21図 前方部主体部断面図 (S = 1 : 40)	38
第22図 前方部主体部断面図 (S = 1 : 40)	39
第23図 前方部主体部西側面図 (S = 1 : 40)	40
第24図 前方部主体部東側面図 (S = 1 : 40)	41
第25図 1トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	42
第26図 1トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	43
第27図 7トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	44
第28図 7トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	45
第29図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	46
第30図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	47
第31図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	48
第32図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	49
第33図 9トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	50
第34図 11トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	51
第35図 13トレンチ出土朝顔形埴輪実測図 S = 1/5	52
第36図 14トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	53
第37図 14トレンチ出土円筒埴輪実測図 S = 1/5	54
第38図 形象埴輪実測図 (1) S = 1/3	55
第39図 形象埴輪実測図 (2) S = 1/3	56
第40図 形象埴輪実測図 (3) S = 1/3	57
第41図 形象埴輪実測図 (4) S = 1/3	58
第42図 形象埴輪実測図 (5) S = 1/3	59
第43図 形象埴輪実測図 (6) S = 1/3	60
第44図 形象埴輪実測図 (7) S = 1/3	61
第45図 土器実測図 S = 1/4	62
第46図 金属製品実測図 (1) S = 1/2・S = 1/1	62

第47図	金属製品実測図(2) S=1/2	63
第48図	金属製品実測図(3) S=1/2	67
第49図	金属製品実測図(4) S=1/1	68

表目次

第1表	吾妻古墳調査年次計画	1
第2表	藤井古墳群調査歴	5
第3表	吾妻古墳過去計測値 単位:m	9
第4表	円筒埴輪観察表(1) 単位:cm	64
第5表	円筒埴輪観察表(2) 単位:cm	65
第6表	形象埴輪観察表 単位:cm	66
第7表	土器観察表 単位:cm	67

図版目次

巻頭図版1 前方部主体部

横穴式石室 奥室(南からみる) 横穴式石室 奥室東側壁(西からみる)

巻頭図版2 前方部主体部

横穴式石室 平成21年度調査区(上が南) 横穴式石室 羨門及び川原石積み側壁(南からみる)

図版1 遺構(1) 1トレンチ

1トレンチ周堀外調査前状況(西から) 1トレンチ周堀内縁調査前状況(東から) 1トレンチ周堀外縁断面(南西から) 1トレンチ周堀断面(東から) 1トレンチ周堀断面テフラ確認状況(南から) 1トレンチ墳丘頂断面(南から) 1トレンチ墳丘第二段断面(東から) 1トレンチ墳丘第一段盛土断面(南から)

図版2 遺構(2) 1~3トレンチ

1トレンチ周堀外調査終了状況(西から) 1トレンチ周堀~墳丘調査終了状況(東から) 2トレンチ周堀外断面(南東から) 2トレンチ周堀外縁断面(西から) 2トレンチ周堀外縁断面(南から) 2トレンチ周堀外調査終了状況(西から) 3トレンチ周堀調査前状況(北から) 3トレンチ周堀外断面南半(南西から)

図版3 遺構(3) 3~4トレンチ

3トレンチ周堀外縁断面(西から) 3トレンチ周堀外縁断面(北から) 3トレンチ周堀外縁調査終了状況(北から) 4トレンチ周堀外調査前状況(北から) 4トレンチ周堀内縁発掘前状況(南から) 4トレンチ周堀外断面北半(南西から) 4トレンチ周堀外縁断面(北西から) 4トレンチ周堀内縁断面(南から)

図版4 遺構(4) 4~6トレンチ

4トレンチ周堀内縁底面付近断面(南西から) 4トレンチ周堀外調査終了状況(南から) 4トレンチ周堀内縁調査終了状況(南から) 5トレンチ周堀外断面北半(西から) 5トレンチ周堀外断面南半(西から) 5トレンチ周堀外縁断面(北西から) 5トレンチ周堀外縁調査終了状況(北から) 6トレンチ周堀調査前状況(東から)

図版5 遺構(5) 6~7トレンチ

6トレンチ周堀外断面(南東から) 6トレンチ周堀外縁断面(南東から) 6トレンチ周堀外調査終了状況(東から) 7トレンチ周堀調査前状況(東から) 7トレンチ周堀内縁調査前状況(南

西から) 7トレンチ墳丘第二段調査前状況(南西から) 7トレンチ周堀外断面(南東から) 7
トレンチ周堀外縁断面(南東から)

図版6 遺構(6) 7～8トレンチ

7トレンチ周堀内縁断面(南西から) 7トレンチ墳丘第二段断面(南から) 7トレンチ墳丘第
二段裾埴輪出土状況(南西から) 7トレンチ墳丘第一段盛土断面(南から) 7トレンチ周堀外
縁調査終了状況(東から) 8トレンチ墳丘調査前状況(南西から) 8トレンチ周堀調査前状況(東
南から) 8トレンチ墳丘第二段裾埴輪出土状況(西から)

図版7 遺構(7) 8～9トレンチ

8トレンチ周堀外縁断面(北東から) 8トレンチ周堀内縁断面(南西から) 8トレンチ墳丘第
二段裾断面(南西から) 9トレンチ周堀調査前状況(北から) 9トレンチ墳丘調査前状況(西
から) 9トレンチ周堀外縁断面(南東から) 9トレンチ周堀内縁断面(南西から) 9トレンチ
墳丘第一段断面(南から)

図版8 遺構(8) 9～11トレンチ

9トレンチ墳丘第二段断面(西から) 9トレンチ墳丘頂断面(南から) 9トレンチ周堀～墳丘
調査終了状況(南西から) 11トレンチ墳丘調査前状況(北から) 11トレンチ調査前状況(南か
ら) 11トレンチ周堀内縁断面(北西から) 11トレンチ周堀外縁断面(南西から) 11トレンチ
周堀外断面(北西から)

図版9 遺構(9) 11～12トレンチ

11トレンチ墳丘頂埴輪出土状況(北東から) 11トレンチ墳丘第一段断面(北西から) 11トレン
チ墳丘第二段断面(北から) 11トレンチ周堀～墳丘調査終了状況(北から) 11トレンチ周堀
外調査終了状況(北から) 12トレンチ周堀外調査前状況(北東から) 12トレンチ周堀外断面(北
東から) 12トレンチ周堀外調査終了状況(北から)

図版10 遺構(10) 13トレンチ

13トレンチ周堀外調査前状況(東から) 13トレンチ墳丘調査前状況(東から) 13トレンチ周
堀内縁断面(南東から) 13トレンチ周堀外縁断面(南西から) 13トレンチ墳丘頂断面(南西か
ら) 13トレンチ墳丘断面(南東から) 13トレンチ周堀外断面(南東から) 13トレンチ墳丘第
二段埴輪出土状況(南東から)

図版11 遺構(11) 13～14トレンチ

13トレンチ周堀外調査終了状況(東から) 13トレンチ周堀～墳丘調査終了状況(東から) 14
トレンチ突出部調査前状況(北から) 14トレンチ突出部内縁断面(南東から) 14トレンチ突出
部外縁断面(南西から) 14トレンチ突出部外断面(南西から) 14トレンチ突出部外縁遺物出土
状況(南東から) 14トレンチ墳丘調査前状況(南東から)

図版12 遺構(12) 14～16トレンチ

14トレンチ墳丘第二段裾埴輪出土状況(南東から) 14トレンチ墳丘断面(東から) 15トレン
チ調査前状況(北東から) 15トレンチ墳丘断面(西から) 15トレンチ墳丘断面(南西から)
15トレンチ墳丘断面(南東から) 16トレンチ調査前状況(北から) 16トレンチ藤井39号墳周
堀断面(南西から)

図版13 遺構(13) 16トレンチ・前方部主体部

16トレンチ調査終了状況(西から) 前方部主体部調査前状況(南から) 前方部主体部確認状況(南
西から) 前方部主体部上部埋没状況(西から) 前方部主体部下部埋没状況(東から) 前方部主
体部玄室埋没状況(東から) 前方部主体部玄室・前室埋没状況(東から) 前方部主体部前室確
認状況(南から)

図版14 遺構(14) 前方部主体部

前方部主体部前室確認状況(北から) 前方部主体部玄室確認状況(南から) 前方部主体部玄室
東側壁確認状況(西から) 前方部主体部玄室西側壁確認状況(東から) 前方部主体部前室(羨道)
確認状況(南から) 前方部主体部前室遺物出土状況(西から) 前方部主体部埋没状況(北から)
前方部主体部調査後処理状況(西から)

図版15 遺構(15) 前方部主体部

前方部主体部調査終了状況(南から) 前方部主体部入口部分上層確認状況(南から) 7前方部

主体部入口部分土層断面（西から） 前方部主体部羨門・川原石積み側壁（南西から） 前方部主体部羨門・川原石積み側壁（西から） 前方部主体部羨門・川原石積み側壁（東から） 前方部主体部羨門・川原石積み側壁（北から） 前方部主体部調査後処理状況（南東から）

図版 16 遺構（16） 2・3・5・6・17～20 トレンチ

2 トレンチ周堀内縁断面（南から） 3 トレンチ周堀内縁断面（西から） 5 トレンチ周堀内縁断面（西から） 6 トレンチ周堀内縁断面（北から） 17 トレンチ墳丘第一段覆土断面（南東から）

トレンチ墳丘調査前状況（南西から） 8 トレンチ周堀調査前状況（東南から） 8 トレンチ墳丘第二段裾埴輪出土状況（西から）

図版 17 円筒埴輪（1） 1・7 トレンチ

図版 18 円筒埴輪（2） 8・9 トレンチ

図版 19 円筒埴輪（3） 9・11・13・14 トレンチ

図版 20 形象埴輪 1・7・9・11・13・14 トレンチ・前方部主体部

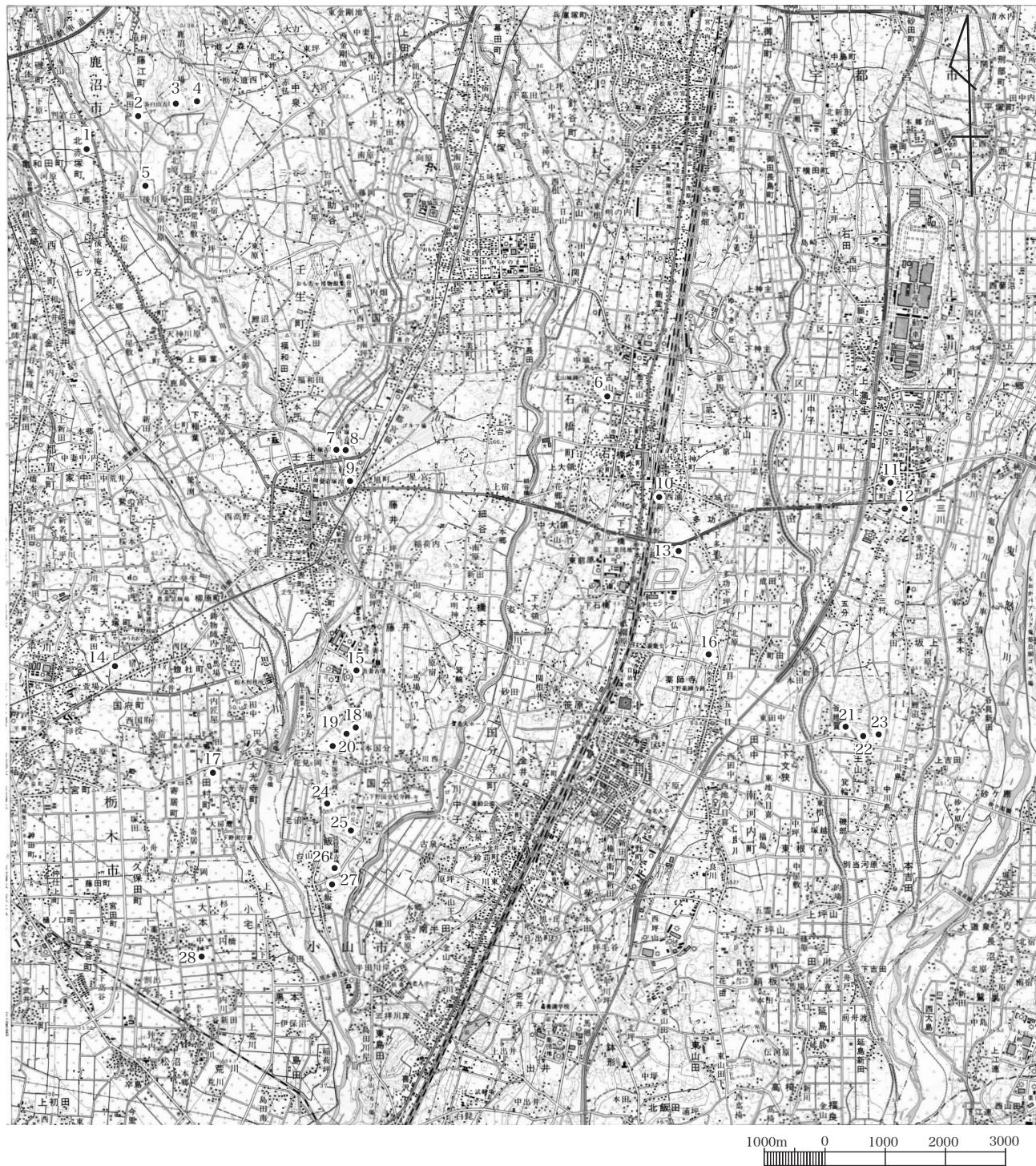
図版 21 形象埴輪・土器・鉄製品・銅錢

図版 22 鉄製品・銅製品・銀製品・金銀銅製品・ガラス製品

付図

付図 1 吾妻古墳全体図

付図 2 吾妻古墳発掘区配置図



- | | | | |
|----------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 判官塚古墳 | 8. 車塚古墳 | 15. 吾妻古墳 | 22. 三王山39号墳 |
| 2. 桃花原古墳 | 9. 壬生愛宕塚古墳 | 16. 御鷺山古墳 | 23. 三王山古墳 |
| 3. 茶臼山古墳 | 10. 下石橋愛宕塚古墳 | 17. 丸山古墳 | 24. 甲塚古墳 |
| 4. 富士山古墳 | 11. 上三川愛宕塚古墳 | 18. 丸塚古墳 | 25. オトカ塚古墳 |
| 5. 長塚古墳 | 12. 兜塚古墳 | 19. 山王塚古墳 | 26. 琵琶塚古墳 |
| 6. 横塚古墳 | 13. 多功大塚山古墳 | 20. 国分寺愛宕塚古墳 | 27. 摩利支天塚古墳 |
| 7. 牛塚古墳 | 14. 岩家古墳 | 21. 星の宮古墳 | 28. 篠塚稻荷古墳 |

第2図 吾妻古墳位置図

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

栃木県教育委員会では、昭和51年に始まる下野国庁跡の発掘調査以来、国・県の歴史を代表する遺跡の保存・活用を図るため、重要遺跡調査事業を継続して実施してきた。

平成13年度に調査を着手した長者ヶ平遺跡では、平成17年度までに遺跡範囲確認等の目的をほぼ達成したことから現地調査を終了し、平成18年度には報告書作成作業に着手した。これにより、平成18年度末には報告書刊行の目途が立ち、調査成果についても地元那須烏山市・さくら市に継承されて活用される見込みとなったことから、平成18年度中に新たな調査対象を決定し、平成19年度から調査に着手することとした。

新たな調査対象を検討するに当たり、過去の調査について成果や課題を整理したところ、これまで調査が長期にわたったためその成果を還元するまでに相当の時間を要したことや、地元市町との情報共有や連携が十分に図られていない事例があるなどの課題が指摘できた。これらを改善し、かつ事業目的、実施方法の明確化を図るために、重要遺跡調査方針を定めた。以下にその要点を記す。

1 楽旨 国・県の歴史を代表する遺跡について発掘調査を実施し、遺跡の保存と積極的な活用を図る。特に遺跡が所在する市町と連携して、資料・遺跡の保存・活用を図る。

2 事業実施の要点

- ① 県の歴史を代表する遺跡を重要遺跡として調査し、保存・整備の対象とする。
- ② 市町と連携し遺跡の保存・活用を図る。
- ③ 調査目的に的確かつ早急に対応する。
- ④ 遺跡の保護上は史跡指定が望ましい。指定の目標は国あるいは県指定とする。
- ⑤ 調査成果を市町に引き継ぎ、整備と管理・活用は市町が実施する。

なお、③については、1遺跡あたりの調査期間を3～5年を目安とする。また、既に国史跡等に指定されている遺跡については、今後の活用を目指した管理方針等を市町と協議した上で、史跡整備を目指した発掘調査を実施する。

3 調査体制 調査主体者を栃木県教育委員会、発掘調査担当者を(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターとする。学識経験者、教育関係者等の指導を受け、発掘調査の客観性を確保する。

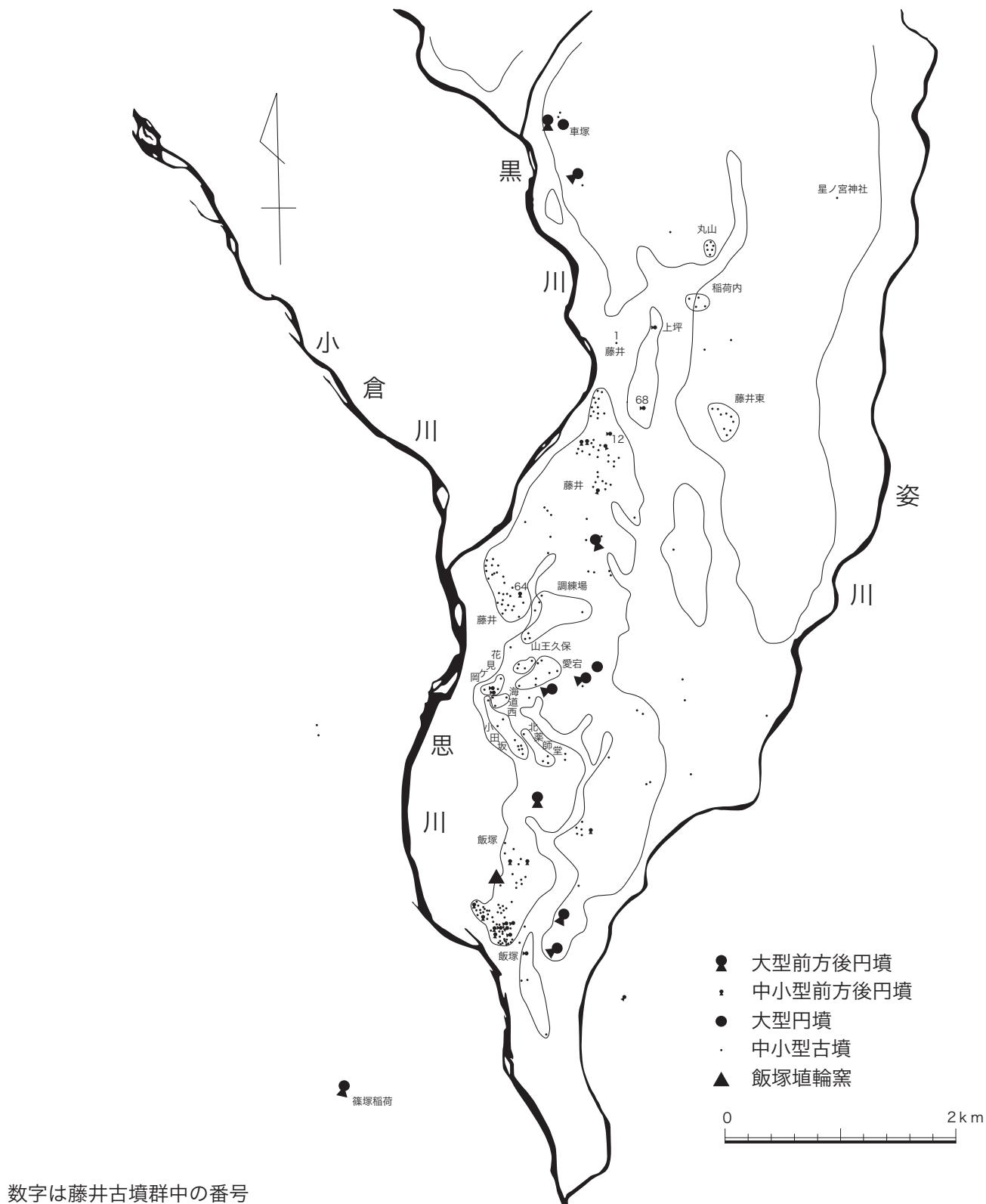
以上の方針のもと、平成17年度に市町教育委員会を対象として実施した「重要遺跡アンケート調査」の結果を参考にしながら調査対象候補19遺跡を検討した結果、吾妻古墳が最も適切であるとの結論を得て、古墳の範囲・規模、石室の残存状況等の確認を目的とした発掘調査計画を立案した。なお、吾妻古墳を調査対象とした主な理由としては、現在の指定範囲が十分であるか確認する必要があること、当遺跡が2市町にまたがって所在しており市町による調査が難しいこと、地元及び周辺市町が史跡活用に積極的であり、調査後の広範な活用が期待できることなどが挙げられた。

まず、地元市町との連携を図るため、平成18年9月27日、栃木市・壬生町の両教育委員会と協議し、前述の重要遺跡調査方針を説明の上で両市町に協力を要請したところ、快諾を得た。次いで、同年10月3日、文化庁と協議した結果、文化庁から計画に対する理解を得るとともに、現在の指定範囲が十分か検証するよう指導を受けた。こうして、地元市町及び文化庁との調整が整ったことから、平成19年度予算編成において吾妻古墳を調査対象とした重要遺跡調査事業の予算化を図った。

第1表 吾妻古墳調査年次計画

年 度	調 査 内 容	備 考
平成19年度	前方部側周辺調査、前方部墳丘・周溝調査、概要報告書作成 (主な調査目的:古墳範囲及び周辺の遺構の有無確認、古墳外形の把握)	現地説明会等の活用事業を実施
平成20年度	後円部側周辺調査、後円部墳丘・周溝調査、埋葬施設確認調査、概要報告書作成 (主な調査目的:古墳範囲及び周辺の遺構の有無確認、古墳外形の把握、後円部埋葬施設の有無確認、前方部埋葬施設の残存状況確認)	現地説明会等の活用事業を実施
平成21年度	くびれ部墳丘・周溝調査、埋葬施設確認調査、概要報告書作成 (主な調査目的:古墳範囲及び周辺の遺構の有無の確認、古墳外形の把握、前方部埋葬施設の残存状況確認)	現地説明会等の活用事業を実施
平成22年度	後円部墳丘・前方部墳丘確認調査、埋葬施設確認調査、調査報告書作成 (主な調査目的:古墳外形の把握、後円部埋葬施設の有無確認、前方部埋葬施設の残存状況確認)	現地説明会等の活用事業を実施

平成19年度から平成22年度まで実施した発掘調査に当たっては、トレーナーの掘削は覆土のみに止めて墳丘盛土や石室などの遺構は掘削しないことを原則とするなど、史跡の保存を前提とした調査計画を策定した。さらに、毎年度、この計画に基づき文化庁へ現状変更の許可を申請して許可を得るとともに、地権者や地元市町などの関係者・関係機関との協議・調整を行った上で現地調査に着手した。なお、計画立案当初は調査期間を3カ年としていたが、調査の進捗に伴い墳丘や石室規模についてより詳細を確認する必要が生じたことから、平成20年度に調査期間を4カ年に変更し、調査終了年度を平成22年度とした。



第3図 吾妻古墳・周辺古墳分布図

第2節 調査方法と経過

次のことを目的としてトレンチを設定した。

1. 周堀外の遺構（周堤帯、二重目の周堀）の有無
2. 墳形（墳端）の確定
3. 墳丘表面の観察（葺石、埴輪の有無）
4. 周堀内の観察（覆土の状況、深さ）
5. 前方部にあるとされている、埋葬主体部の残存状況の確認
6. 後円部、括れ部における主体部の有無の確認
7. 括れ部東側に存在する、陸橋状の突出部の性格の確認
8. 藤井43号墳とされている、墳丘第一段平坦面上の地膨れの性格の確認

調査に当たっては、測量図の提供を壬生町教育委員会より受けた。測量図は、壬生町史編さん時に作成したものである。その時の測量杭は滅失していたので、新たに墳丘主軸に沿った測量杭を建植し、それを使用してトレンチを設定することとした。測量図は世界測地系適用以前のものなので、測量図上にも新たに世界測地系の座標を落とした。

平成19年度は前方部を中心に調査を行った。現地での調査は10月から開始した。最初にトレンチを設定するために、危険な立木の伐採、下草刈りを行った。立木は人力で運搬できる長さに切りそろえ、指定地内にまとめて置いた。各トレンチは幅1～2mに設定した。周堀外は、表面観察の段階で遺構の存在の可能性が薄いと判断できたこと、最初に行った7トレンチ周堀外の人力による掘削の結果、遺構が認められなかつたことから、1～6トレンチの周堀外は、11月に重機を利用して掘削を行った。その結果、当初の予想通り、周堀外では各トレンチとも周堀等の古墳時代の施設は確認できなかった。墳丘と周堀内は人力で掘削を行つた。周堀内は予想に反して、覆土が薄く、短期間で底面まで掘り下げることができた。墳丘上は墳丘第一段（基壇）に盛土が施されていることが判明し、一部旧表上面まで断ち割りを行つた。第一段平坦面上では、墳丘第二段裾付近からの埴輪の出土が最も多かった。墳丘上では斜面、頂上の平坦面共に埴輪が出土したので、それらの記録を行つた。これらの成果は県民に速報するために、平成20年1月20日（日）に現地説明会を行つた。見学者は250名に達し、盛況であった。現地での調査を終了後、トレンチの埋め戻しを行い、撤収した。遺物は収納箱約20箱分であった。その後概報作成を行い、平成20年3月28日付けで刊行した。

平成20年度は、後円部側を中心にトレンチを設定した。調査に当たっては、前年度に壬生町教育委員会より提供を受けて作成した測量図を使用し、新たに墳丘主軸に沿った測量杭を建植し、それを使用してトレンチを設定することとした。トレンチは昨年度設定した7トレンチに続いて時計回りに8～14トレンチまで設定し、43号墳部分を15トレンチとした。折しも、壬生町教育委員会が藤井39号墳の発掘調査を行つてゐた。吾妻古墳との関係を明らかにするため、両古墳を見通せるような16トレンチを設定した。これらのうち、平成20年度は9・11・12・13・16トレンチを掘り下げた。

現地での調査は10月から開始した。トレンチを設定するために、最初に危険な立木の伐採、下草刈りを行つた。平成20年度は雨が多く、12月になっても周堀底の水たまりが消えなかつたので、安全に留意しながら調査を行つた。各トレンチは幅1～2mに設定した。周堀外は、表面観察や前年度の調査地区で遺構が認められなかつたことから、本年度の対象地区も遺構の存在が薄いことが予想されたので、11～13トレンチの周堀外は、10月に重機を利用して掘削した。その結果、当初の予想通り、周堀外では各トレンチとも古墳時代の遺構は確認できなかつた。墳丘と周堀内は人力で掘削を行つた。周堀内は覆土が薄く、短期間で底面まで掘り下げることができた。墳丘上でも、昨年度同様、墳丘第一段（基壇）に盛土が施されていることが判明した。遺物はほとんどが埴輪の破片で、墳丘第二段裾付近からの出土が最も多かった。その量は中型の遺物収納箱で6箱分に達した。すべて原位置を保たないものだったので位置を記録して取り上げた。前方部では、いわゆる「吾妻の岩屋」を探索するため、昨年度調査した4トレンチ北側部分とそれを北側に延長したトレンチと、前方部頂から15mの位置で墳丘主軸に直交させたトレンチを掘り下げたところ、青灰色の硬質の大型石材を発見した。そこでトレンチを拡張した結果、側壁、奥壁を確認したので、横穴式石室による主体部と判断した。この調査によって、これまで古文書や絵図でしかその様子が分からなかつた「吾妻の岩屋」の実態を確認することができた。16トレンチでは、藤井39号墳の周堀を確認した。これは周堀外で発見された唯一の古墳時代遺構となった。吾妻古墳との重複は見られなかつたが、国指定地内にまで藤井39号墳の周堀が延びていることが明らかとなつた。これらの成果は県民に速報することとし、平成20年12月13日（土）に現地説明会

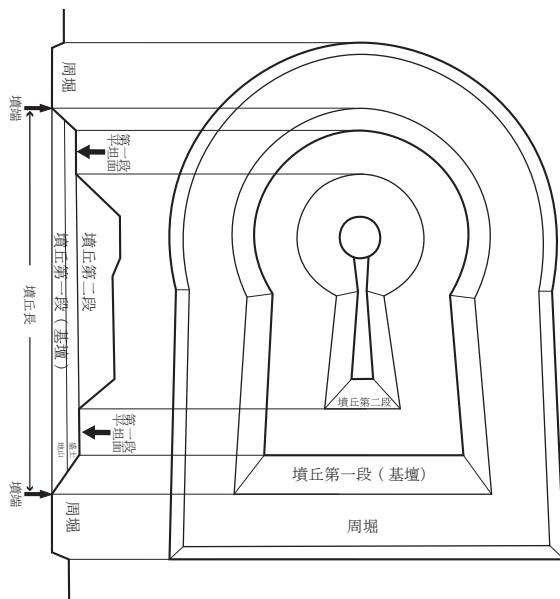
を行った。見学者は250名程集まり、テレビや新聞の取材もあり、活況を呈した。調査終了後、トレンチの埋め戻しを行い、12月25日に現地を撤収した。その後埋蔵文化財センターで遺物や図面の整理、概報作成を行い、平成21年3月27日付けで刊行した。

平成21年度は、藤井43号墳とされている地区、くびれ部、前方部主体部の調査を行った。藤井43号墳とされている地区は墳丘第一段上に僅かな地膨れとなっている。15トレンチを設定して調査したところ、墳丘盛り土の覆土上に形成されており、古墳の施設ではないことが判明した。墳丘東側では周堀の内外縁が周堀内に向かって突出する地区があり、従来から、造出若しくは陸橋と考えられてきた。この地区に14トレンチを設定して調査したところ、黒色の自然埋没の覆土上に、突出部を構成する明褐色のローム混じりの層が載ること、平安時代の灰釉陶器、古銭（開元通寶、永楽通寶）が出土したことから、後世に形成されたと判断でき、古墳の施設ではないことが判明した。

前方部主体部は、前年度に確認された横穴式石室の玄室部分の各壁が巨大な一枚石で構成されていることが明らかになったが、その前面から墳丘端まで地区的様相は不明であり、全体的な構造が不明であった。今回は、玄室部分の床面の残存状況、主体部前半の構造を解明するために調査を行った。玄室内は明治期の埋め戻しによる鹿沼土を主体とした土が充填されていたが、東側半分のみを除去して床面探索を行った。その結果、側壁が載る面よりさらに低い位置まで攪乱が及んでおり、近世の陶磁器が出土した。特筆されるのは、初めて、玄室前面で幅1.70mの川原石小口積みの側壁が確認され、古文書で不明だった、主体部全体の構造の一端が明らかになったことである。奥壁内面から約7mまで確認されたが、さらに南側に延びている。この部分からは挂甲小札の破片、ガラス玉が出土した。そのため、排出した土を篩にかけて遺物を探した。こ



第4図 吾妻古墳周辺地形図 (S=1:5,000)



第5図 吾妻古墳墳丘模式図

これらの成果をもって、平成22年1月17日(日)に現地説明会を行った。見学者は420名程集まり、テレビや新聞の取材もあり、前年度以上の活況を呈した。説明会後、トレンチの埋め戻しを行っている間も見学者は多く、最終的には520名を超えた。調査終了後、1月25日に現地を撤収した。その後埋蔵文化財センターで遺物や図面の整理を行った。遺物の量は収納箱約18箱分であった。調査中、玄室の巨石や赤色塗彩物の種類を知るため理化学分析を行った。その結果、巨石の種類は閃緑岩であること、赤色顔料は針鉄鉱であることが判明した。現地での調査終了後、前方部以外の主体部の有無を確かめるために、後円部から括れ部にかけての地区で、墳丘第二段中位から裾の東側で、電気探査を行った。その結果、2か所で異常地点を検出した、地表下1~2mの範囲内で比較的大きな石などが土中に存在する可能性があり、横穴式石室のような大規模な石材を捉えた異常とは考えにくいが、東西に連続して表れていることから、排水のための暗渠のような遺構の可能性も想定できた。

平成22年度は、前方部隅角、後円部、前方部の主体部の調査を行った。

前方部隅角の位置を確認するため、平成19年度に設定した2・3・5・6トレンチを延長して、墳丘第一段から周堀にかけて設定した。前方部主体部では前方部墳頂の杭3から19mと26mの間、杭3と杭7を結んだ線から西へ3mまでの間を前方部トレンチ、杭7から主軸線に直交した東西に17・18トレンチを設定した。後円部では平成21年度の電気探査で反応のあった地区で主体部の有無を確認するため、19・20トレンチを設定した。各トレンチでは墳丘端を確認し、古墳の規模を確定するための数値を得ることができた。19・20トレンチでは主体部の存在を示す資料は得ることができず、後円部には横穴式石室のような大規模な埋葬主体は存在しないと判断するに至った。前方部主体部は横穴式石室の入口となる凝灰岩の切石を発見した。さらにこれまで未確認であった金銀製品が発見され、石室内の具体的な内容が次第に明らかになってきた。

これらの成果をもって、平成22年12月19日(日)に現地説明会を行った。見学者は271名程集まり、テレビや新聞の取材もあり、関心の高さを窺わせた。説明会後、トレンチの埋め戻しを行って、12月28日に現地を撤収した。その後埋蔵文化財センターで遺物や図面の整理を行った。遺物は収納箱約8箱分であった。

平成23年3月30日に報告書を刊行し、これを以て吾妻古墳の調査報告をすべて終了した。

第1表 藤井古墳群調査歴

調査年	調査者	調査古墳
1893	野寺茂平	42号墳(吾妻古墳)石室内
1964~66	栃木県教育委員会	13~19・25・28~30・36・38号墳
1980	壬生町教育委員会	44・45号墳
1987	栃木市教育委員会	51・52号墳
1990	栃木市教育委員会	78・79号墳
1991	壬生町教育委員会	38号墳
1996	壬生町教育委員会	47号墳
2000	壬生町教育委員会	34・36号墳
2007	栃木県教育委員会	42号墳(吾妻古墳)
2008	栃木県教育委員会	42号墳(吾妻古墳)
2008	壬生町教育委員会	39号墳
2009	栃木県教育委員会	42号墳(吾妻古墳)
2010	栃木県教育委員会	42号墳(吾妻古墳)

第2章 遺跡の周辺と研究小史

第1節 地形と河川

吾妻古墳は、下都賀郡壬生町大字藤井字吾妻1051-2・栃木市大光寺町字吾妻原2969に所在し、黒川と小倉川(下流では思川と名を変える)の合流する地点の左岸台地上に位置する。黒川、思川はともに足尾山地

に源を発し、山間を南東に流れる。吾妻古墳のそばの合流点付近からは流れを南に変えるが、小山市に入るとさらに南西に流れを変え、渡良瀬川に合流する。吾妻古墳を載せる台地は、国谷台地中位面に相当し、北は壬生町安塚付近から、南は小山市飯塚付近までを占めているが、吾妻古墳の北方約2kmの、台坪付近で細く低くなっている。それ以南が独立丘陵状を呈する。藤井付近の標高は55～56mである。西側は江川、黒川、思川に面して崖面を形成し、東側は姿川に面している。古墳が所在する台地面は、西側が河川に直接面しているが、東側の姿川との間には谷一条が入る。この谷は、北は壬生町星ノ宮の巖島神社付近から始まり、南は下野市紫付近の姿川の低地にまで及ぶ。姿川は宇都宮市鞍掛山付近に源を発し、宝木台地西縁を南に流れ、小山市黒本で思川に合流する。その合流点付近には摩利支天塚・琵琶塚古墳が位置している。吾妻古墳はこの谷の中央付近の西側縁辺に所在している。古墳付近はほぼ平坦であるものの、前方部南東隅角付近からこの谷に合流する小支谷が延びている。吾妻古墳を直接臨めるのは、この小支谷だけで、黒川等の大河川からは直接には臨めない、奥まった位置にある。

参考文献

阿久津純 1984 「I 地形分類図」『土地分類基本調査』 栃木県企画部土地対策課

第2節 吾妻古墳の現状

古墳はコナラ等の落葉広葉樹が主体を占める平地林の中にある。赤松も混じるがそのほとんどが立枯れしており、落葉広葉樹を中心とした林に変りつつある。周堀外北東側や南側には杉が植樹されている。周辺には工場や集積場が作られ、開発が進みつつあるものの、墳丘や周堀の遺存状況は良好である。野ウサギやキツツキ類が生息しており、自然環境も比較的良好に残っている。

墳丘は、主軸N-11°-Wで前方部が南東を向いており、二段が確認できる。一段目は低く幅広いので、基壇と呼ばれている。後円部墳丘第二段には北側斜面に山道に伴う崩れが見られる。この窪みは、近所の住民の話によると、以前はかなり深い穴であったということである。しかし、墳頂には掘削に伴うような窪みは見られず、主体部の存在を示すような痕跡は認められない。墳頂では平坦面が狭く、括れ部ではほとんど見られない。前方部墳丘第二段は、前端部分が窪んでいるが、石室は完全に埋没しており、調査前は視認することができなかった。石材を取り出したときに押し出された土砂の高まりが前方部墳丘前端第一段の平坦面から斜面にかけて見られる。また、後円部墳丘第一段平坦面東側には、藤井43号墳とされた直径5m程の高まりが見られる。くびれ部東側の墳丘第一段斜面と周堀外縁には土手状の高まりが周堀の内外をつなぐかのように突き出しており、陸橋若しくは造出と考えられていた。以上のものを除くと、墳丘第一段は平坦な面が一周している。周堀外縁の西側は墳丘に沿って前方後円形を描くが、東側はくびれ部南側付近が最もふくらんでおり、左右対称にはならない。

周堀外西側には低い土手状の高まりが見られる。後円部付近から北側に向かい、古墳の外縁から離れて北側に直線的に延びている。平成19年度の調査では古墳築造時の遺構ではないと判断できた。後円部西側外縁付近には藤井39号墳がその高まりに近接して存在する。前方部南西側は高まりの西縁に沿って舗装道路が作られており、後円部西側で西に折れていく。

古墳内には、後円部北側周堀外から周堀内に降りて墳丘上へ至る小道が、北西部から南に延びている。この道は古墳の周堀外縁、墳丘内縁をやや窪めて作られている。周堀底面は、降雨時に水たまりができる箇所があるものの、ほぼ平坦であり、堀底を容易に一周できる。周堀底面は北部と西部が高く、南部と東部が低い。底面の高低差は60～70cmほどで、この規模の古墳としては小さい。後円部北東側周堀外には地境に沿って走る小道がある。この小道は東側と南側は指定地外まで延びている。砂利が敷かれており、人通りも現在より多かったものと思われる。

第3節 周辺の主な遺跡

吾妻古墳は古墳時代後期の大型前方後円墳である。吾妻古墳周辺には同時期の大型古墳が、鹿沼市南部、壬生町、下野市、小山市北部にかけての、思川と田川の流域に集中して存在する。それらは、黒川・思川の方向から見ると、比較的台地奥に築造されており、黒川・思川から直接見えないものが多い。しかし吾妻古墳同様小支谷に面しているものが多く、低地からの通行、生産基盤との関係を予測させる。県内には大型古墳が複数存在する地域はみられるが、これほど密集する地域は他に存在しない。

この地域の大型古墳のうち最初に築造されたと考えられているのは、吾妻古墳の約3.5km南に位置する小山市摩利支天塚古墳（墳丘長120.5m）（岩崎・森田・富永・稻葉・鈴木1983）・琵琶塚古墳（123.1m）（岩崎・三沢・三沢1994）である。これ以前の大型古墳は、約11.5～12.5km北東に位置する、5世紀前半に築造された宇都宮市笛塚古墳（辰巳1976）、5世紀中葉に築造された塚山古墳（常川・石川・熊倉1979、石部1990、石部・斎藤1991、石部他1995）である。5世紀中葉から後葉にかけて塚山古墳群が形成された後に、摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳が築造されたと考えられている。摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳はいわゆる基壇を持たず、埴輪も塚山古墳以来の特徴を残しているので、前代からの系譜を引き継いでいると考えられる。このことから、首長権が宇都宮南部からこの地域へ移動したと想定されている。ただ、より近接する小山市北部には、思川低地の寒川古墳群（久保他1981）で5世紀後葉の茶臼塚古墳（77m）（八巻・尾島1979）、6世紀前葉の三味線塚古墳（55m）（三沢・鈴木1980）やや北方には6世紀後葉の篠塚稻荷古墳（62m）（森田1981）というように、大型古墳が継続的に築造されており、先行する勢力が存在していたことを窺わせ、集団自体の移動を考えなくてもよい状況にある。それに対して、吾妻古墳も含めて思川・田川地域の台地上の大型古墳は摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳以降に築造されたと考えられている。

吾妻古墳と同様の幅広い墳丘第一段平坦面を有する前方後円墳には、約10km北に壬生町茶臼山古墳（91m）・長塚古墳（77m）（君島2002）、判官塚古墳（60.9m）（津野2009）、約3km北に愛宕塚古墳（78m）（君島2005）・牛塚古墳（60m）（君島1993）・約1～2km南に下野市山王塚古墳（90m）（小森・黒田1988、1989、1990）・国分寺愛宕塚古墳（78.7m）（山越1979）・甲塚古墳（66m）（秋本・大橋・水沼1989、国分寺町教委2005、山口・木村2008）、約6km北東に横塚古墳（70m）（岩淵・田代1984）・約6km東に御鷲山古墳（85m）（山ノ井・水沼1992）・約8.5km東に三王山古墳（80.5m）（水沼1992）がある。

これらよりやや離れた地域では、約13km北に鹿沼市下台原古墳（73m）（内山1985）、約16km東に真岡市八木岡瓢箪塚古墳（111.1m）（山越1976、秋元2007）、約31～2km南西に足利市正善寺古墳（103m）（前澤・市橋・柏瀬・足立1989、前澤・市橋・柏瀬1990）・永宝寺古墳（66m）（斎藤2002、2004）がある。

吾妻古墳の周囲には群集墳の藤井古墳群（大和久1967、稻葉・中山1983、木村1988、山ノ井1990、君島2001、君島2010a・2010b）がある。南北2.2km、東西1.3kmの範囲に83基の古墳が確認されており、吾妻古墳はその中で42号墳と名付けられている。ただ、吾妻古墳の周辺は比較的密集度が低く、藤井38号墳（君島1993）のように直径50m代と考えられる大型円墳も存在するので、単純に全てを群集墳とは言えない側面も有している。藤井12号墳（黒崎・平山1997）、藤井64号墳（旧国府村34号墳：小森・太田・津布楽1987）のような中小型前方後円墳もあるが（第3図）、墳丘は円墳が多数を占め、埴輪を持つものもある。内部主体には竪穴式小石室や横穴式石室が採用されている。家型石棺の出土も伝えられるが現在は不明である。横穴式石室は玄室が胴張り形で玄門を有し、両袖型である。周溝から続く溝状の墓道を持つものが多い。中には石組みの前庭部を持つものもある。

藤井古墳群の南、吾妻古墳の2.5～3.5km南には、摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳と小支谷を隔てた西側に飯塚古墳群（鈴木1999、2001）がある。秋元陽光・大橋泰夫は藤井古墳群と飯塚古墳群を一体のものととえている。藤井古墳群に比べると、鈴杏葉等を出土した竪穴系埋葬施設を持つ飯塚31号墳等に古い様相が認められ、その形成は藤井古墳群より早くはじまると考えられる。飯塚27号墳はくびれの弱い前方後円墳の前方部前端に主体部を有し、吾妻古墳と類似した様相を呈する。横穴式石室は玄門を持たず、玄室と羨道の区別が不明瞭なものが多く、竪穴系横口式石室に類似し、藤井古墳群の横穴式石室と構造が異なったものが多数を占める。主体部内に鉄器を多数副葬する古墳が多い。

藤井古墳群と飯塚古墳群の間にも、群集墳が存在する（第3図）。北から調練場古墳群、花見ヶ丘古墳群、山王久保古墳群、愛宕古墳群、海道西古墳群、小田坂古墳群、北薬師堂古墳群と呼ばれている（国分寺町教育委員会2001）。これらの古墳群の中には中型の前方後円墳を含むもの（旧国分寺村第45号墳：黒崎・平山・飯田1995、旧国分寺村第44号墳：黒崎・篠原・平山1996）もあり、それぞれに独自の形成過程が想定される。飯塚古墳群の東、琵琶塚古墳の北にはオトカ塚古墳（39m）（山口・木村2007）がある。飯塚27号墳同様、前方部前端に主体部を有する点が吾妻古墳と共通するが、前方部が短い、帆立貝形である点は、前述の甲塚古墳に類似する。これらの群集墳は6世紀後半から7世紀前半にかけて形成されたと考えられている。大型前方後円墳とは異なり、黒川・思川に面した崖面の方向に密集する傾向がある。

古墳以外では発掘によって明らかになった遺跡は少ないが、吾妻古墳東側に隣接して吾妻遺跡（吉岡・矢野1989、株式会社光伸1992、君島1993）がある。吾妻遺跡は奈良・平安時代の集落を主体とした遺跡であるが、近年C地点では古墳時代前期の竪穴住居跡が発見され、吾妻古墳築造以前の集落の存在が確認できた。現在

の所、古墳時代後期の遺構は発見されておらず、墓域に接するため、集落が形成されなかつた可能性がある。この傾向は壬生町では他の地域でも窺われる。谷を挟んだ東側の台地上には藤井馬場遺跡(大金 1987)がある。古墳時代前期・中期、平安時代の土師器が採集されており、集落を形成していたと考えられる。

参考文献

- 秋元陽光 2007 「栃木県の前方後円墳ノート4－鬼怒川以東の前方後円墳－」『栃木県考古学会誌』第28集 栃木県考古学会
- 秋元陽光・大橋泰夫・水沼良浩 1989 「国分寺町甲塚古墳調査報告」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会
- 石部正志 1990 「塚山古墳（第一次調査概要）」『宇都宮市文化財年報平成元年度』第6号 宇都宮市教育委員会
- 石部正志・齋藤恒夫 1991 「塚山古墳（第二次・三次調査概要）」『宇都宮市文化財年報』第7号 宇都宮市教育委員会
- 石部正志他 1995 「塚山古墳外形確認調査報告」『峰考古』第9号 宇都宮大学考古学会
- 稻葉輝雄・中山晋 1983 『栃木県壬生町 藤井古墳群発掘調査報告書－44・45号古墳－』壬生町埋蔵文化財報告書第3集 壬生町教育委員会
- 岩崎卓也・森田久男・富永則子・稻葉英男・鈴木一男 1983 『摩利支天塚古墳・環境整備事業に伴う確認調査報告書』小山市文化財調査報告第14集 小山市教育委員会
- 岩崎卓也・三沢正善・三沢京子 1994 『琵琶塚古墳発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第30集 小山市教育委員会
- 岩淵一夫・田代隆 1984 「横塚古墳」『石橋町史 第一巻 史料編（上）』石橋町史編さん委員会
- 内山敏行 1985 「下台原古墳」『下野考古学』7 下野考古学研究会
- 大金宣亮 1987 「藤井馬場遺跡」『壬生町史 資料編 原始古代・中世』壬生町史編さん委員会
- 大川清・中山哲也 1991 『栃木県壬生町 藤井78・79号古墳』壬生町教育委員会報告第8冊 壬生町教育委員会
- 大和久震平 1966 「壬生町藤井古墳群」『栃木県考古学会誌』第1集 栃木県考古学会
- 大和久震平 1967 『藤井古墳群発掘調査報告書』壬生町埋蔵文化財報告書第1冊 壬生町教育委員会
- 大和久震平 1972 「第五章古墳文化 第一節概観 一墳形（一）前方後円墳・第二節古墳の分布と主要古墳 四姿川・思川流域 吾妻岩屋古墳」大和久震平・塙静夫『栃木県の考古学』吉川弘文館
- 大和久震平 1972 「古墳文化 飯塚埴輪窯跡」大和久震平・塙静夫『栃木県の考古学』吉川弘文館
- 株式会社光伸 1992 『栃木県壬生町 吾妻遺跡B地点』壬生町埋蔵文化財報告書第12冊 壬生町教育委員会
- 君島利行 1993 「吾妻遺跡B地点」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 平成3年度』栃木県埋蔵文化財調査報告第129集 栃木県教育委員会
- 君島利行 1993 「牛塚古墳」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 平成3年度』栃木県埋蔵文化財調査報告第129集 栃木県教育委員会
- 君島利行 2001 『栃木県壬生町 藤井古墳群－壬生町埋蔵文化財調査報告書第1集復刊－－藤井 34号・36号・38号・46号古墳－』壬生町埋蔵文化財調査報告書第17集 壬生町教育委員会
- 君島利行 2002 『栃木県壬生町 長塚古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第18集 壬生町教育委員会
- 君島利行 2005 『国指定史跡 愛宕塚古墳－測量調査及び表採資料報告書－』壬生町埋蔵文化財調査報告書第20集 壬生町教育委員会
- 君島利行 2010a 『藤井39号古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第24集 壬生町教育委員会
- 君島利行 2010b 「藤井39号古墳」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報32 平成20年度（2008）』栃木県埋蔵文化財調査報告第327集 栃木県教育委員会
- 木村等 1988 『藤井51・52号古墳発掘調査概報』栃木市文化財調査報告第3集 栃木市教育委員会
- 久保哲三他 1981 「寒川古墳群」『小山市史 資料編・原始古代』小山市史編さん委員会
- 黒崎淳・平山剛宏・飯田光央 1995 「旧国分寺村第45号古墳墳丘測量調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第9号（平成6年度版）栃木県教育委員会
- 黒崎淳・篠原真理・平山健一郎 1996 「旧国分寺村第44号古墳墳丘測量調査報告・旧国分寺村第45号古墳石

室実測調査報告』『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第10号（平成7年度版）栃木県教育委員会

黒崎淳・平山剛宏 1997 「藤井12号墳測量調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第11号（平成8年度版）栃木県教育委員会

国分寺町教育委員会 2005 『栃木県国分寺町 甲塚古墳－平成16年度規模確認調査－』国分寺町町教育委員会

小森紀男・太田晴久・津布樂一樹 1987 「旧国府村34号墳墳丘測量調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第1号（昭和61年度）栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

小森紀男・黒田理史 1988 「国分寺町山王塚古墳第1次発掘調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第2号（昭和62年度）栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

小森紀男・黒田理史 1989 「国分寺町山王塚古墳第2次発掘調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第3号（昭和63年度）栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

小森紀男・黒田理史 1990 「国分寺町山王塚古墳第3次発掘調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第4号（平成元年度）栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

斎藤和行 2002 「永宝寺古墳第1次発掘調査」『平成12年度文化財保護年報』足利市埋蔵文化財調査報告第46集 足利市教育委員会

斎藤和行 2004 「永宝寺古墳第2次発掘調査」『平成14年度文化財保護年報』足利市埋蔵文化財調査報告第50集 足利市教育委員会

鈴木一男 1999 『飯塚古墳群III－遺構編－』小山市埋蔵文化財報告第44集 小山市教育委員会

鈴木一男 2001 『飯塚古墳群III－遺物編－』小山市埋蔵文化財報告第44集 小山市教育委員会

辰巳四郎 1976 「笹塚古墳」『栃木県史 資料編考古一』栃木県史編さん委員会

常川秀夫・石川均・熊倉直子 1979 『塙山古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第32集 栃木県教育委員会

津野仁 2009 『青竜渕遺跡・皇宮前塙』栃木県埋蔵文化財調査報告第317集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

中山晋・稻葉輝雄 1983 『栃木県壬生町 藤井古墳群発掘調査報告書－44・45号古墳－』壬生町埋蔵文化財報告書第3集 壬生町教育委員会

前澤輝政・市橋一郎・柏瀬順一・足立佳代 1989 「正善寺古墳第1次発掘調査」『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第20集 足利市遺跡調査団・足利市教育委員会

前澤輝政・市橋一郎・柏瀬順一 1990 「正善寺古墳第2次発掘調査」『平成元年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第22集 足利市教育委員会

三沢正善・鈴木一男 1980 『三味線塙古墳調査報告書』小山市文化財調査報告書第9集 小山市教育委員会

水沼良浩 1992 「三王山古墳」『南河内町史 史料編1 考古』南河内町史編さん委員会

壬生町教育委員会 2001 『壬生町遺跡分布調査報告』壬生町埋蔵文化財調査報告書第16集 壬生町教育委員会

森田久男 1979 「飯塚埴輪窯跡」『栃木県史 資料編考古二』栃木県史編さん委員会

森田久男 1981 「篠塚稻荷古墳」『小山市史 資料編・原始古代』小山市史編さん委員会

八巻一夫・尾島忠信 1979 『茶臼塚古墳群 県営圃場整備事業地内遺跡発掘調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告

第27集 栃木県教育委員会

山口耕一・木村友則 2007 『才トカ塚古墳』下野市埋蔵文化財調査報告第2集 下野市教育委員会

山口耕一・木村友則 2008 「下野国分寺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 平成18年度(2006)』栃木県埋蔵文化財調査報告第315集 栃木県教育委員会

山越茂 1976 「瓢箪塚古墳」『栃木県史 資料編考古一』栃木県史編さん委員会

山越茂 1979 「愛宕神社古墳」『栃木県史 資料編考古二』栃木県史編さん委員会

山ノ井清人 1987 「吾妻古墳」『壬生町史 資料編 原始古代・中世』壬生町史編さん委員会

第2表 吾妻古墳過去計測値(単位:m)

文献	大和久 (1972)	山 越 (栃木 県史 1979)	山 越 (壬生 町史 1987)	山 ノ 井 (2000) ・ 斎 藤 (1997) ・ 稲 垣 (2000)
計測箇所				
周堀外縁長	180	165.1		165
墳丘第一段下端長				134
墳丘第一段平坦面長		115	117	
墳丘第一段平坦面後円部径		74.3	72.4	
墳丘第一段平坦面前方部幅		65.5	66	
墳丘第一段平坦面括れ部幅			62	
墳丘第二段下端長	90	84.7	85.6	
墳丘第二段後円部径	45	41.7	44	
墳丘第二段前方部幅	45	41.1	42.2	
墳丘第二段括れ部幅			28	

全長

- 山ノ井清人 1990 「藤井古墳群」『壬生町史 資料編 原始古代・中世 補遺』 壬生町史編さん委員会
 山ノ井清人・水沼良浩 1992 「御鷲山古墳」『南河内町史 史料編 1 考古』 南河内町史編さん委員会
 吉岡秀範・矢野淳一 1989 『栃木県壬生町 吾妻遺跡』 日本窯業史研究所報告第 26 冊 日本窯業史研究所

第4節 研究小史

吾妻古墳の存在は江戸時代から知られていたようで、石室が露出していたと思われる。『壬生町領史略』に墳丘と石室の記述が見られる（碧山 1850）。明治期の『下野國古墳図誌』には、明治初年壬生藩の領主鳥居忠文が赤見堂の庭地に石材を移設したこと、1893（明治 26）年 10 月野寺茂平が石室内を発掘し、懸仏 2 枚と古錢数枚が発見されたことが記述されている（著者不明 1900 s）。石室は長さが六尺（1.81 m）、幅・高さが三尺五寸（1.06 m）と記されている。現在石室の露出が見られないことから、明治以後に埋没が進んだと考えられる。赤見堂の庭地に移設された石材のうち、凝灰岩の玄門石一枚と天井石一枚が壬生町歴史民俗資料館敷地内に保管されている。これとは別に、吾妻古墳から運び出されたという伝承のある石材が藤井小学校にも一枚保管されている。

栃木県の古墳の概説を最初に行ったのは大和久震平であり、その際に吾妻古墳についての記述を行った（大和久 1972）。大和久は、周堀と墳丘の間に広い平坦面を有する形状に注目し、墳丘の段築というには幅が広く、低すぎるため、「基壇」と名付け、墳丘は小さいが占有面積は大きいという墳形の特徴を最初に指摘した。このような墳形の古墳が、栃木県に分布し、中期型の壬生茶臼山古墳・三王山古墳ではまだ明確な平面を形成せず、墳丘の裾からなだらかな斜面を成すものから、後期型の長塚古墳・御鷲山古墳になると墳丘と周溝の距離が延び、平坦で広さを増したものに変化するとし、吾妻古墳をその最も完成した形と位置づけた。石室についてはその編年観から、前方部前端の石室は新しく位置付け、後円部に別の石室が存在することを想定している（大和久 1972）。

このような認識のもとで、栃木県史編さん事業において、吾妻古墳の測量が行われた。この時に詳細な実測図が公表され、埴輪の存在も初めて報告された（山越 1979）。

岩崎卓也・森田久男は吾妻古墳の埴輪が、2.5 km 南方に位置する小山市飯塚埴輪窯跡出土の埴輪にその特徴が類似することを指摘している（岩崎・森田 1978）。

岩崎卓也は、6 世紀の新興首長系列墳が、名代・子代あるいは部などの管掌者と結びつく可能性が高く、中期までとは違って、大和政権下の官人的性格が強いとし、基壇を持つ古墳は同族系譜で結び合っていた首長である可能性が高いとしている（岩崎 1984）。

1986 年に宇都宮市で行われた古代史サマーセミナーで古墳の編年案が提示された（秋本・大橋 1986）。吾妻古墳については秋元陽光・大橋泰夫が新たな見解を示している。秋元・大橋は、思川・田川地域を 9 の単位地域に分けた。単位地域とは、古墳が多く存在する地域の中に含まれる、より小さな古墳群のまとまりを指す。その中で吾妻古墳を、同じ台地上にあることから、摩利支天塚・琵琶塚古墳と同系列上に位置付けた。そして、前方部が基壇を持つ古墳の中で最も未発達であること、普通円筒埴輪の存在、飯塚古墳群における類似した墳形から推定した年代から、吾妻古墳に対して、琵琶塚古墳に後続する年代を与えており、従来の年代観より遡らせている。それまで年代を下げる要因としていた石室についても、切石の発達度が年代を遡らせる要因にする必要がないとし、前方部だけでなく後円部に未発見の石室があるとみると、飯塚古墳群の類似した墳形の古墳の石室が前方部前端にのみ石室を有することから類推すると、前方部にのみ石室を有すると判断しても差し支えないと判断している。その上で基壇を持つことと前方部のみに石室を有することを特徴として持つ古墳を「下野型古墳」と命名し、それが首長連合・同盟関係の結果であり、吾妻古墳をその中で最古のものと位置付けている（秋元・大橋 1988）。

基壇の特異性を地域の独自性として位置付け、政治的背景を想定した点が画期的であったが、この結論は、大和久が基壇の完成形で最新とした吾妻古墳を、逆に基壇の祖形で最古と位置付けることになり、それまでの理解と大きく異なるものとなった。さらに大橋泰夫は切石石室の編年を行い、それを栃木県内の最高首長の採用する墓室として位置付け、次代まで続く田川・思川地域の卓越性を主張している（大橋 d1990）。

下野型古墳の提唱に対しては、池上悟、上野恵司の批判がある。池上は栃木県の横穴式石室を検討する中で吾妻古墳の石室が前方部のみではなく、後円部にもある可能性を指摘している（池上 1988）。上野は、基壇に類似した墳形は群馬県にも存在するので、栃木県のみの特徴とは言えないとして、前方部の石室についても、池上の指摘のような後円部にもある可能性と、千葉県姫塚古墳や変則的古墳（常総型古墳）に主体部が前方

部にのみある例を挙げて、栃木県だけの特徴ではないことを指摘し、下野型古墳の存在に疑惑を表明している。年代については、墳形から6世紀後葉に近い中葉、石室から7世紀前葉に近い初頭と位置付けている。石室については秋元・大橋が出雲の石棺式石室との対比により古い要素とした玄門の割り込みを、栃木県の横穴墓の検討によって新しい要素としており、全く逆の結論に至っている（上野 1992）。結果的には大和久の変遷観に近いものとなっている。

内山敏行は、上野の説を、「下野総体の首長」を頂点に、6階層の切石石室の下に横穴被葬者が従属する極めて成層化された社会像と評している。そして、最高首長権が絶えずルーズに交代するのなら、石室類型を共有する親族集団間の緩い合議制は考えられないかと提案している。吾妻古墳の石室の半世紀後の追加構築には、前方部前面の石室例が多い（壬生町上原・小山市飯塚・真岡市山崎）ので、そのように見る必要はないとしている。甲塚古墳の削抜玄門の否定もその必要はないとしている（内山 1993）。

これらの論議を通して、吾妻古墳に対する遺構論的位置付けはともかく、年代論的位置付けは、琵琶塚古墳の後で埴輪消滅の前、6世紀中葉から後葉にほぼ固まったと言ってよい。

折しも、壬生町史編さん事業で、測量が行われ、栃木県史より詳細な実測図が公表された。それと共に、後円部墳丘第二段中位の円筒埴輪列の存在、先述の運び出された石材の報告といった新知見も記述されている（山ノ井 1987）。栃木県史と壬生町史の計測値は、年月の経過や測量方法の違いによって違いが生じているが、どの部位を「全長」と見ているかに、墳丘に対する認識の違いが現れている（第2表）。

先述の秋元・大橋の論考でも墳丘長と基壇長を併記することで古墳の規模を記述しているが、この問題は白石太一郎によって言及されている。白石は、栃木県の基壇が墳丘の一部であることから、盛り土の有無に関わらず、基壇の下端を墳丘長として計測することが望ましいことを主張した。栃木の地域性を認めた上でも、従来の計測方法では他地域との比較研究に齟齬をきたす原因になると苦言を呈している（白石他 1990）。これに対して、秋元陽光は基壇を含む計測値は盛土量を反映しないから、墳丘規模としては疑問があるとしたが（秋元 1992）、内山敏行は地山成形部を含む墳長は、その墳丘を造ることを認められた被葬者の社会的政治的地位の指標として意味を持つので、墳丘長より盛土量を優先させる秋元の考え方を批判している（内山 1993）。

墳丘規模を表すのに、周溝内線上端を墳丘長若しくは基壇長とする考えは、稻荷2号墳のように周溝内線上端が「最も明確な線としてあらわれ」といえると判断される例（梁木 1985）もあり、「周溝内線下端は周溝を掘った結果生じるものであり、企画（設計）段階では意味を持たない」とする意見に、秋元は同調しているが、墳丘規模を比較する場合には墳丘長を周溝内線下端で計測することには妥当性を見出している（秋元 2000）。

このような墳丘規模に対する認識の違いは、基壇の下端は発掘調査を経ないと確認できないという、発掘調査の有無に左右されるところが大きい。基壇の場合、後世の削平によって墳丘の範囲が不明瞭になっている古墳も多い。

土生田純之は、栃木県の石室内からは土器の出土が認められることから、基壇は、かつて墳頂部で実施されていた共同体成員参列のもとの首長権継承儀礼と類似した儀礼を墳丘裾部で行うために創出されたものであり、旧来の社会構造の残存の具体的表現との理解を示した。このような状況は、畿内との関連、黄泉国思想に基づく葬送儀礼とその受容の仕方において、隣接する群馬県と対照的であり、両地域の歴史的背景の相違が想定されるとした（土生田 1996）。秋元・大橋が基壇の独自性から政治的背景を想定したのに対して、儀礼的背景を想定しており、新たな解釈の可能性が示された。

白石の指摘の後、稻垣圭子や斎藤恒夫は、基壇の下端を墳丘長として全長134mと表記している（稻垣 1997、斎藤 2000）。以後、この数値が吾妻古墳の全長として定着していき、吾妻古墳が栃木県最大の古墳であるという認識が次第に広がった。ただ、吾妻古墳の全長と表現される場合、第二段墳丘長や第一段平坦面（基壇）長が表記される場合が多かったので（第2表）、いずれもその規模の突出性に注意が払われることが少なかった。

従来、栃木県最大の古墳は琵琶塚古墳、摩利支天塚古墳として認識されていたので、この変化は栃木県の古墳時代像に大きな影響を与えた。斎藤恒夫は御鷺山古墳の外形復元を行う際、「基壇」を第一段平坦面、「基壇」及び基壇下の墳丘を墳丘第一段と呼称し、墳端を墳丘第一段下端として、通常の古墳の段築構造と基壇の対応関係を明確にした。そしてそのような計測法に従うと吾妻古墳が栃木県最大であることを指摘した。ただし盛土量は多くはなく、墳丘築造に要する労働量により序列をつけるとすれば、これまで通り琵琶塚古墳が最大であることは変わらないと評価した。このように、古墳の大きさの評価を盛土量と墳丘長のどちらを重視するかは、完全に決着がついたとは言えない状況にある。さらに、基壇の形態については、前方部前面が狭くなるもの、前方部前面に平坦面が巡らないものがあることを指摘した（斎藤 2000）。

秋元陽光・齋藤恒夫は、栃木県の首長墳の変遷を論ずる中で、吾妻古墳で最大化することを指摘した。その後の様相として、多地域で首長墳が築かれるが規模の格差が見られなくなること、後期群集墳が各地に出現すること、下野型古墳の要素が各地域の中小古墳に取り入れられることから、国分寺地域の首長層の影響力が強く作用していることを想定しており（秋元・齋藤 2001）、前述の大橋の論説を推し進めている。

塚田良道は関東地方の後期大型古墳を論ずる中で、吾妻古墳について言及している。その大きさを 117 m とし、後円部における第一段中心点と第二段中心点が異なり、前方部よりに移動していると見ている。塚田は中期において関東地方の大型古墳の墳形は畿内の巨大古墳と同形若しくは相似形のものが多いのに対して、後期には前代の墳形を踏襲するものや地域独自の墳形を採用するものが出現している。そしてこのような独自性の背景に、中期古墳における権威秩序付与の崩壊後の日本列島における政治構造の転換を想定している（塚田 2002）。

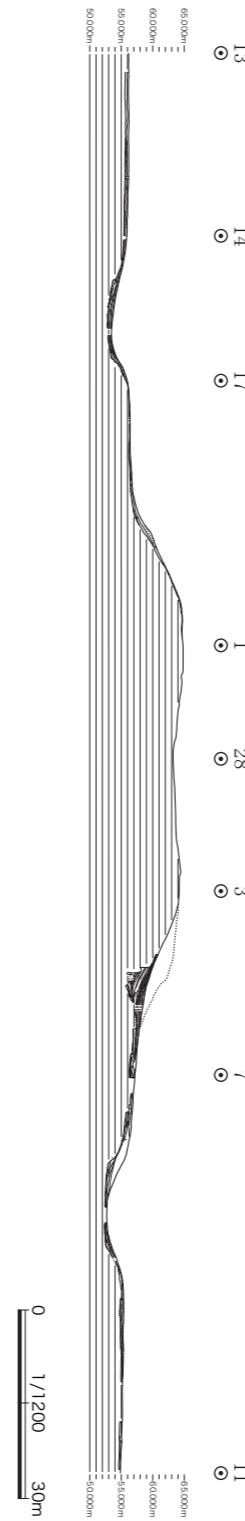
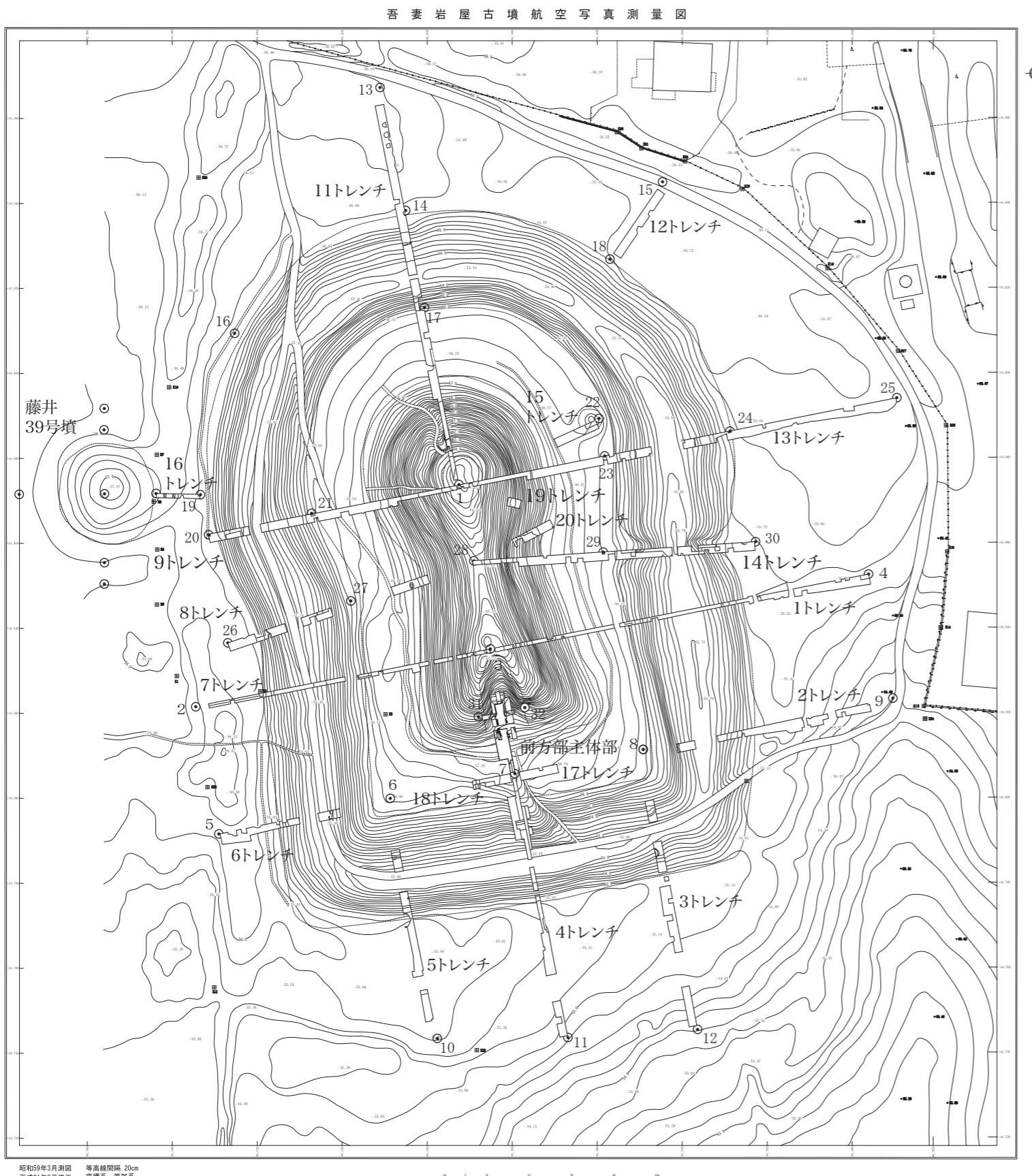
沼沢豊は、それまで企画論において俎上にのぼることのなかった基壇のある古墳を、自身で開発した方法論によって、他の古墳の墳形と比較検討を試みている。その結果、企画論的にも基壇の下端を墳丘長ととらえるべきことを主張している。それまでも墳丘の企画論的研究は行われていたが、畿内の大型古墳を中心とした研究であり、それと対比できたのは琵琶塚古墳までであったが、基壇も他の古墳と共通する企画原理によって説明できることを示した。そして企画の変化から、茶臼山→壬生愛宕塚→吾妻という典型的な基壇古墳への道筋がたどれ、基壇の低平化やテラス幅の最大化によって吾妻→長塚という展開を示した（沼沢 2004）。このことによって、吾妻古墳を基壇を持つ墳丘の中で最も典型的なものと見るという、大和久の見解を追認したかたちになった。ただし沼沢はここでは典型化の方向を年代順に置き換えることをしていない。このように、同じ吾妻古墳の墳形に対する検討でも、基壇の典型化と前方部の発達度のどちらを優先させて年代を決定するかで、年代的位置付けが変わることが明らかになった。このことは吾妻古墳の歴史的位置付けに関わることになる。吾妻古墳を最古の基壇を持つ古墳と位置付けると、その出現を画期的と見ることになり、最新と位置付けるとその出現は漸移的と見ることになる。

草野潤平は、思川・田川地域を 24 (25) の単位地域に分け、それぞれの地域の傾向を記述した。単位地域の設定は秋元・大橋が主に大型古墳に主眼をおいて設定したのに対し、ここでは中小の古墳から成るいわゆる群集墳も含めて、より悉皆的にその設定を行っている。そして思川流域では 60 m 以上の大型古墳が集中的に営まれているのに対し、田川流域では各単位地域に 1 基ずつ存在するのみであり、20 ~ 60 m の中規模古墳は思川流域と田川流域は明瞭な地域差をもって一線を引くことができるとしている（草野 2006）。このような見解は、流域毎の地域区分のさらなる細分と歴史記述の可能性を示している。

広瀬和雄は、東国の政治動向を語る上で、この地域を、下野市、上三川町、壬生町にひろがる後・終末期古墳を一体的に把握するため秋元陽光が命名した下野古墳群（秋元 2007）として論じている。広瀬はこの地域の古墳を A ~ G の 7 つのグループに分類し、各グループは 2 ~ 4 代にわたって一代一墳的に形成された首長系譜を形づくっているとしている。それらは各地に分散居住していた 7 首長が政治的要因で墓域を統合した蓋然性が高く、6 世紀後半に下野地域の首長層の政治的再編が中央政権の手にこ入れによって行われた結果と考えた。そして下野型古墳という新しい墳墓様式は、基壇式墳丘、主体部前方部築造、石棺式石室（秋元・大橋等の切石石室）という他地域のモデルを組み合わせて作られたもので、7 系譜に及ぶ首長層の集団帰属意識や彼我の一体性を高めるためのもので、自然石積みの胴張り横穴式石室や切石両袖式石室を埋葬施設とした同じ下野地域の他首長層や中間層や民衆とのイデオロギー的差別化をはかるためのものであったと評価した。広瀬は東国の後期・終末期古墳には、中央と地方、地方の中での首長同士や首長と民衆の間に形づくられた政治秩序が、西日本では希薄化してきたこの時期に、まだ残っており、伝統的政治秩序の表象が維持され続けたと考えている（広瀬 2008）。

加部二生は、毛野国の首長墓の動向を論じる中で、吾妻古墳を墳丘長 134 m で前方後円墳集成編年 10 期（広瀬 1991）としては国内最大規模と評価し、それまでの上毛野の優位が吾妻古墳によって下毛野優位に転換し、後の下野薬師寺の建立や新撰姓氏録における下毛野氏の序列に見られる躍進の萌芽を指摘した（加部 2009）。毛野国の考古学的研究は、尾崎喜左雄（尾崎 1970）、梅沢重昭（梅沢 1978）、前沢輝政（前沢 1982）によって成ってきたが、吾妻古墳の重要性がこれほど強調されたことはかつてなかったと言ってよい。

以上の研究成果からも、吾妻古墳の位置付けが栃木県だけでなく、関東はもちろん、全国的な古墳の位置付けの中で重要な位置を占めることが理解できる。

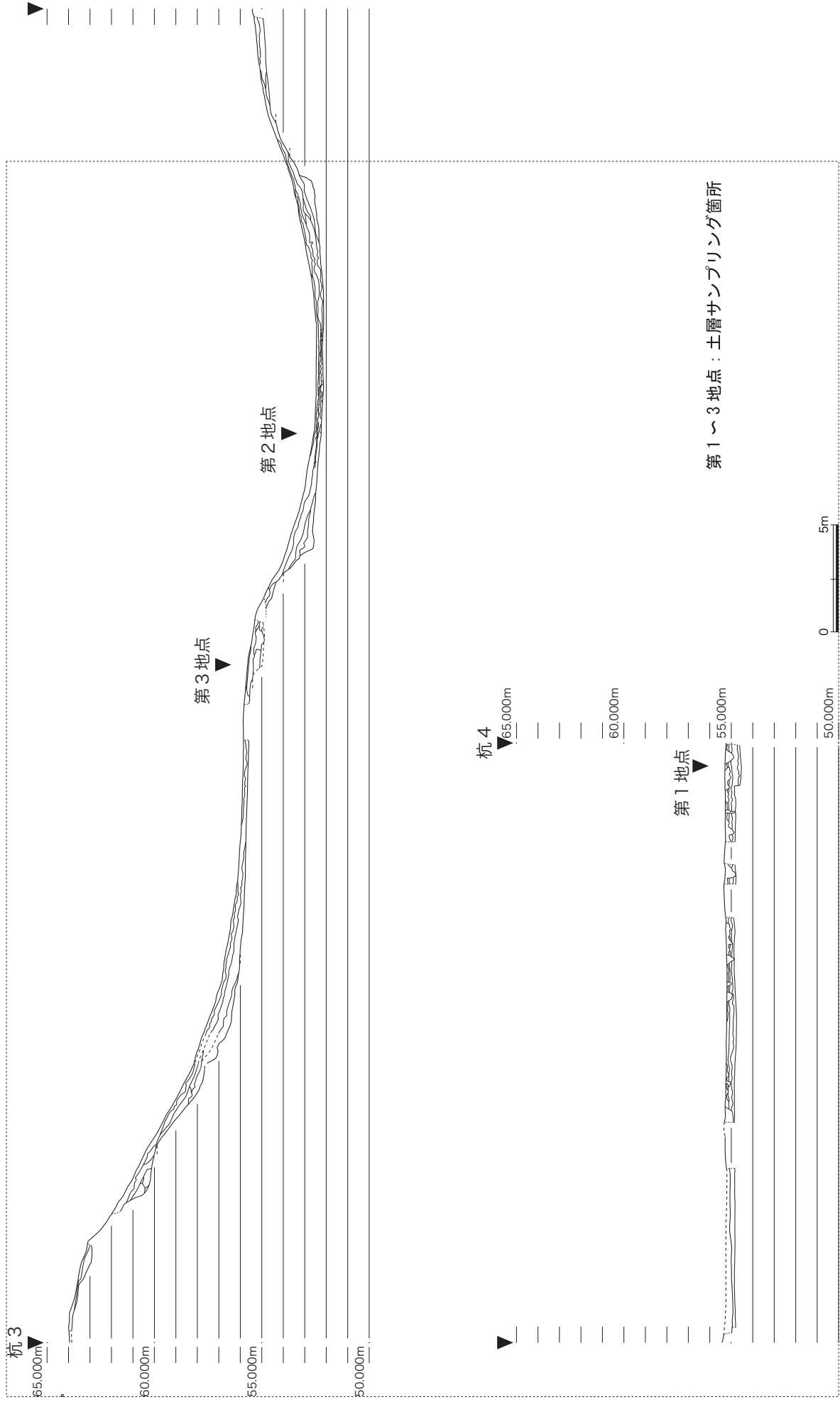


墳丘測量図は壬生町提供 数字は杭番号

第6図 吾妻古墳トレンチ配置図 ($S = 1 : 1,200$)

参考文献

- 碧山季美 1850 『壬生町領史略』
- 秋本陽光 1992 「栃木県における大型円墳」君嶋利行『下坪古墳群・北原17号墳・桃花原古墳』壬生町教育委員会
- 秋本陽光 2000 「栃木県の前方後円墳ノート1—狼塚古墳と稻荷2号墳」『栃木県考古学会誌』第21集 栃木県考古学会
- 秋本陽光 2007 「河内郡における終末期古墳」『栃木県考古学会シンポジウム上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』栃木県考古学会
- 秋本陽光・大橋泰夫 1986 「思川流域 東国における首長墓の変遷—下野国を中心として—」『第14回古代史サマーセミナー 栃木 研究報告資料』古代史サマーセミナー事務局・栃木県考古学会
- 秋元陽光・大橋泰夫 1988 「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向—思川・田川水系を中心として—」『栃木県考古学会誌』第9集 栃木県考古学会
- 秋元陽光・斎藤恒夫 2001 「栃木県」『シンポジウム 中期古墳から後期古墳へ 発表要旨資料』第6回 東北・関東前方後円墳研究会大会 東北・関東前方後円墳研究会
- 池上悟 1988 「野州石室考」『立正大学文学部論叢』第88号 立正大学文学部
- 稻垣圭子 1997 「吾妻古墳出土の埴輪」『考古回覧』第21号 秋元陽光代表
- 岩崎卓也 1984 「後期古墳が築かれるころ」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 岩崎卓也・森田久男 1978 「小山市域の円筒埴輪」『小山市史研究』1 小山市史編さん委員会
- 上野恵司 1992 「下野・切石石室考」『立正考古』第31号 立正大学考古学研究会
- 内山敏行 1993 「古墳時代—特集 1992年 栃木県の動向—」『考古回覧』第16号 秋元陽光代表
- 梅沢重昭 1978 「毛野の古墳の系譜」『考古学ジャーナル』No.150 ニュー・サイエンス社
- 尾崎喜左雄 1970 「吾妻の国」『古代の日本』7・関東 角川書店
- 大橋泰夫 1990 「下野における古墳時代後期の動向—横穴式石室の分析を通して—」『古代』第89号 早稲田大学考古学会
- 加部二生 2009 「太田市東矢島古墳群の再検討」『利根川』31 利根川同人
- 君島利行 1993 「藤井38号墳周溝調査について—」『栃木県考古学会誌』第15集 栃木県考古学会
- 草野潤平 2006 「下野における後期・終末期古墳の地域設定と動向」『古代学研究所紀要』第2号 明治大学古代学研究所
- 国分寺町教育委員会 2001 『国分寺町遺跡分布調査報告』国分寺町文化財調査報告書第13集 国分寺町教育委員会
- 斎藤恒夫 2000 「栃木県の前方後円墳ノート2—御鷺山古墳の外形復元—」『栃木県考古学会誌』第21集 栃木県考古学会
- 白石太一郎他 1990 「壬生車塚古墳の測量調査 関東の終末期大型方・円墳について」『関東地方における終末期古墳の研究』 平成元年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
- 進藤敏雄 1990 「栃木県の群集墳の一様相」『古代』第89号 早稲田大学考古学会
- 館野耕作編 1940 『紀元二千六百年記念古墳調査』下都賀郡教育委員会
- 塙田良道 2002 「関東地方における後期古墳の特質」『古代学研究』157 古代学研究会
- 栃木市教育委員会 1990 『栃木市遺跡詳細分布調査報告』
- 沼沢豊 2004 「古墳築造企画の普遍性と地域色—栃木県における基壇を有するとされる古墳をめぐって—」『古代』第114号 早稲田大学考古学会 (2006『前方後円墳と帆立貝古墳』雄山閣に再録)
- 土生田純之 1996 「葬送墓制の伝来を巡って—北関東における事例を中心に—」『古代文化』第48巻第1号
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編『前方後円墳集成』山川出版社
- 広瀬和雄 2008 「6・7世紀の東国政治動向(予察)ー上総・下総・下野・武藏地域の横穴式石室を素材としてー」『奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集』Vol.18 「古代日本の支配と文化」奈良女子大学21世紀COEプログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点
- 前沢輝政 1982 『毛野国の研究—古墳時代の解明—上・下』現代思想社
- 壬生町教育委員会 2001 『壬生町遺跡分布調査報告』壬生町埋蔵文化財調査報告書第16集 壬生町教育委員会
- 山越茂 1979 「吾妻岩屋古墳」『栃木県史 資料編考古二』 栃木県史編さん委員会



第7図 1トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

山ノ井清人 1987 「吾妻古墳」『壬生町史 資料編 原始古代・中世』 壬生町史編さん委員会
 山ノ井清人 1990 「藤井古墳群」『壬生町史 資料編 原始古代・中世 補遺』 壬生町史編さん委員会
 梁木誠 1985 『稻荷古墳群』宇都宮市教育委員会
 著者不明 1900s 『下野國古墳図誌』(栃木県立図書館所蔵)

第3章 調査の成果

第1節 基準杭の設定

発掘区を設定するための基準杭を、古墳の各部の特徴が読み取れる位置に建植した。

最初に、後円部墳頂中心（杭1）と前方部墳頂最高所中心（杭3）に原点を設定し、それを結んだラインを設定して、古墳主軸とした。その角度はN-11°-W、杭1と杭3の距離は39.000mである。杭1から主軸上を杭3の方向へ18.000m南下した地点が前方部と後円部の間で最も低い地点であったので、そこを括れ部頂と判断して、杭28を建植した。

後円部頂（杭1）からは、主軸上の北方向（42.000mに杭17、65.000mに杭14、95.000mに杭13）、主軸に対して直交方向（西へ35.000mに杭21、60.000mに杭20、東へ35.000mに杭23、65.000mに杭24、105.000mに杭25）、主軸に対して45°の方向（北西へ63.000mに杭16、北東へ63.000mに杭18、北へ60.000m・南へ60.000mに杭15）に杭を建植した。

括れ部頂（杭28）から、墳丘東側の突出部先端に向かう線上で30.254mに杭29、65.551mに杭30を建植した。杭24と杭30を結んだ線は古墳主軸と平行である。その角度は杭28から杭3を見返って東へ82°34'29"である。それに合わせるため、同じ角度を西へ振ると、第一段上端の括れ部に相当する位置を通る。そこで30.254mに杭27、60.512mに杭26を建植した。

前方部頂（杭3）を見通して東に82°34'29"振った方向に、周堀内縁に杭29（杭28から30.254mの地点）、周堀外縁に杭30（杭28から60.508mの地点）を建植し、それを結んだ線上から南側にトレンチを設定して掘削した。

前方部頂（杭3）からは、主軸上の南（30.000mに杭7、93.000mに杭11）、主軸に対して直交（西へ70.000mに杭2、東へ90.000mに杭4）の方向に杭を建植した。

前方部頂（杭3）からは、主軸上を15.000m南下した地点から、主軸に対して直交（西へ6mに杭31、東へ5mに杭32）の方向に杭を建植した。

前方部前端（杭7）から主軸に対して直交（西へ30.000mに杭6、70.000mに杭5、東へ30.000mに杭8、90.000mに杭9）の方向に杭を建植した。

前方部西隅角（杭6）から主軸に対して平行の方向に南へ57.000mに杭10を建植した。杭27と杭6を結んだ線は古墳主軸と平行である。

前方部東隅角（杭8）から主軸に対して平行の方向に南へ67.000mに杭12を建植した。杭29と杭8を結んだ線は古墳主軸と平行である。

藤井43号墳とされている墳丘第一段平坦面上にある地膨れにもトレンチを設定できるように、杭23から主軸上を北へ9.000mに杭22を建植した。杭23と杭22を結んだ線は古墳主軸と平行である。

隣接する藤井39号墳と吾妻古墳との関係を判断するため、39号墳墳頂から座標東に22.000mの地点に、杭19を建植した。杭19と杭20・杭26は一直線上にあり、3点を結んだ線は吾妻古墳主軸と平行である。

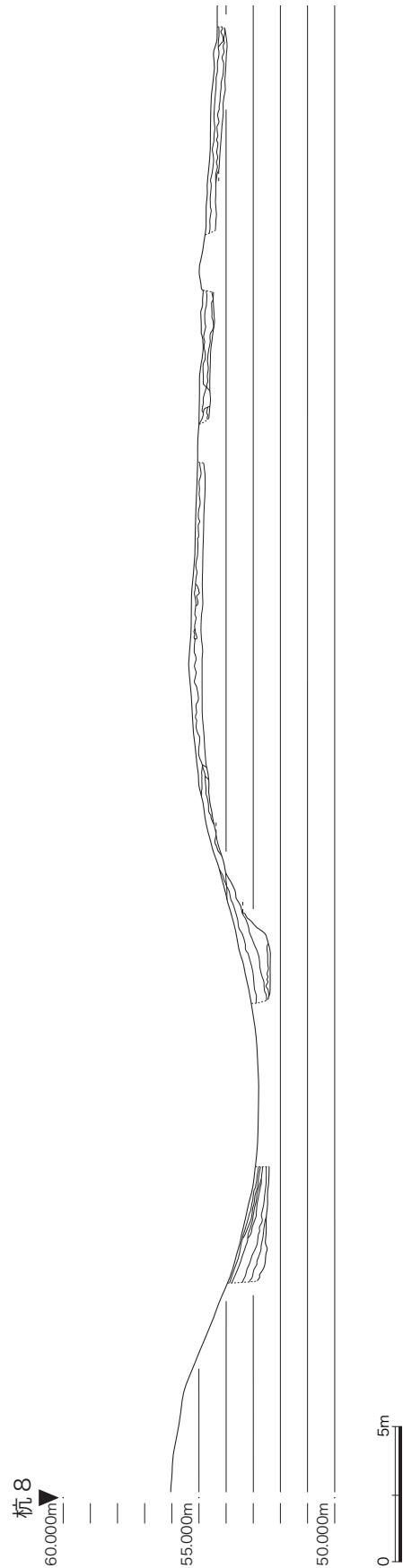
前方部前端の埋葬主体部（吾妻の岩屋）を探索するため、杭3と杭7を結んだ主軸線上の杭3から15m南の地点で直交する線上の6.000m西に杭31、5.000m東に杭32を建植した。

第2節 各トレンチの所見

1 トレンチ

吾妻古墳東側の周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸に対して直交するよう、前方部墳頂（杭3）と杭4を結んだ線の南側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。ローム層の上には暗褐色土層（Ⅲ層）、黒褐色土（Ⅱ層）、褐色土（Ⅰ層）が堆積する。杭4付近の第1地点では、AT（姶良・丹沢火山灰層）がⅢ層下位から微量、



第8図 2トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

A s - c (浅間 C 軽石層) がⅢ層上位から、Hr - FP (榛名山二ツ岳軽石層) がⅢ層上位から I 層にかけて、A s - B (浅間 B 軽石層) が I 層から検出された。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は、周堀外縁と内縁の際にロームを主体とする土層(4a ~ 4d 層) が最初に堆積し、その上に周堀内全体を覆うように黒色の土層(3・3b 層) が、さらにその上に褐色を帯びた土層(1 ~ 2 層) が堆積する。周堀中央(第2地点) の、3 層の中に挟まれるように、底面から約 20 cm 上位に A s - B の集中(3c 層) が層状に認められる。3b 層の上面には鉄分の沈着が認められ、水が溜まっていたと考えられる。埋没土量は少なく、中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは 30 cm である。

周堀外縁は、下半分では 50 cm 程急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。周堀内縁の墳丘第一段斜面は現地表標高 54.40 m 付近の地点で立ち上がる。その立ち上がりは周堀外縁に比べると緩やかであるが、墳丘西側の立ち上がりに比べると急激である。斜面には下から、鹿沼軽石層、ローム層、漸移層、黒色土(ii 層) が露出している。墳丘第一段平坦面では黒色土の上に盛土(暗黄褐色土: Y 層、暗褐色土: ⑥ 層) がある。黒色土には肉眼でも白色粒が観察できたので理化学分析を行ったところ(第3地点)、上部で Hr - FP、下部やや上で A s - c、下部で微量の AT が検出された。これらのことから、黒色土(ii 層) は周堀外の黒褐色土(II 層) と対応する、旧表土層と考えられる。

墳丘第一段(基壇) は、ほぼ水平にロームブロックを土盛りしており、墳丘第二段裾と墳丘第一段外縁の旧表土上面の比高差から窺える盛り土の厚さは約 80 cm である。第二段裾から 120 cm 東に浅い落ち込みがある。平坦面中央から外縁にかけて埴輪の出土はほとんどないが、墳丘第二段裾からは多量に埴輪が出土しており、埴輪列が存在した可能性が高い。

墳丘第二段斜面は黒色土と鹿沼軽石層のブロックを積み上げている。7 トレンチに比べて黒色土の割合が大きい。墳頂から 9 m 付近の斜面中位にも埴輪が集中して出土する平坦面があり、その標高は 60 m くらいである。埴輪列や段築がある可能性がある。

墳頂平坦面は現地表から 5 cm 程下で、鹿沼軽石層のブロックによる盛土が確認できた。埴輪は出土したが原位置を保つものではない。出土した遺物は、大部分が円筒埴輪であるが、形象埴輪もわずかに出土している。他に墳丘第一段から銅錢(淳熙元寶) が 1 点出土している。

2 トレンチ

吾妻古墳東側の周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部東隅角(杭 8) と杭 9 を結んだ線の南側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。ロームへの漸移層(IV 層) の上には、褐色土(III 層)、黒褐色土(II 層) が堆積する。

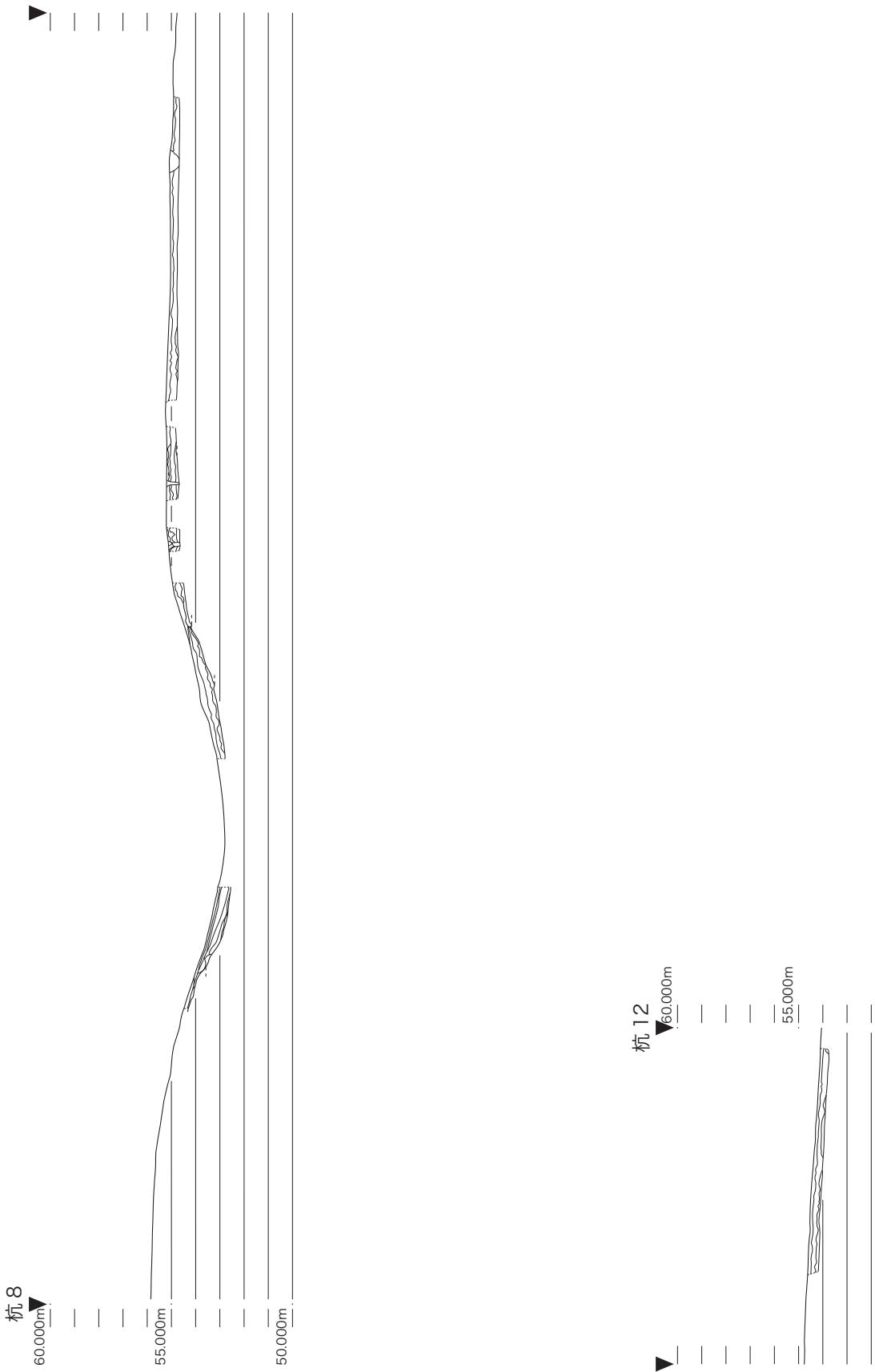
周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀外縁は下半分では 90 cm 程急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。1・6・7 トレンチと比較すると、周堀外縁が南へいくほど西に向かい、前方部幅があまり広がらないことが窺える。周堀内縁の墳丘第一段斜面は現地表標高 53.70 m 付近の地点で立ち上がる。その立ち上がりは周堀外縁や 1 トレンチに比べると緩やかである。遺物は周堀内から埴輪が数片、周堀外から縄文土器が一片発見されたのみである。

3 トレンチ

吾妻古墳南側の周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して平行するように、前方部東隅角(杭 8) と杭 12 を結んだ線の西側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。ロームへの漸移層(IV 層) の上には、褐色土(III 层)、黒褐色土(II 層) が堆積する。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀外縁は 10° 程で緩く立ち上がる。調査したトレンチの中で、周堀底面と周堀外縁の高低差が最も小さい。このことは周囲の地形が東に向かって低く傾いていることによるものと考えられるが、周堀壁の傾斜の緩さや 2 トレンチでの周堀外縁の向かう方向を考慮すると、古墳築造時に前方部南東隅を浅くしようとする意図が働いたためとも考えられる。周堀内縁の墳丘第一段斜面は現地表標高 53.80 m 付近の地点で立ち上がる。その立ち上がりは外縁に比べて急激であるが、1 トレンチの内縁に比べると緩やかである。斜面には下から、鹿沼軽



第9図 3トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

石層、ローム層が露出している。遺物は周堀内から埴輪が数片発見されたのみである。

4 トレンチ

吾妻古墳南側の周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸線上の、前方部前端（杭7）と杭11を結んだ線の西側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。ロームへの漸移層（Ⅲ層）の上には暗褐色土（Ⅲb層）、黒褐色土（Ⅱ層）が堆積する。

墳丘第一段平坦面から周堀内縁にかけて、丸く隆起した場所がある。一見、陸橋や造出に見えるが、この地区の北側にはかつて「岩屋（横穴式石室）」が存在し、石材が取り出されたと言われる地区があり、その部分は墳丘第二段が大きくえぐり取られている。この隆起する地区はその際の出土がたまたものと予想されたため、それを確認するため、断ち割り調査を行った。その結果、この地区では、ロームや鹿沼軽石層を主体とする土層（ろ層）が、他のトレンチで覆土と判断した土層（1・3層）の上にのっていることが確認され、隆起部分が形成されたのは、周堀が完全に埋没した後であることが判断できた。このような所見から、当初の予想通り、この隆起部分が古墳時代の施設ではないことが判明した。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は、周堀外縁と内縁の間にロームを主体とする土層（4a～4d層）が最初に堆積し、その上に周堀内全体を覆うように黒色の土層（3・3b層）が、さらにその上に褐色を帯びた土層（1～2層）が堆積する。周堀の埋没土量は少なく、中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは30cmである。周堀中央付近、底面から約10cm上位にA s-B（3c層）の細粒がわずかに認められる。

周堀外縁は、他のトレンチに比べて、緩く立ち上がる。墳丘第一段斜面は現地表標高54.80m付近の地点で立ち上がる。その立ち上がりは墳丘西側の立ち上がりに比べると急激である。斜面には下から、鹿沼軽石層、ローム層、漸移層、旧表土層（黒色土：ii層）が露出している。黒色土の上に盛土（鹿沼軽石土：K層、暗褐色土：⑦層）がある。黒色土は、周堀外の黒褐色土（Ⅱ層）と対応する、旧表土層と考えられる。

墳丘第一段（基壇）は、下から鹿沼軽石、ロームの順にブロックを土盛りして、ほぼ水平に仕上げている。

周堀内、墳丘第一段から拳大の川原石、凝灰岩の破碎片、埴輪片、須恵器片、陶磁器片、砥石が出土した。川原石は拳大のものが多く、主体部の裏込めや敷石に使用されたものと考えられる。凝灰岩破碎片は小さいものが多いが、中には面取りの加工が分かるものも存在する。陶磁器片は江戸時代以降のものが多く、石室開口以降に流入したものと考えられる。

5 トレンチ

吾妻古墳南側の周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して平行するように、前方部西隅角（杭6）と杭10を結んだ線の西側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。ロームへの漸移層（IV層）の上には、褐色土（Ⅲ層）、黒褐色土（Ⅱ層）が堆積する。

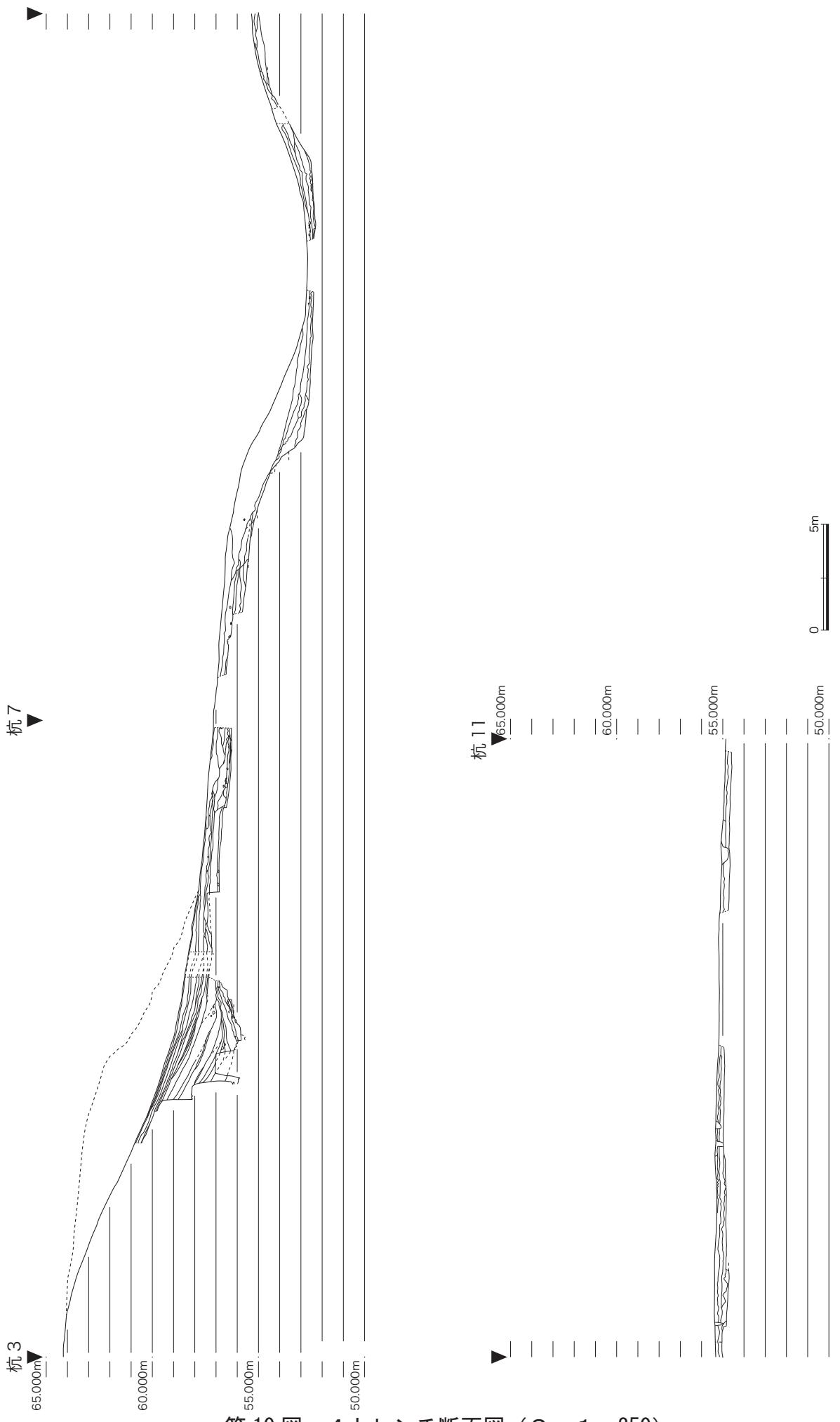
周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀外縁は下半分では約70°程で急激に150cm立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。6・7トレンチと関連させて想定すると、前方部南西隅角が南東隅角と違ってかなり深く掘削されていたことが窺える。周堀内縁の墳丘第一段斜面は現地表標高53.80m付近の地点で立ち上がる。その立ち上がりは外縁に比べて緩やかであるが、中位から更に緩やかになる。斜面には鹿沼軽石層が露出している。遺物は周堀内から埴輪が数片発見されたのみである。

6 トレンチ

吾妻古墳西側の周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部西隅角（杭6）と杭5を結んだ線の南側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかつたが、土坑が確認された。土手状に見える高まりの一部を断ち割り調査したが、高まりが見られるのは、最上層のみで、その下は黒褐色土（Ⅱ層）からロームへの漸移層（IV層）までほぼ自然堆積と見られる様相を呈しているため、古墳時代の遺構ではないと判断した。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。黒色土はこ



第 10 図 4 トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

のトレンチ内での堆積が最も厚く、現地表から周堀最底面までの深さは1.10mである。周堀外縁は下半分では急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。今回調査した周堀内としては最も厚く覆土が堆積している。5・7トレンチと関連させて想定すると、前方部南西隅角が南東部隅角と違ってかなり深く掘削されていたことが窺える。周堀内縁の墳丘第一段斜面は現地表標高53.80m付近の地点で立ち上がる。その立ち上がりは外縁に比べて緩やかであるが、中位から更に緩やかになる。斜面には鹿沼軽石層が露出している。遺物は周堀内から埴輪が数片、砥石が発見されたのみである。

7トレンチ

吾妻古墳西側の周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部墳頂（杭3）と杭2を結んだ線の南側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。土手状に見える高まりの一部を断ち割り調査したが、高まりが見られるのが、最上層のみで、その下は黒褐色土（Ⅱ層）からロームへの漸移層（Ⅲ層）までほぼ自然堆積と見られる様相を呈しているため、古墳時代の遺構ではないと判断した。

周堀の覆土は、周堀外縁と内縁の間にロームを主体とする土層（4a～4d層）が最初に堆積し、その上に周堀内全体を覆うように黒色の土層（3・3b層）が、さらにその上に褐色を帯びた土層（1～2層）が堆積する。周堀中央の、3層の上面、底面から約20cm上位にA s-Bの集中（3c層）が層状に認められる。埋没土量は反対側の1トレンチより多いが、他の古墳に比べれば少なく、中央部分での現地表から周堀底面までの深さは90cmである。

周堀外縁は下半分では100cm程急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。墳丘第一段斜面はその立ち上がりが外縁に比べると緩やかで、現地表標高54.00m付近の地点で立ち上がる。斜面には下から、鹿沼軽石層、ローム層、旧表土層（黒色土：ii層）が露出している。漸移層部分は発掘していない。黒色土の上に盛土（黒色土：B層、鹿沼軽石土：K層、ロームブロック：R層、暗褐色土：Y層、暗黄褐色土：○層）がある。黒色土（ii層）は周堀外の黒褐色土（Ⅱ層）と対応する、旧表土層と考えられる。

墳丘第一段（基壇）は、ほぼ水平に鹿沼軽石、ロームの順にブロックを土盛りしており、墳丘第二段裾と墳丘第一段外縁の旧表土上面の比高差から窺える盛り土の厚さは113cmである。中央から外縁にかけて埴輪の出土はほとんどないが、墳丘第二段裾からは多量に埴輪が出土しており、埴輪列が存在した可能性が高い。

墳丘第二段斜面は下位に黒色土、中位や上位に鹿沼軽石のブロックを多く使って積み上げている様子が窺われる。1トレンチに比べて鹿沼軽石層の割合が高い。墳丘第二段斜面には、墳頂から6～7m付近に平坦面があり、その標高は61mくらいである。埴輪が集中して出土するのは墳頂から10～12m付近である。埴輪列や段築がある可能性がある。墳頂平坦面は現地表から5cmくらいで、鹿沼軽石層の塊による盛土が確認できた。墳頂から3m付近に地表面からでも観察できる穴がある。埴輪は出土したが原位置を保つものではない。出土した遺物は、大部分が円筒埴輪であるが、形象埴輪も少量出土している。他に煙管の銅製の雁首が出土している。

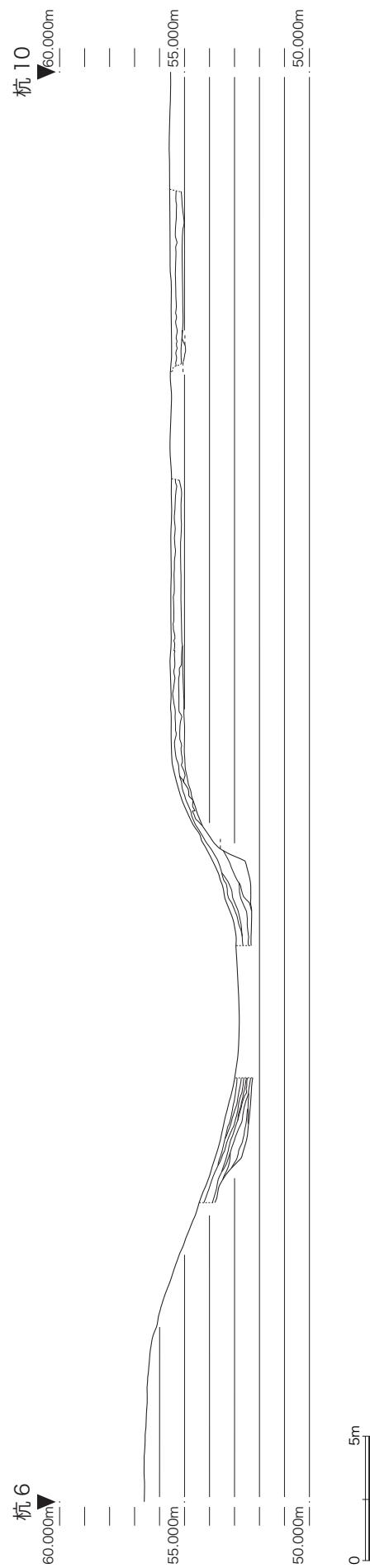
8トレンチ

吾妻古墳西側で墳丘・周堀の形状を確認するため、括れ部の墳頂（杭28）と周堀外縁（杭20）を結んだ線の南側に設定した。周堀外縁から周堀内、墳丘第一段平坦面から第二段下位にかけての地区を調査した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は、底面に鹿沼軽石主体の層（5層）が内縁や堀底中央に広がった上に周堀外縁と内縁の間にロームを主体とする土層（4a・4b層）が最初に堆積し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土（3a～3c層）が、さらにその上に暗褐色土層（1～2層）が堆積する。覆土中からは周堀底面より約20cm上位でA s-Bの集中（3c層）が層状に認められた。中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは50cmである。周堀外縁は、下半分では140cm程急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。周堀内縁は、現地表標高53.90m付近の地点で緩く立ち上がる。立ち上がり方が緩く、斜面が長い。墳丘第一段（基壇）は、ロームブロックを土盛りして、墳丘第二段裾から墳丘第一段平坦面外縁にかけてほぼ水平に仕上げている。第二段裾から140cm西に浅い落ち込みがある。墳丘第二段裾からは多量に埴輪が出土したが、原位置を保つものはない。平坦面中央から外縁にかけて埴輪の出土はほとんどない。

墳丘第二段斜面下位は黒色土と鹿沼軽石層の塊を積み上げている様子が窺われる。7トレンチに比べて黒色土の割合が高い。



第11図 5トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

9 トレンチ

吾妻古墳西側の墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、後円部墳頂（杭1）と杭20・杭21を結んだ線の南側に設定した。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は、周堀外縁と内縁の間にロームを主体とする土層（4a～4f層）が最初に堆積し、その上に周堀内全体を覆うように黒色の土層（3a～3d層）が、さらにその上に褐色を帯びた土層（1～2層）が堆積する。4a層と3d層の境に、焼土の集中が認められる。周堀中央付近、底面から約20cm上位にA s-Bの集中（3b層）が層状に認められる。A s-Bは3層の中に挟まれるように堆積している。埋没土量は少なく、中央部分での現地表から周堀底面までの深さは60cmである。

周堀外縁は下半分では急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。底面は外縁側が50cm程低い。周堀内縁は、現地表標高53.60m付近の地点で緩く立ち上がり、盛土された墳丘第一段につながる。確認したトレンチ中では最も立ち上がり方が緩く、斜面が最も長い。斜面には下から、鹿沼軽石層、ローム層、黒色土（ii層）が露出している。黒色土の上に盛土（暗黄褐色土：Y層、暗褐色土：⑤層）がある。黒色土には肉眼でも白色粒が観察できることから、黒色土（ii層）は周堀外の黒褐色土（II層）と対応する、旧表土層と考えられる。墳丘第一段の平坦面は、縁辺から15m付近まではローム主体の盛土ではほぼ平坦であるが、それより墳丘中央に近づくと鹿沼軽石層主体の盛土となり、やや先上がりに高くなつた先で急激に立ち上がり、墳丘第二段となる。墳丘第二段斜面は盛土としてローム、黒色土、鹿沼軽石層が交互に積み上げられている。墳頂から9.5m、標高62m付近はやや傾斜が緩いが平坦面を形作る程ではない。墳頂は暗黄褐色のロームによる盛土で、斜面の盛土のローム層より色調が暗く、締まりが弱い。墳頂中央付近には色調が暗褐色を呈する土層が見られ、土坑が存在すると考えられる。

遺物は埴輪、須恵器甕破片が出土した。周堀中、墳丘第一段平坦面中央から縁辺にかけての出土は数が少なく、墳丘第二段裾から斜面にかけての出土が多い。埴輪の中には形象埴輪がある。線刻が格子状に施されて、黒色塗彩されている。破片のため種類は断定できない。

11 トレンチ

吾妻古墳北側の周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸線上の、後円部墳頂（杭1）と杭13・杭14・杭17を結んだ線の西側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構は認められなかった。遺物は埴輪の破片が1点出土した。ロームへの漸移層（III層）の上には黒色土（II層）が堆積する。

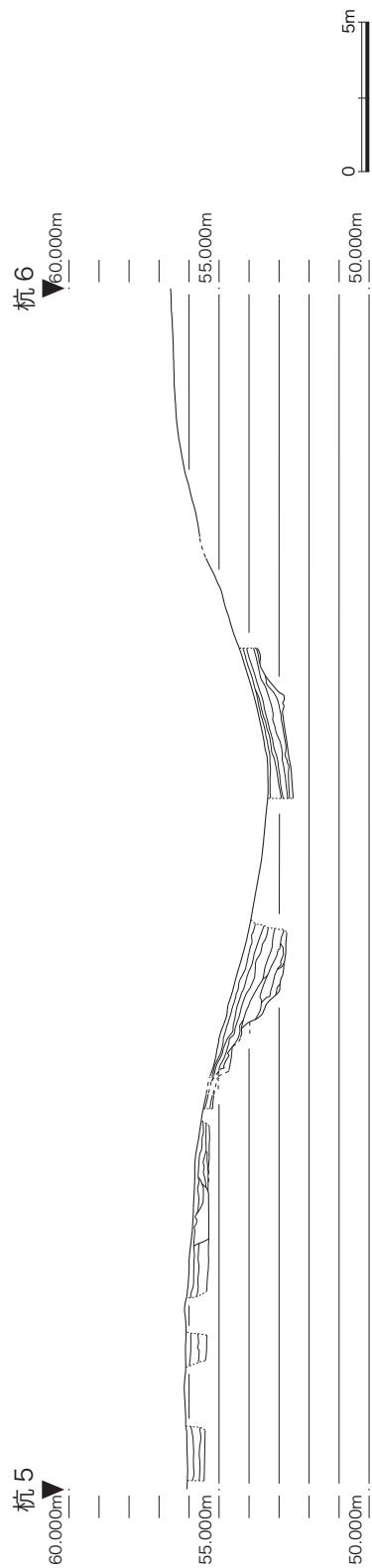
周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は、ロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀中央付近、底面から約10cm上位に浅間B軽石層の細粒がわずかに認められる。周堀外縁は、底面付近は40cm程は急激に立ち上がるが、それより上位は他のトレンチに比べて、緩く立ち上がる。周堀内縁はやや急に、現地表標高54.20m付近の地点で立ち上がり、盛土された墳丘第一段につながる。その立ち上がり方は、13トレンチほど急激ではないが、9トレンチほど緩やかではなく、墳丘下端が明瞭に確認できた。墳丘第一段の平坦面は、縁辺から17m付近まではローム主体の盛土ではほぼ平坦であるが、その先は鹿沼軽石層主体の盛土となり、ややつま先上がりに高くなつた先で急激に立ち上がり、墳丘第二段となる。墳丘第二段斜面は盛土としてローム、黒色土、鹿沼軽石層が交互に積み上げられている。中位には墳丘の窪みから排出されたとみられる土（Ob層）の堆積が見られる。墳頂は暗黄褐色のロームによる盛土で、斜面の盛土のローム層より色調が暗く、締まりが弱い。墳頂中央付近には色調が暗褐色を呈する土層が見られ、土坑が存在すると考えられる。その長軸はN-20°-Eである。

遺物は埴輪の破片が出土した。周堀中、墳丘第一段平坦面中央から縁辺にかけての出土は少なく、墳丘第二段裾から斜面にかけての出土が多い。墳頂縁辺近くで埴輪が数片出土したが、原位置を保つものではない。他に銅錢（寛永通寶）が1点出土した。

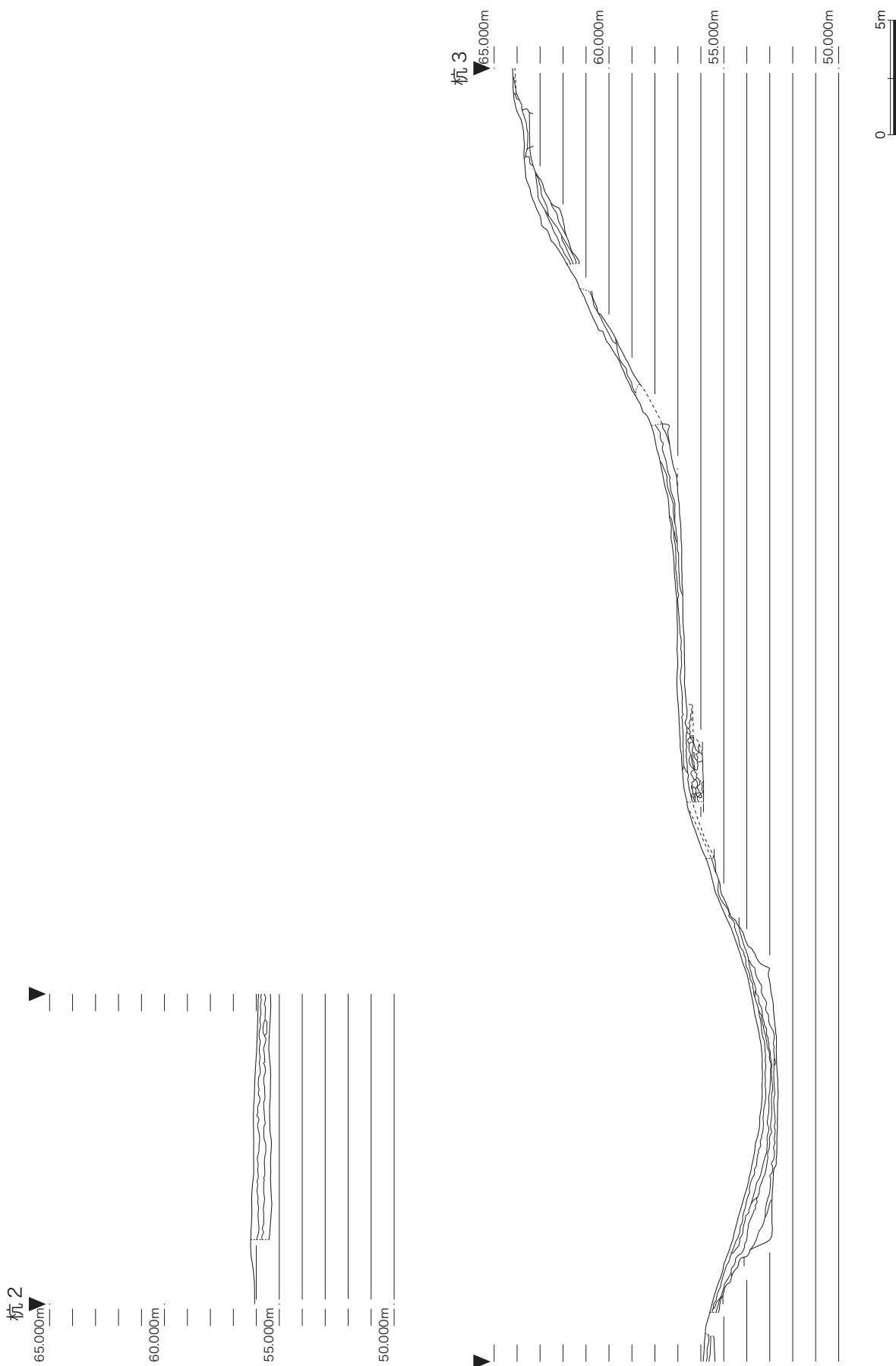
12 トレンチ

吾妻古墳北東側の周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、後円部墳頂（杭1）から主軸上の杭13を見通して、東へ45°の方向に向かう杭18と杭15を結んだ線上から東南側に設定した。

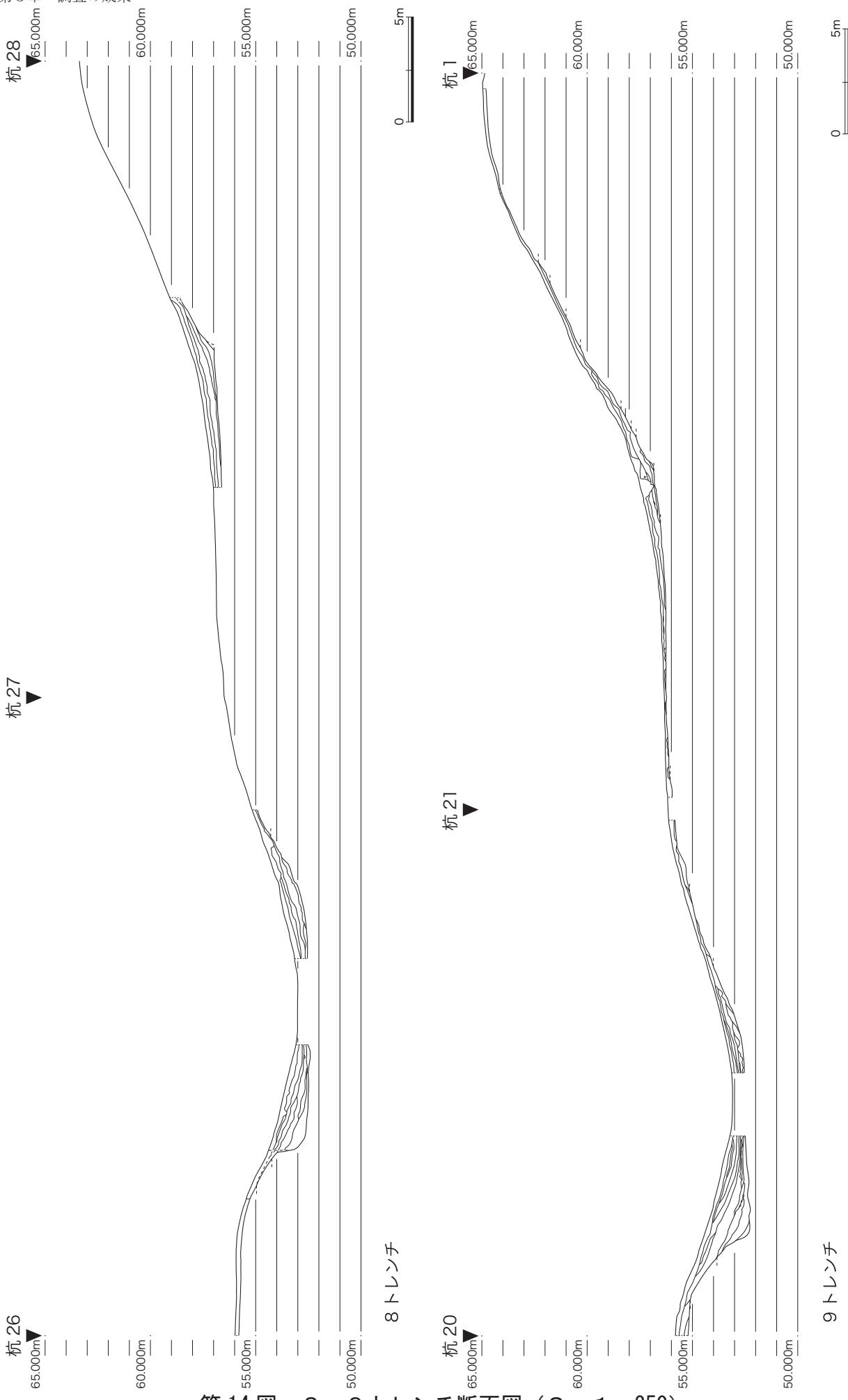
遺構、遺物は認められなかった。ロームへの漸移層（IV層）の上には、暗褐色土（III層）、黒褐色土（II層）が堆積する。



第12図 6トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)



第13図 7トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)



第 14 図 8・9 トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

13 トレンチ

吾妻古墳東側の周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸に対して直交するよう、後円部墳頂（杭1）と杭23・杭24・杭25を結んだ線の南側に設定した。

周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかつたが、杭25やや西側の地点で凝灰岩の碎片が集中する地点が存在した。ロームへの漸移層（Ⅲ層）の上には、黒色土（Ⅱ層）が堆積する。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は、ロームを主体とする土層（4a・4b層）が最初に堆積し、その上に周堀内全体を覆うように黒色の土層（3a～3d層）、さらにその上に褐色を帯びた土層（1～2層）が堆積する。黒色土はこのトレンチ内での堆積が最も厚かつたが、反面、A s-Bの集中の集中が目立たない。中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは40cm程である。周堀外縁は下半分ではやや急に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。周堀内縁は現地表標高54.60m付近の地点で下半分が急激に立ち上がる。確認した周堀内縁では最も立ち上がり方が急峻である。上半分では緩く傾斜し、盛土された墳丘第一段につながる。墳丘第一段の平坦面は、縁辺から16.50m付近まではローム主体の盛土ではほぼ平坦であるが、それより高くなると鹿沼軽石層主体の盛土となり、その先で急激に立ち上がり、墳丘第二段となる。墳頂から11m、標高61m付近の斜面中位に埴輪が集中して出土する平坦面があり、埴輪列や段築がある可能性がある。斜面には盛土としてローム、黒色土、鹿沼軽石層が交互に積み上げられている。墳頂は暗黄褐色のロームによる盛土で、斜面の盛土のローム層より色調が暗く、締まりが弱い。墳頂の9・11トレンチで確認した暗褐色土を覆土とする土坑の縁辺は確認できなかつた。

遺物は埴輪、須恵器甕破片が出土した。周堀中、墳丘第一段平坦面中央から縁辺にかけての出土は数が少なく、墳丘第二段裾から斜面にかけての出土が多い。埴輪の中には形象埴輪がある。線刻が鋸歯状に施されて、赤色塗彩されている。破片のため種類は断定はできない。墳丘第二段頂から須恵器甕口縁部が出土した。他に周堀中から縄文時代と考えられるチャートの剥片が1点出土した。

14 トレンチ

吾妻古墳東側では周堀の内外縁が周堀内に突出する地区があり、従来から造出若しくは陸橋と考えられてきた。周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、括れ部墳頂（杭28）から突出部先端を通る線上の墳丘側に杭29、外側に杭30を建植し、その南側に設定した。

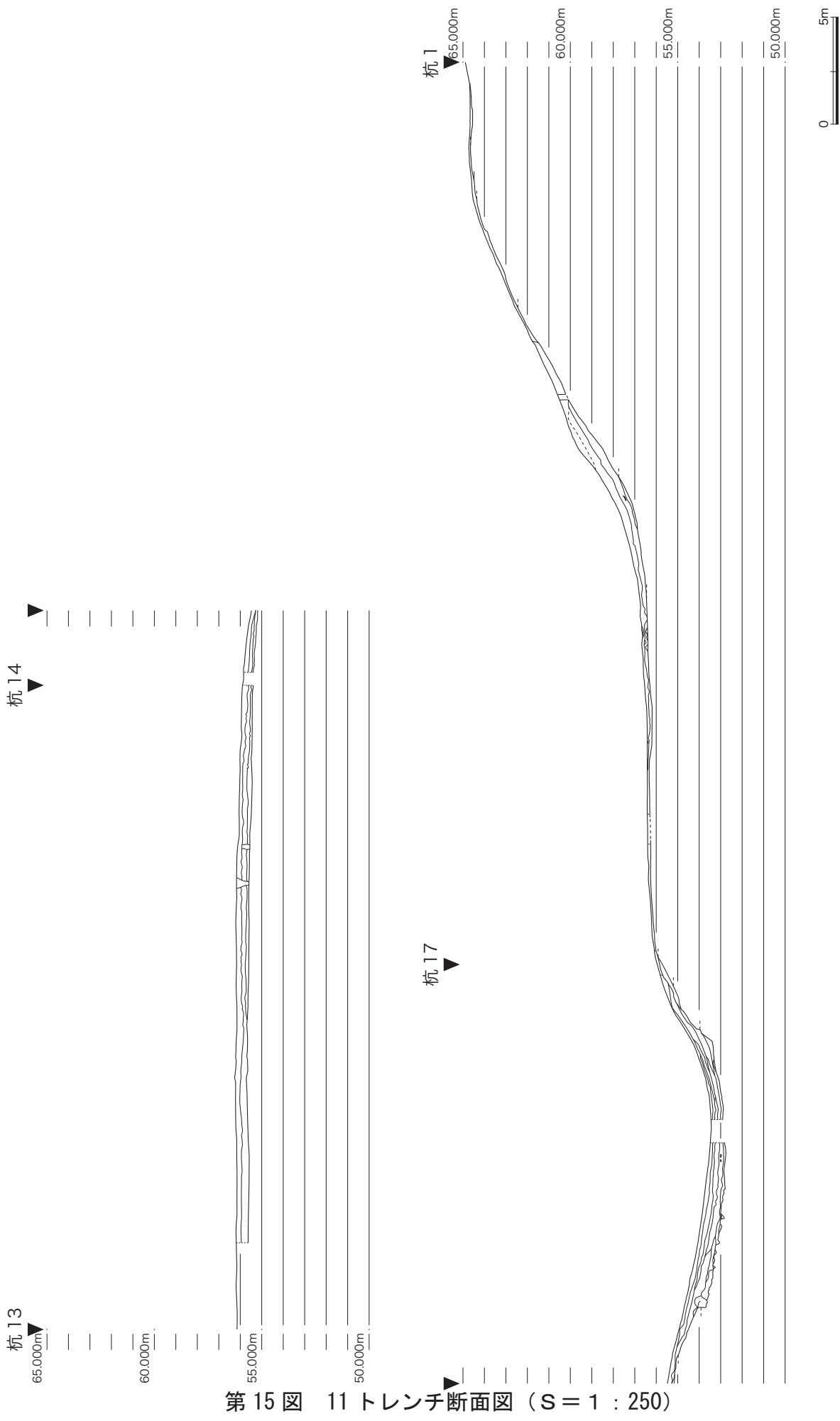
突出部は、他のトレンチでも確認できる、黒色の自然埋没の覆土（3a～3c層）上に、突出部を構成するローム混じりの層（2c～2f層）が載ること、平安時代の灰釉陶器、銅錢（開元通寶、永樂通寶、紹聖元寶？）が出土したことから、後世に形成されたと判断でき、古墳の施設ではないことが判明した。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は、底面に鹿沼軽石層主体の層（5層）が一面に広がった上に周堀外縁と内縁の間にロームを主体とする土層（4a・4b層）が最初に堆積し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土（3a～3c層）が、さらにその上に暗褐色土層（1～2層）が堆積する。覆土中からは周堀底面より約10cm上位でA s-Bの集中（3c層）が層状に認められた。中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは36cmである。周堀外縁は下半分が他のトレンチに比べて緩く立ち上がり、上半分で緩く傾斜する。周堀内縁は現地表標高54.80m付近の地点で下半分が急激に立ち上がり、上半分は緩く傾斜し、盛土された墳丘第一段につながる。墳丘第一段の平坦面は、縁辺から16.50m付近まではローム主体の盛土ではほぼ平坦であるが、それより高くなると鹿沼軽石層主体の盛土となり、その先で急激に立ち上がり、墳丘第二段となる。墳丘第二段斜面は盛土としてローム、黒色土、鹿沼軽石層が交互に積み上げられている。墳丘第二段頂は暗黄褐色ローム層が積み上げられている。斜面の盛土のローム層より色調が暗く、締まりが弱い。

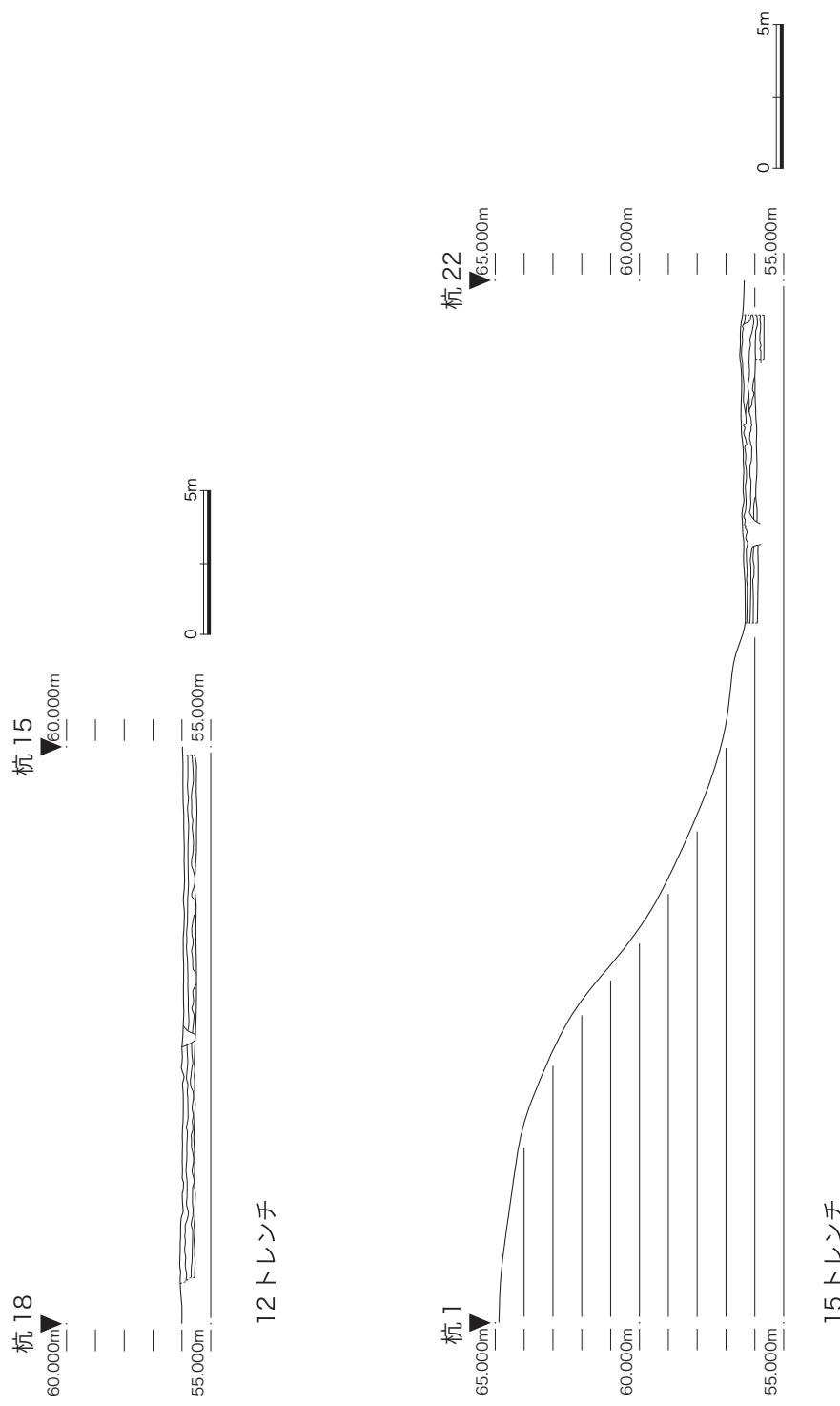
遺物は埴輪、須恵器甕破片が出土した。周堀中、墳丘第一段平坦面中央から縁辺にかけての出土は数が少なく、墳丘第二段裾から斜面にかけての出土が多い。埴輪の中には形象埴輪がある。線刻が鋸歯状に施されて、赤色塗彩されている。破片のため種類は断定はできない。墳丘第二段頂から須恵器甕口縁部が出土した。他に墳丘第二段裾から砥石が出土した。

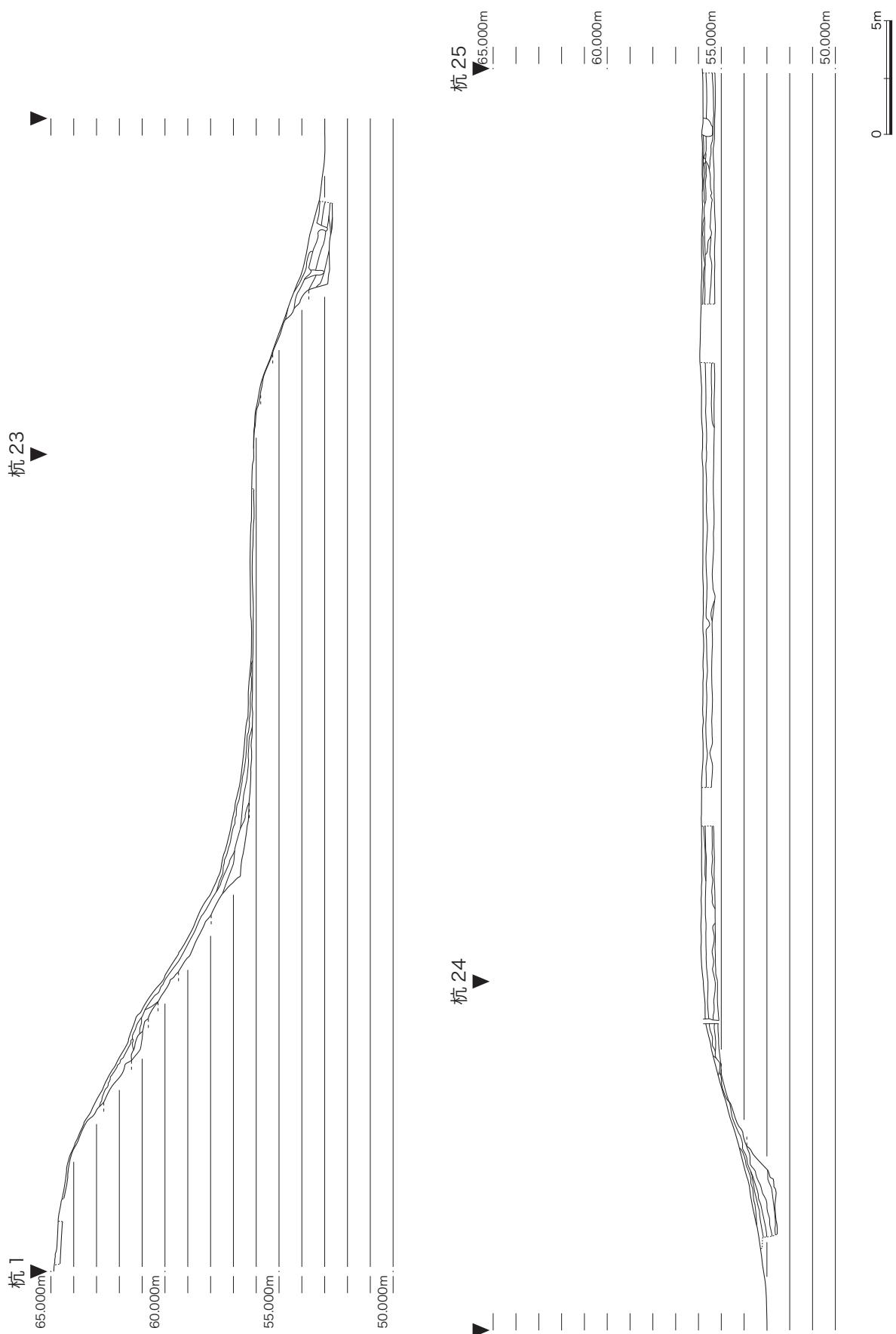
15 トレンチ

藤井43号墳とされている地区は、墳丘第一段上やや外縁寄りで周囲から50cm程高い地蔵となつてゐる。杭1と22を結んだ線の南側に15トレンチを設定して調査した。地蔵を断ち割り調査したところ、15トレンチで地蔵を形成する3層は、墳丘上覆土の3a・3b層上、墳丘上覆土1層と2層の間に形成されており、古墳築造以降で墳丘第二段崩落後に形成されたことが判明した。このことから、藤井43号墳とされた地蔵

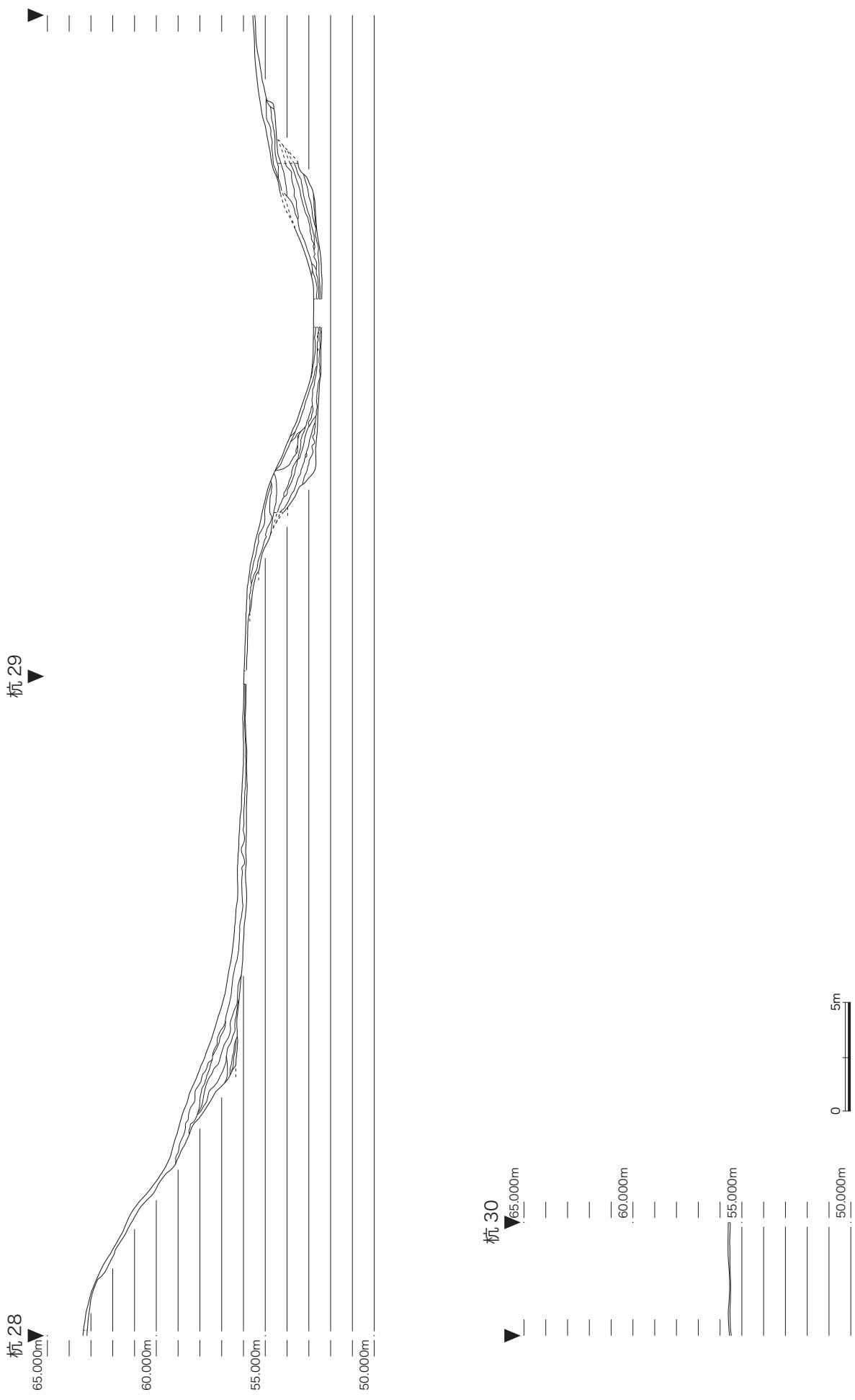


第15図 11 トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

第16図 12・15トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)



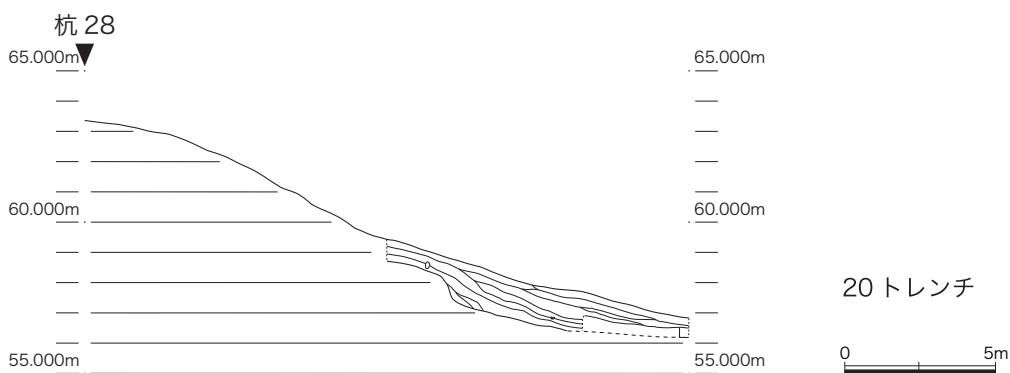
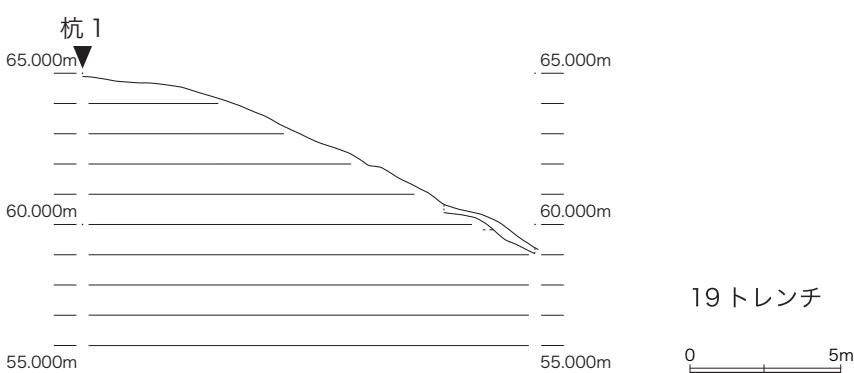
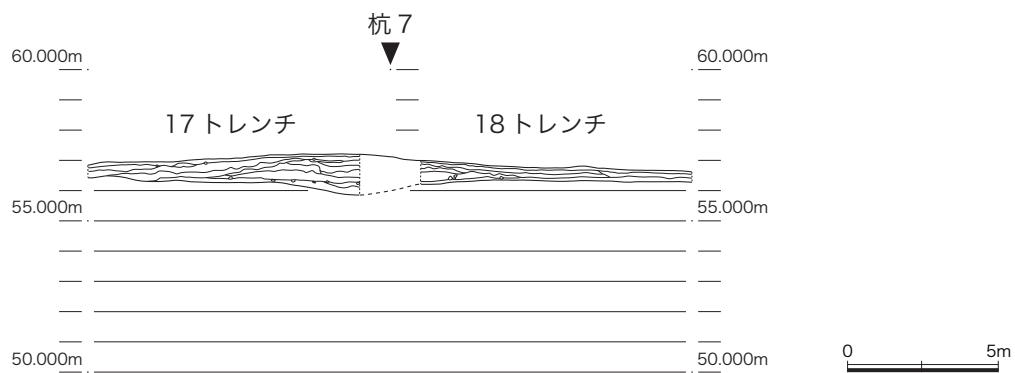
第17図 13 トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

第18図 14トレンチ断面図 ($S = 1 : 250$)

れは古墳に伴う施設ではないことが判明した。遺物は埴輪、須恵器の小片が少量出土したのみである。

16 トレンチ

藤井39号墳頂と杭19を結んだ線上から南側にトレンチを設定して、国指定地内を調査したところ、39号墳の周堀を確認した。39号墳と吾妻古墳の周堀外縁間は5.20m離れており、周堀同士の重複はなかった。その部分ではローム層の上にロームへの漸移層（Ⅲ層）、黒褐色土（Ⅱ層）が堆積しており、39号墳周堀はⅡ層から掘り込まれている。6・7トレンチで土手状の高まりに相当する層（Ia・Ib・Ic層）は39号墳覆土上面を覆っているため、39号墳周堀埋没後の堆積と判断できるが、硬化面（Ib層）が確認できた。過去の地図にはこの部分に道路の標示があるものがあり、路面の造作によるものと考えられる。6・7トレンチ



第19図 17・18・19・20トレンチ断面図 (S=1:250)

チでの高まりの上ではこのような硬化面は確認されていないので、周堀の窪地への対策の結果、硬化面が形成された可能性がある。周堀は断面形が逆台形で、覆土は吾妻古墳の覆土に似る。その上幅4.84m、下幅1.20m、外縁と底面との高低差1.16mである。墳丘部分では旧地表の黒色土上の盛土の残りが悪く、前述の硬化面が墳丘から周堀上にかけて覆っている。遺物の出土はなかった。

17 トレンチ

吾妻古墳前方部主体部前での墓道や前庭部等の有無を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部墳丘第一段平坦面上で杭7と杭6を結んだ線の南側に設定した。

第一段の平坦面上には、墳丘第二段を崩した際の排出土による高まりが見られる。一部に硬化した面が見られ、石材移設時の搬出路を示していると考えられる。それを除去すると、盛土上面が標高56.30m付近でほぼ水平に確認できた。盛土上面は褐色のロームを主体とした土層である。墳丘主軸付近を最深として幅2m程の、主軸方向に長い溝状の落ち込みがある。黒褐色の覆土から成り、破碎された凝灰岩、拳大の円礫を多量に含んでいる。古墳の付属施設である墓道や前庭部と言うよりは、最初の石室開口に近い時期の掘削によるものと考えられる。

遺物は埴輪、須恵器甕破片、鉄器破片、国分寺瓦、古銭（寛永通寶）が出土した。鉄器には兵庫鎖や鉗具と思われるものがあり、古墳に伴う可能性がある。国分寺瓦は表面に近い高さからの出土であり、近年の持ち込みである可能性が高い。

18 トレンチ

吾妻古墳前方部主体部前での墓道や前庭部等の有無を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部墳丘第一段平坦面上で杭7と杭8を結んだ線の南側に設定した。

第一段の平坦面上には、墳丘第二段を崩した際の排出土による高まりが見られるが、それを除去すると、盛土上面が標高56.30m付近でほぼ水平に確認できた。盛土上面は褐色のロームを主体とした土層である。墳丘主軸付近を最深として幅1m程の、主軸方向に長い、浅い落ち込みがある。黒褐色の覆土から成り、凝灰岩の小片、拳大の円礫を多量に含んでいる。最初の石室開口に近い時期の掘削によって生じたものと考えられる。

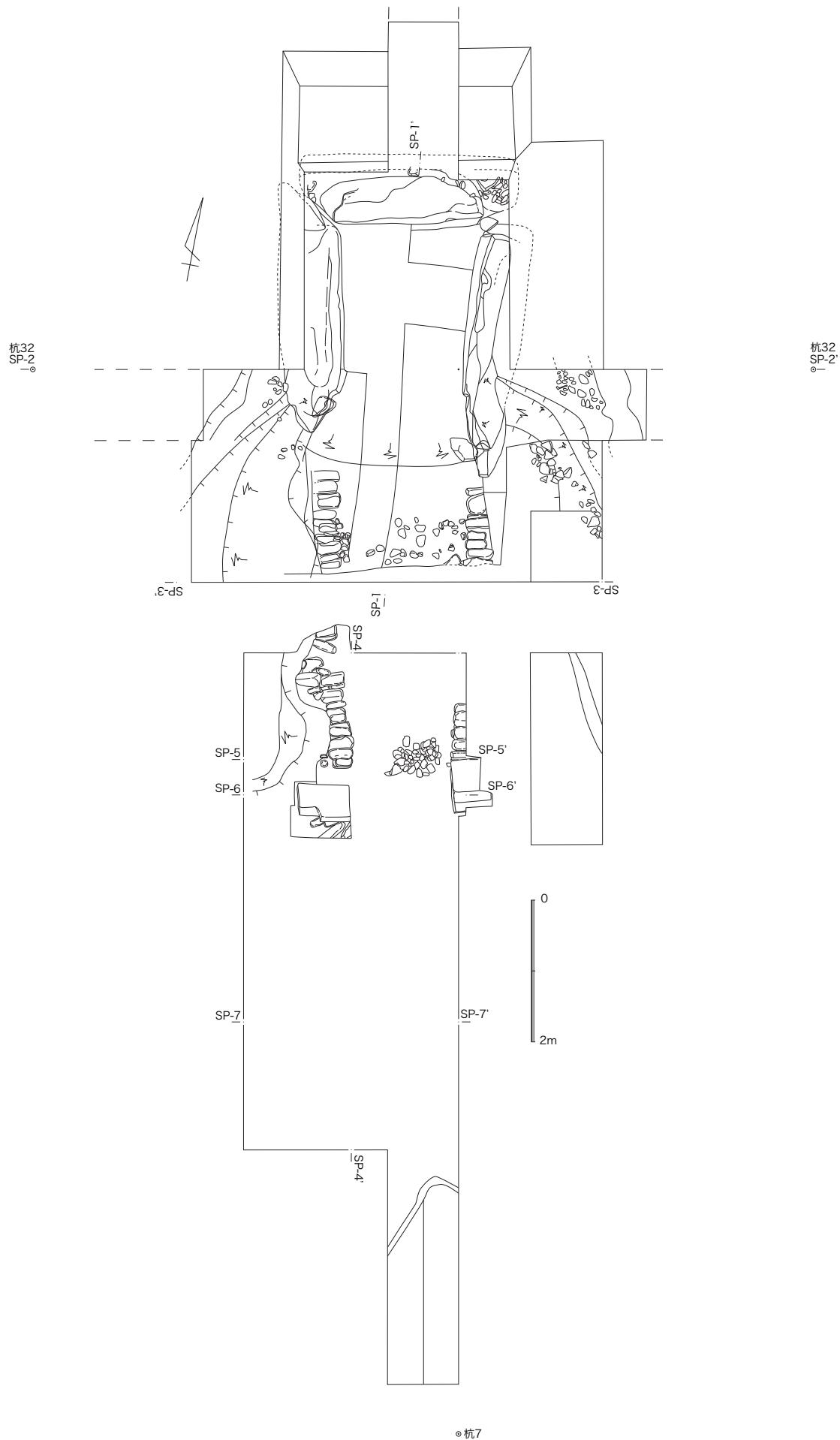
遺物は埴輪、須恵器甕破片、鉄器破片が出土した。鉄器の中には挂甲小札の破片があり、石室内から持ち出されたものである可能性がある。電池やガラス瓶の破片などの現代のゴミも混じっていた。

19 トレンチ

平成21年度の電気探査に於いて吾妻古墳後円部東側で反応が出た地点で、主体部の有無を確認するため、後円部墳頂（杭1）から主軸上の杭13を見通して、東へ115°振った方向に向かう線を設定し、その南側に設定し、杭1から12mと13mの間の地点を調査した。表土を除去すると地表から20cmほどで盛土面が露出した。電気探査に反応したと思えるような石や土層の変化は見らず、主体部の存在は確認できなかった。盛土は鹿沼軽石層混じりのロームや黒色土主体の部分から成る。遺物は埴輪の破片が出土した。

20 トレンチ

平成21年度の電気探査に於いて吾妻古墳括れ部東側で反応が出た地点での主体部の有無を確認するため、括れ部墳頂（杭28）から主軸上の杭13を見通して、東へ73°振った方向に向かう線を設定し、その南側に設定し、杭28から10mの地点から20mの地点を調査し、10mの地点から26.5mの地点で盛土上面を確認した。杭28から11.5mの地点で電気探査に反応したと見られる人頭大の川原石が2点出土したが、覆土中位からの出土であり、主体部の存在を予測させるほどの量ではない。墳丘第一段の平坦面は、鹿沼軽石層主体の盛土で、墳丘中央に近づくにつれてま先上がりに高くなった先で急激に立ち上がり、墳丘第二段となるが、他の地点に比べて斜面は緩やかである。現況でも第二段中位に傾斜の緩い面が確認できる。墳丘第二段斜面は鹿沼軽石層混じりの黒色土主体の盛土である。遺物は埴輪、須恵器甕破片、銅銭（洪武通寶）が出土した。



第20図 前方部主体部平面図 ($S = 1 : 40$)

第3節 前方部主体部の所見

平成20年度に、前方部前端に存在したとされる埋葬主体部（岩屋）を探索するため、杭3と杭7を結んだ主軸線の西側に幅1mと、杭3から15m南の地点に直交する線上の杭31・32の南側に幅1mのトレンチを十文字に設定した。杭7から北8mまでは4トレンチ、それより北は前方部主体部と名付けて掘り下げたところ、杭31・32を結ぶ線上で主軸から約2m西の地点で大型の石材を発見した。そこで前方部主体部トレンチを東西に拡張して、石材の範囲を追求した。その結果、その石材の東側と北側で同様の大型石材を発見した。奥側では奥壁と側壁の上端、玄室前端部分では、側壁上端から80cm下まで掘り下げた。それらの発見から、主体部は横穴式石室で、大型の石材は玄室の奥壁と側壁に相当する部分と判断した。石材はさらに下方に続いており、側壁と奥壁は一枚の巨大な石を箱形に組み合わせていると判断した。

平成21年度はさらに下方に掘り下げ、床面の残存状況を確認した。玄室内は東半分のみ掘り下げるにとどめ、一部床面の状況を確認した。平成22年度は平成20・21年度に確認した主体部の南方を掘り下げ、主体部の南側の範囲を確認した。以上、3カ年に渡る調査の所見を以下にまとめて記述する。

前方部主体部は前述のように横穴式石室である。奥壁側から順に、側壁が一枚石を立てた部分、川原石小口積みの部分、凝灰岩切石積みの部分から成る。川原石積みの部分が大きな比率を占めるので、一枚石の部分を奥室、川原石積みの奥の部分を前室、入口に接する部分を羨道、凝灰岩切石積みの部分を羨門と見なすことができる。

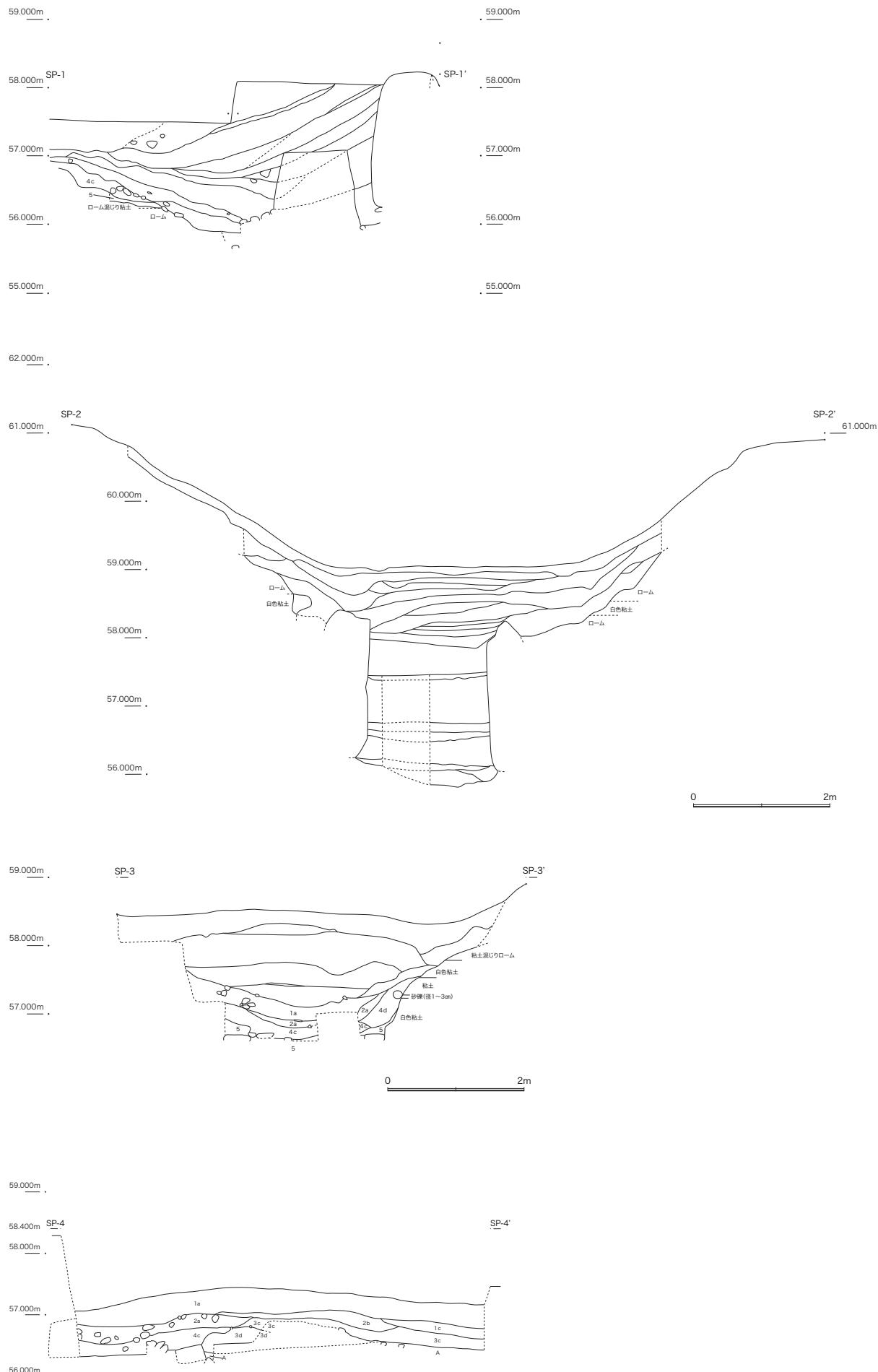
奥室部分は、側壁、奥壁がほぼ垂直に立てた、青灰色の破碎状閃緑岩の一枚石で、玄門が凝灰岩の一枚で構成されている。側壁上端において、西側壁は奥壁とほぼ接しているが、東側壁は奥壁との間に約40cmの空隙がある。側壁上縁や側縁、奥壁側縁には石材同士を組み合わせるための割り込みがある。西側壁石材は上端内面側が、東側壁石材は上端全体が平滑に仕上げられている。東側壁石材は玄室内から玄門部分にかけて剥落が見られる。玄室内壁面から側壁前端にかけて赤色塗彩が施されるが、側壁上端の割り込みの外側には施されない。玄門部分の割り込み間の幅は1.84m、玄室の内法は奥行き2.40m、幅1.70mである。これらの数値は壬生城址公園に保管されている天井石、玄門石と一致する。

玄室の南方には、川原石積みの側壁が続き、その前端には凝灰岩切石が置かれる。奥壁から切石前端までの長さは8.4mである。

石室内の覆土は北から南へ傾斜して堆積しており、特に石室中央が堅くしまっている。鹿沼軽石層、ローム層、砂質土層が縞状に堆積し、一見、墳丘の盛土に見えるが、その中からは明治31年銘の一錢銅貨が出土しているので、明治26年の野寺茂平の発掘調査以降の埋め戻しと考えられる。この土層は玄室中央が最も深く、南方にいくに従って浅くなり、杭7の北方3.3m付近で消滅する。平成22年度の調査区ではこの土層が石室外に通路状に細長く続いているのが確認できた。

玄室内は、側壁最下底面まで攪乱が及んでいる。側壁底面付近から近世の陶磁器、不明銅製品（図版22）が出土しており、明治期の埋め戻しの土が充填されている。古墳時代の床面は調査した範囲では確認できない。その攪乱は玄室前端で立ち上がるが、その部分は玄門の据えられていた部分にあたり、明治初年の領主による石材抜き取りの痕跡と考えられる。明治期の埋め戻しの層の直下には川原石小口積み部分の上を覆い、石室外に延びる暗褐色の土層がある。この層中からは石室外で銅製懸仏、銅錢（熙寧元寶？）、砥石、土師質土器杯が出土している。懸仏の出土は『下野國古墳図誌』でも絵入りで報告されており、その形状は酷似している。川原石小口積み側壁部分は奥壁側の幅1.70m、羨門際の幅1.40mで、一～四段残存している。側壁の石材は細長く、盛土中の円礫より大きく、長さ35cm、幅15cm、厚さ10cm、重量10kg程である。ただ出土数は少なく、覆土中には川原石、凝灰岩碎片が多数混入しているものの、側壁の石材は5、6点にすぎない。これらのことから、明治初年の石材抜き取り以前にも奥室の前は石室の破壊が進んでいたことが想定できる。石室先端の凝灰岩切石は全面加工が施されており、西側壁は一石、東側壁は二石が残存していた。西側壁の切石は幅70cm、奥行き50cm、高さ30cmで、Lの字形を呈する。表面にわずかに工具痕が残る。東側壁の切石は下段の石が奥行き60cmで、西側壁の切石と対応する位置にあるが、完掘していないので全容は不明である。奥行きや奥壁からの距離は西側壁の切石とわずかに違っている。上段の切石は幅50cm、奥行き50cm、高さ30cmで、西側や下段の切石より加工が丁寧で、入口側が斜めに面取りされている。奥側下端が逆Lの字形に加工されて切組状を呈し、10cm程高さを増している。横方向の目地は奥側に向かって低く傾いている。

これらの切石の位置は現在の前方部墳丘第二段前端の裾とほぼ一致している。西側壁、東側壁の下段の切石の中位までローム主体の褐色の盛土で埋められている。西側壁の切石の下や石室前には盛り土内に川原石



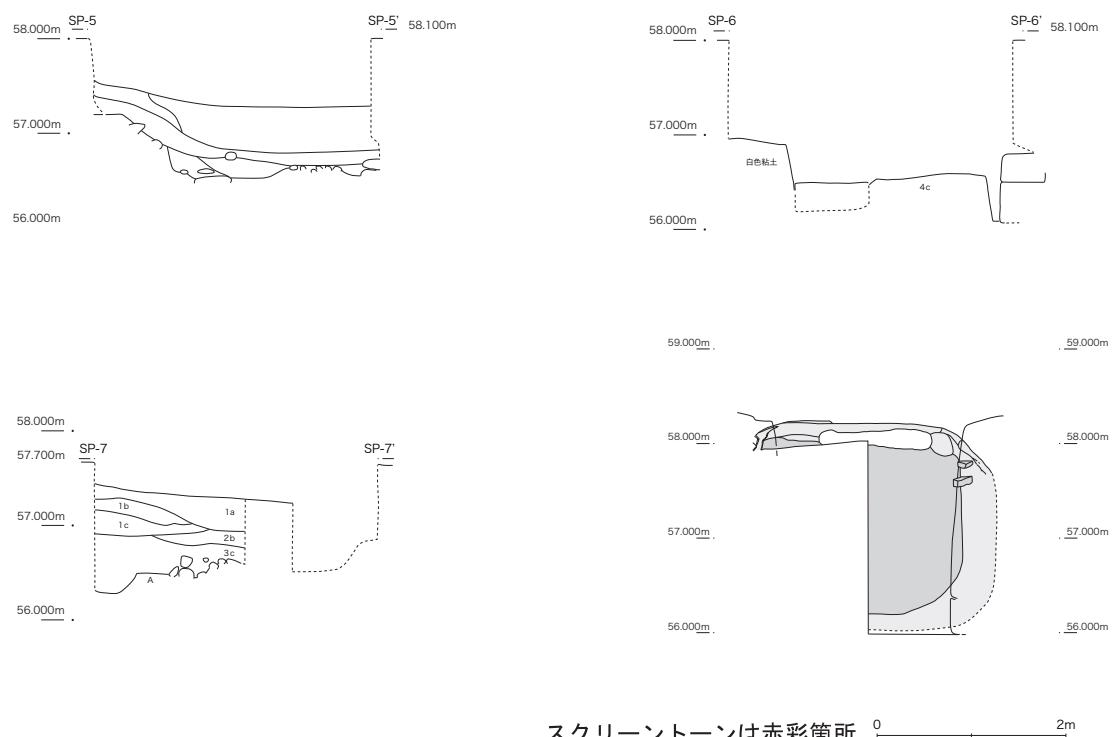
第21図 前方部主体部断面図 ($S = 1 : 40$)

が埋め込まれている。石室裏に相当する部分の墳丘盛土には白色粘土、円礫が混ぜ込まれてれている。石室前の墳丘第一段平坦面には、円礫や凝灰岩の碎片が多量に分布しているが、いずれも墳丘上の覆土中からの出土で、石室が開口したときに排出されたと考えられ、前庭部や墓道等の施設は確認できない。

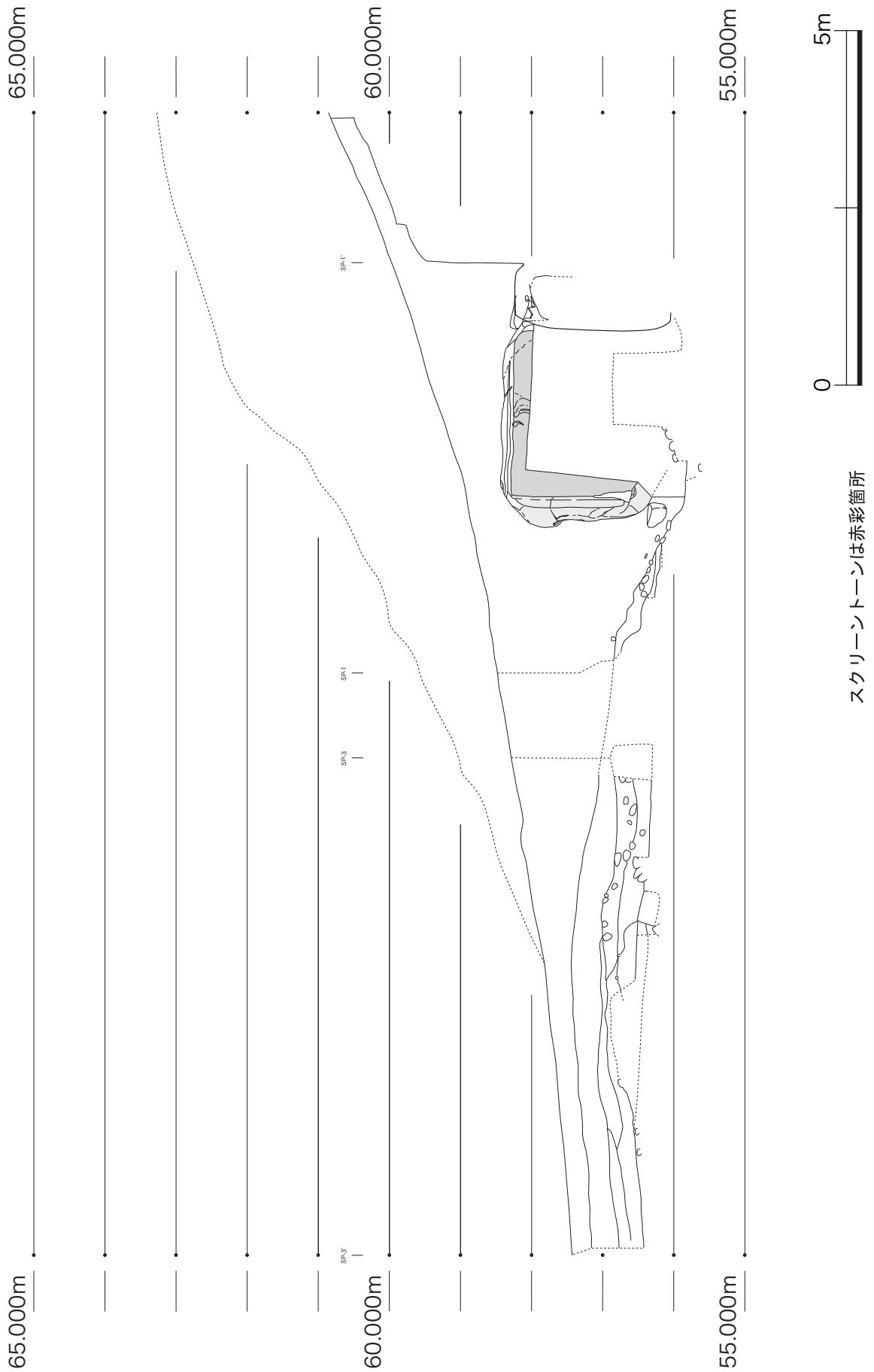
古墳時代の遺物は、川原石小口積み側壁部部分の平成21年度調査区から挂甲小札、銀板破片、ガラス玉、埴輪片、須恵器片が、平成22年度調査区から挂甲小札、装飾付大刀銀製責金具、銀装刀子、ガラス玉、埴輪片、須恵器片が出土している。平成22年度調査区石室外から金銅製帶金具、埴輪片、須恵器片が出土している。

前方部主体部土層説明（明治初期以降の土層は除く）

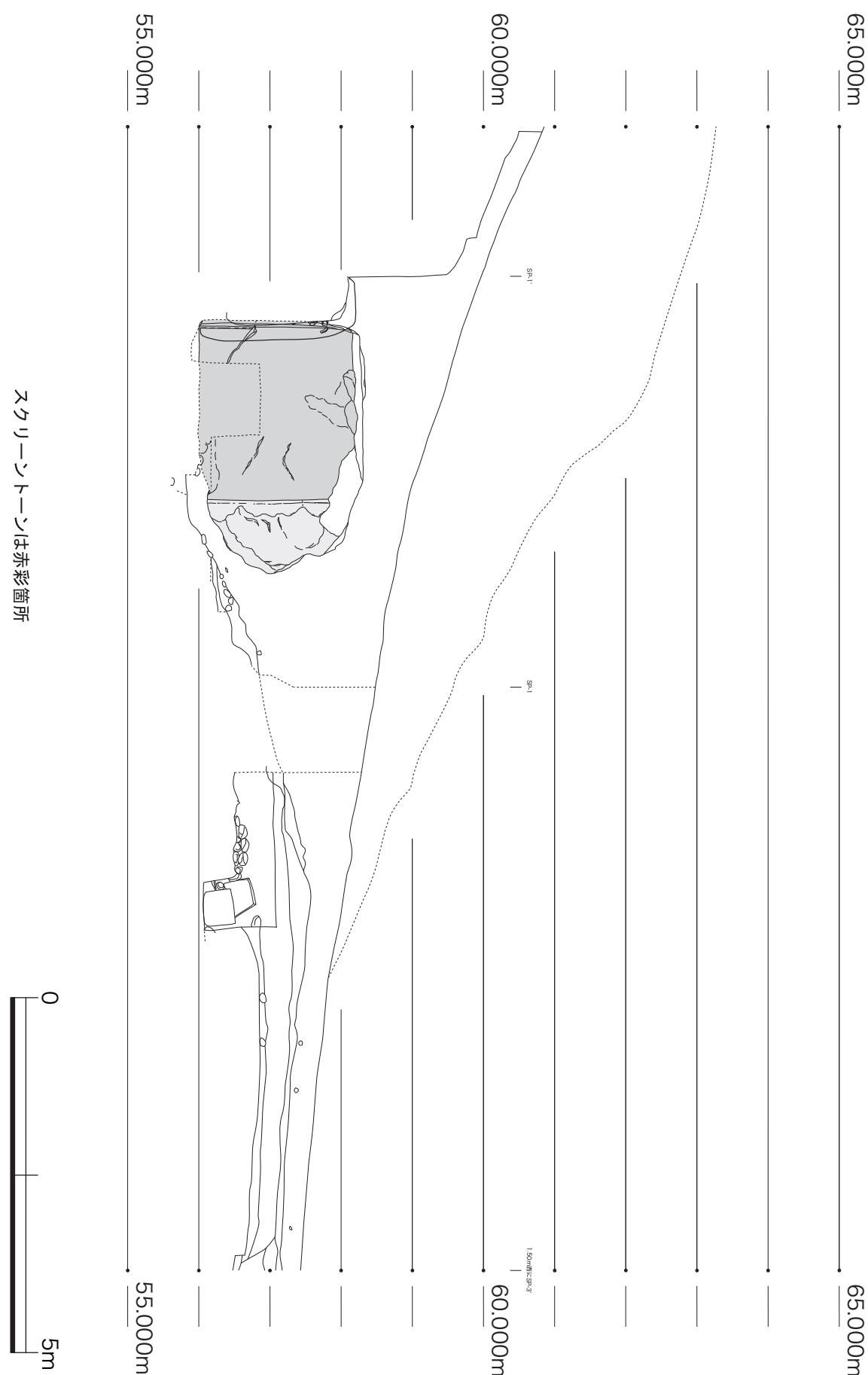
- 1a 褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒少量
- 1b 黒褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒微量
- 1c 褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒少量
- 2a 淡黒褐色土 粘性あり しまりあり 白色粒微量、凝灰岩碎片中量
- 2b 暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 白色粒微量、凝灰岩碎片中量
- 3c 黒褐色土 粘性非常にあり しまりややあり 白色粒微量、上面に円礫少量
- 3d 黒色土 粘性非常にあり しまりややあり 白色粒微量
- 4c 暗褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒少量 円礫多量、凝灰岩碎片紹量
- 4d 暗褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒中量
- 5 灰褐色土 粘性非常にあり しまり非常にあり 粘土ブロックより成る 黒色土塊少量
- A 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒多量 墳丘盛土



第22図 前方部主体部断面図 (S = 1 : 40)



第23図 前方部主体部西側面図 ($S = 1 : 40$)



第24図 前方部主体部東側面図 ($S = 1 : 40$)

第4節 遺物

埴輪

出土遺物のうち、多数を占めるのは埴輪であるが、原位置を保つものは確認されていない。完形に復元できたものは皆無である。色調は、大きくはぶい黄橙色と明赤褐色のものの二種類がある。胎土に雲母を含むものが多い。ハケメの原体は細く間隔が密なものが主体を占める。

円筒埴輪は外面に横方向のハケメを施した後、縦ハケメを施すものが主体を占める。内面にはハケメが比較的多く施される。突帯は、8トレンチ12で五条以上が確認されているのが最多で、残存高40.9cm、最下段の直径42.0mである。

口縁部の形態には、1：緩く外反するもの（1トレンチ1、7トレンチ4、8トレンチ1・2・3・4、9トレンチ2、14トレンチ1・3）、2：口縁端をつまみ出したもの（1トレンチ4、7トレンチ1・2・3、8トレンチ5、9トレンチ1）、3：突帯を貼付し、つまみ出したように見せるもの（14トレンチ2）、4：口縁がやや開き、強いナデによって稜線が明瞭なもの（1トレンチ2・3、11トレンチ1）、5：口縁が直立するもの（14トレンチ4）の五つの形態がある。底部には、低位置突帯は確認されていない。底面にヨシ属の茎の圧痕を持つものが主体を占める。底部調整は確認されていない。焼成前にひび割れが入っているものが目立ち、7トレンチ5では、その対処としてか線刻や穿孔が施される。

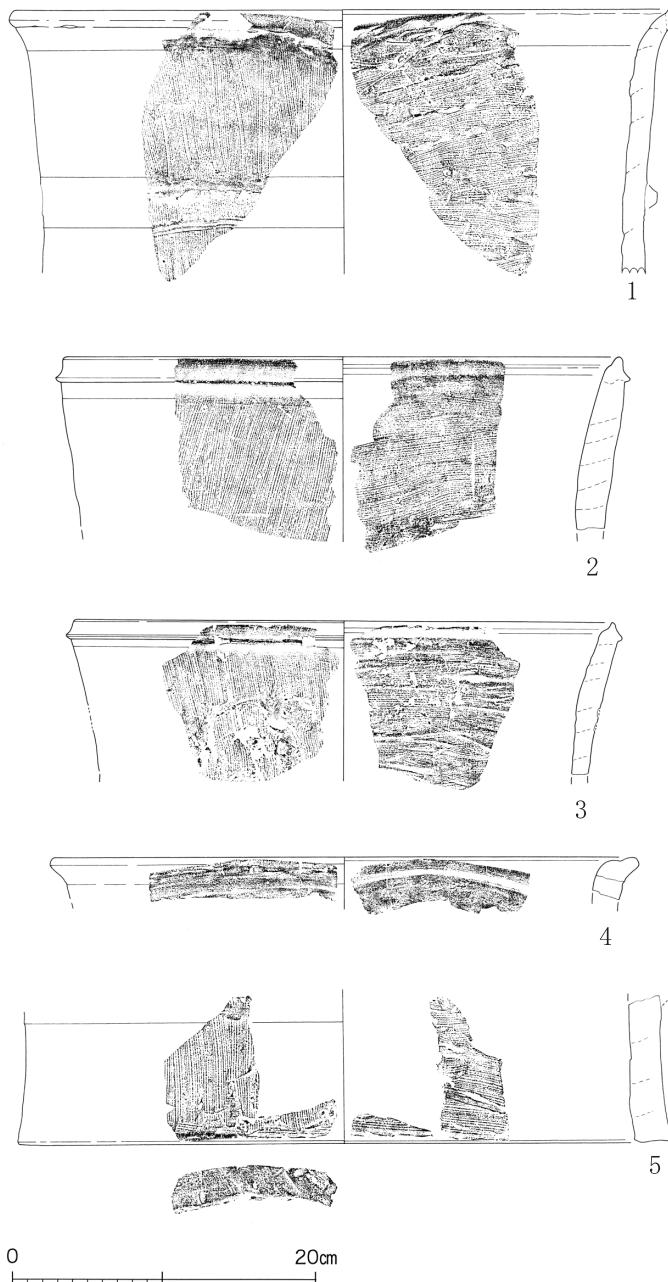
線刻には、7トレンチ1のように波状の線刻が一周するもの。9トレンチ1のように直角に曲がる二本の線とその対角線が施されるものがある。

朝顔形埴輪は、復元できたものは13トレンチ1のみである。残存高26.5cm、口径54.1mと大型である。

形象埴輪は原形が確定できるものは少ない。色調は、大きく明赤褐色のものが多い。第38図1・3・4、第42図1・3・4・5、第43図1、第44図3・4・5・6は赤褐色、第39図、第40図1・2、第43図3、第44図7は黄橙色の鞆（または盾）形埴輪、第40図3・5、第41図1、第44図1・2は蓋形埴輪、第38図6、第40図4、第43図2は家型埴輪、第38図5、第42図2は人物形埴輪腕部、第40図6は人物形埴輪首飾部、第44図8は人物形埴輪指先部、第38図2は動物形埴輪（種類不明）と考えられる。鞆（または盾）形埴輪は赤色、第39図8のみ白色、蓋形埴輪は赤色、第41図1のみ黒色、家型埴輪は黒色塗彩される。前方部主体部内や付近から出土した埴輪は墳丘を崩した際に混入したものと判断でき、もともと前方部第二段にあったものと考えられる。

土器

土器類も埴輪同様で、破片のみである。



第25図 1トレンチ出土円筒埴輪実測図

S = 1/5

古墳時代～平安時代のもののみ図示した。

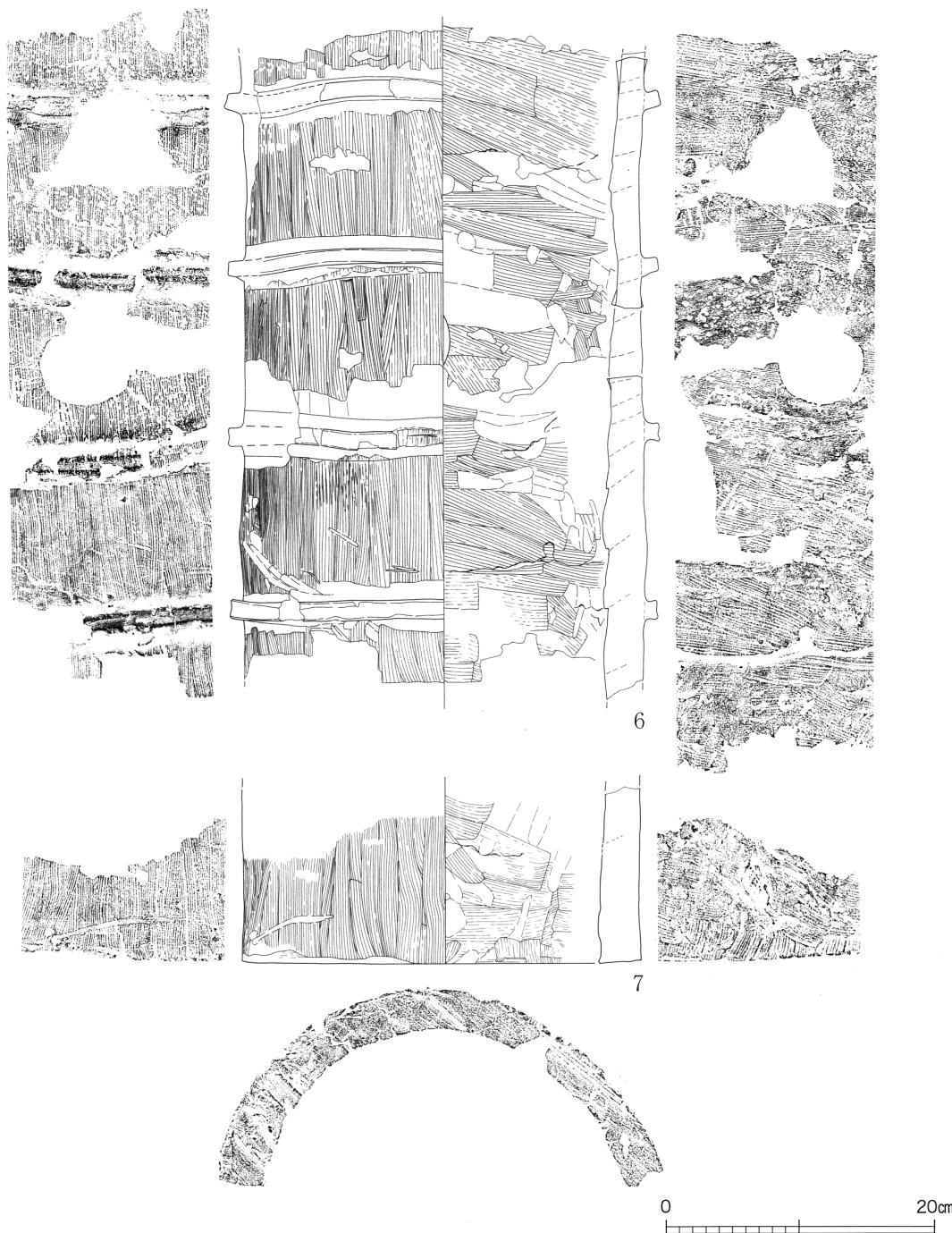
須恵器は甕のみ確認した。第45図3は残存高7.8cm、口径17.2mである。外面には平行叩き、内面には同心円の当て具痕が残るが、当て具痕の痕跡は浅い。後円部頂から出土した。

土師器は第45図5は杯で、7世紀代の所産と考えられる。第45図7は平安時代の台付甕で、残存高5.3cm、底径8.0mである。いずれも周堀覆土中から出土したが、古墳築造時のものではない。第45図6は灰釉薬陶器である。残存高3.2cm、口径15.2mである。周堀覆土中から出土した。口縁部は外反し、灰釉をハケ塗りする。東濃産で光ヶ丘1式で9世紀後半の所産と考えられる。

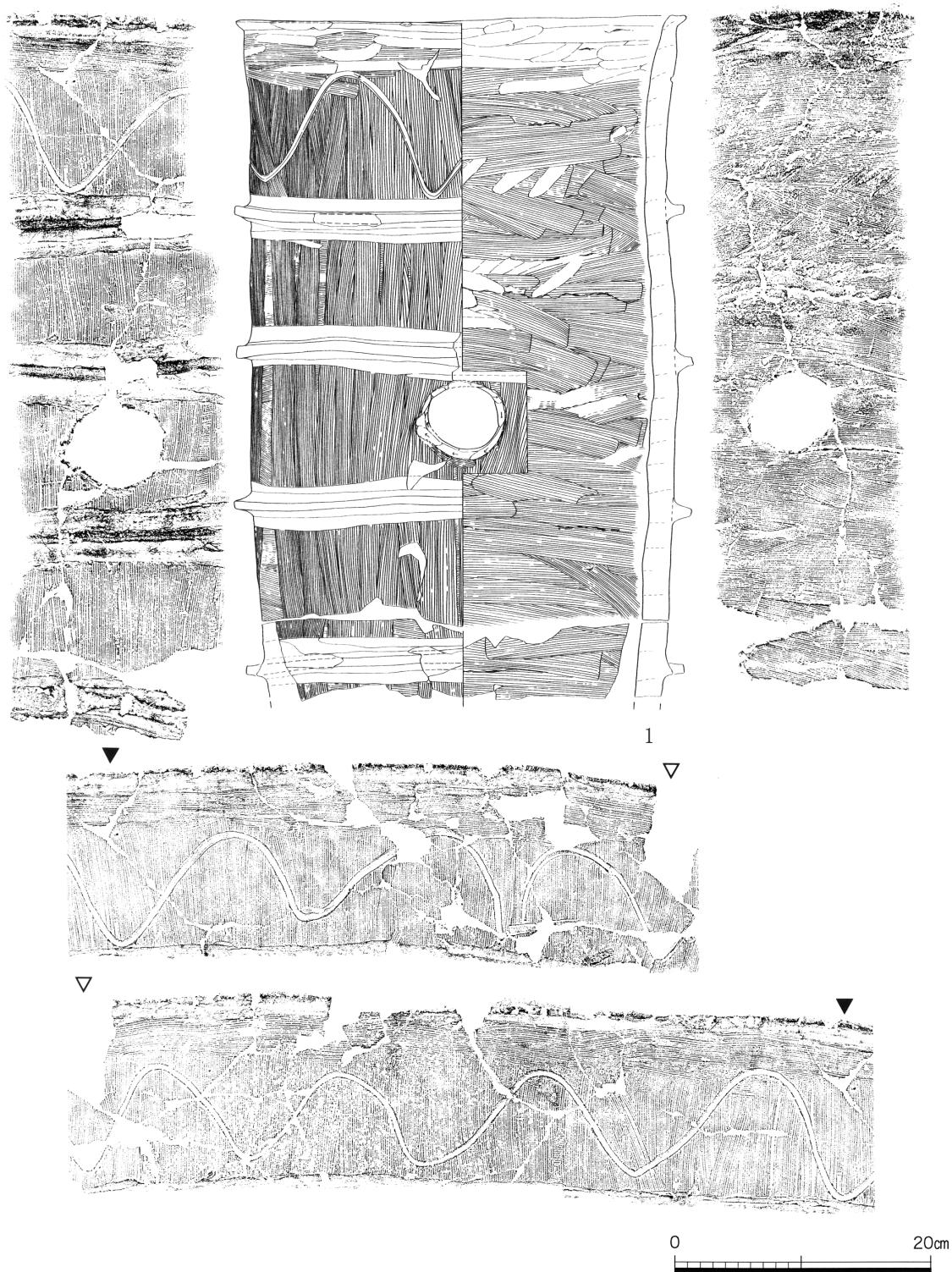
金属製品

墳丘の各トレンチから鉄器の破片がわずかに出土したが、古墳時代の遺物と断定できるものはない。

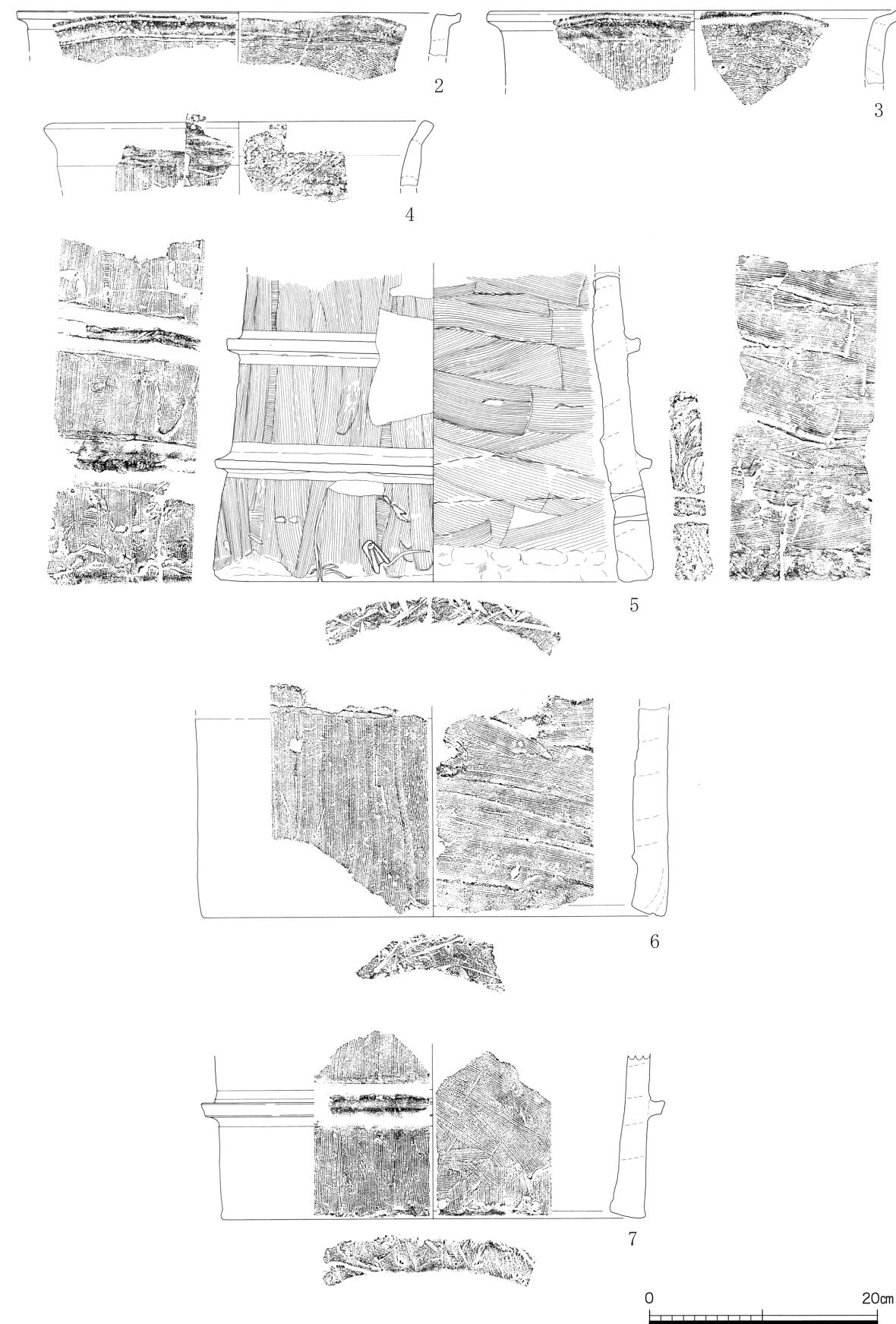
前方部主体部では鉄製品や銀製品、金銅製品が出土している。X線撮影を行い、その形態から古墳時代の遺物と考えられるものを掲載した。



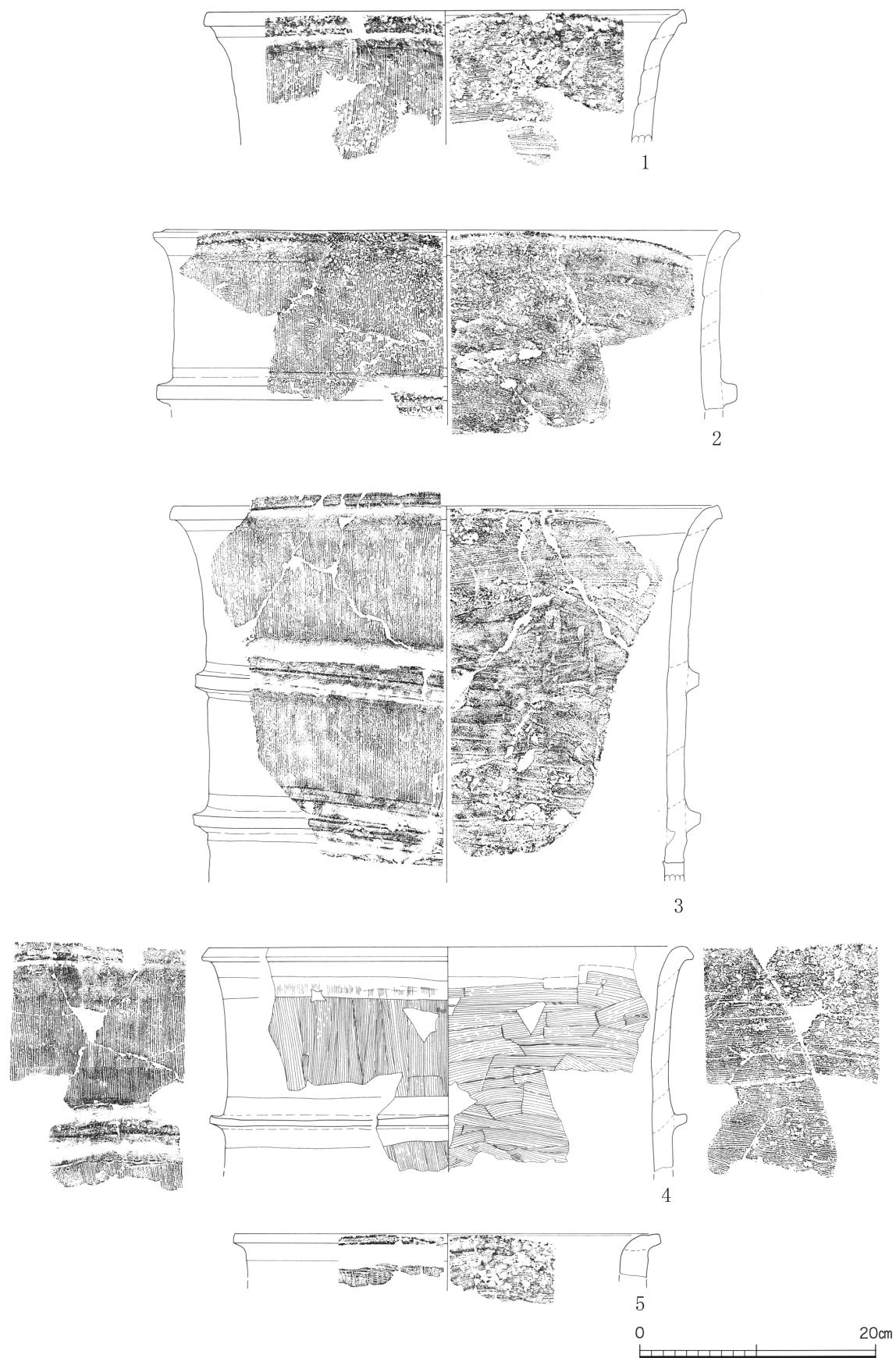
第26図 1トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5



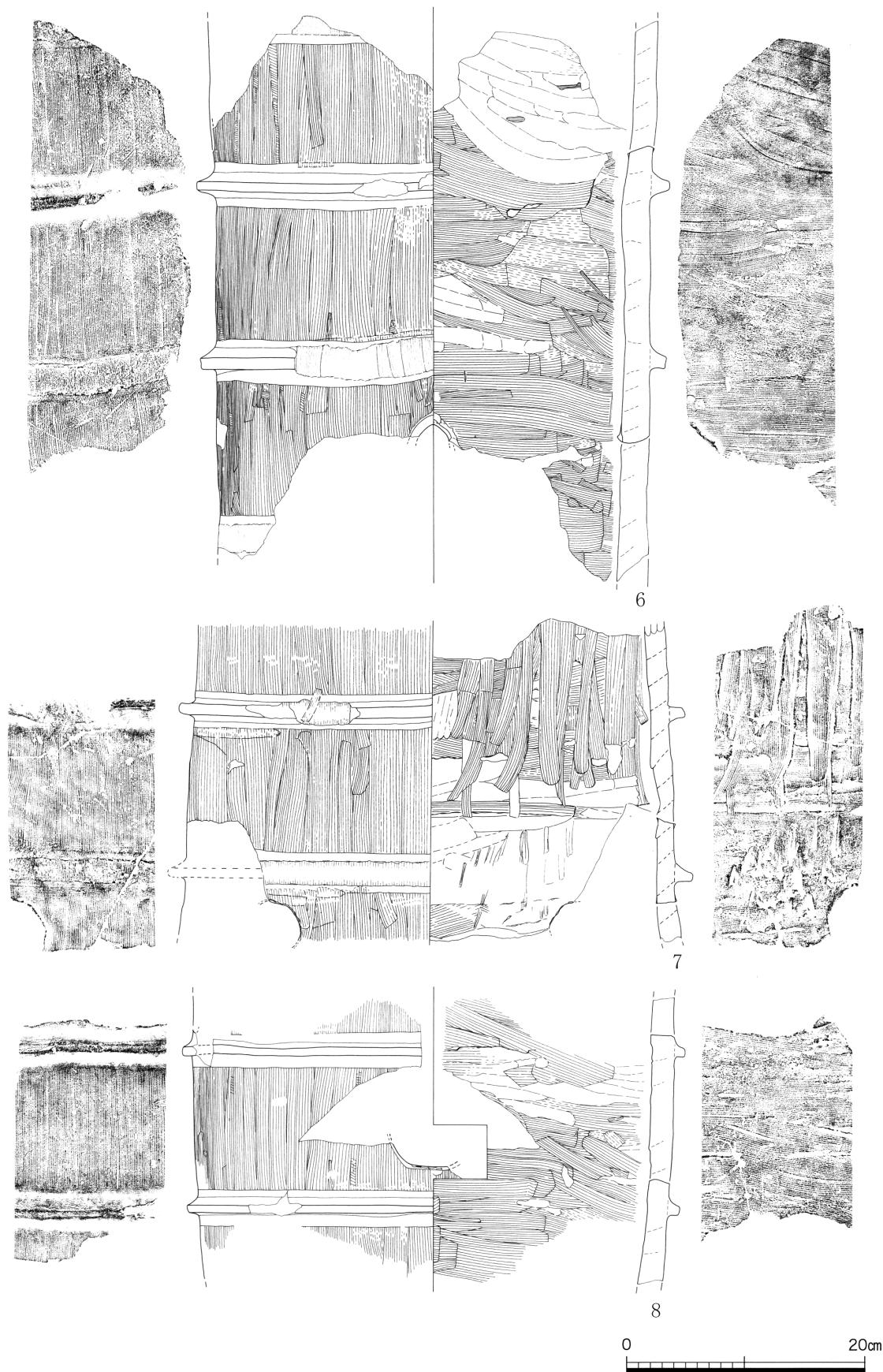
第27図 7トレンチ出土円筒埴輪実測図 $S = 1/5$



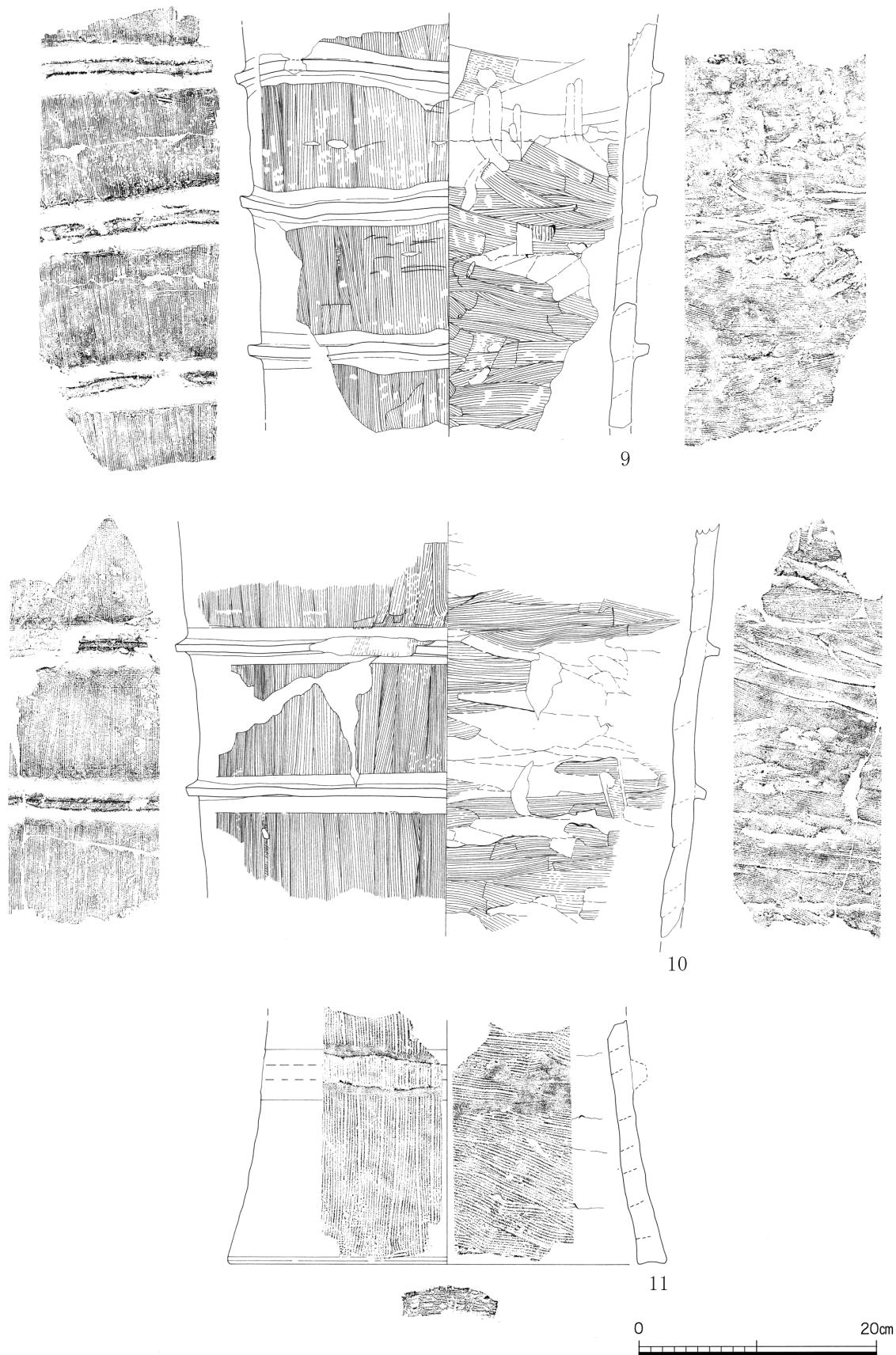
第28図 7トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5



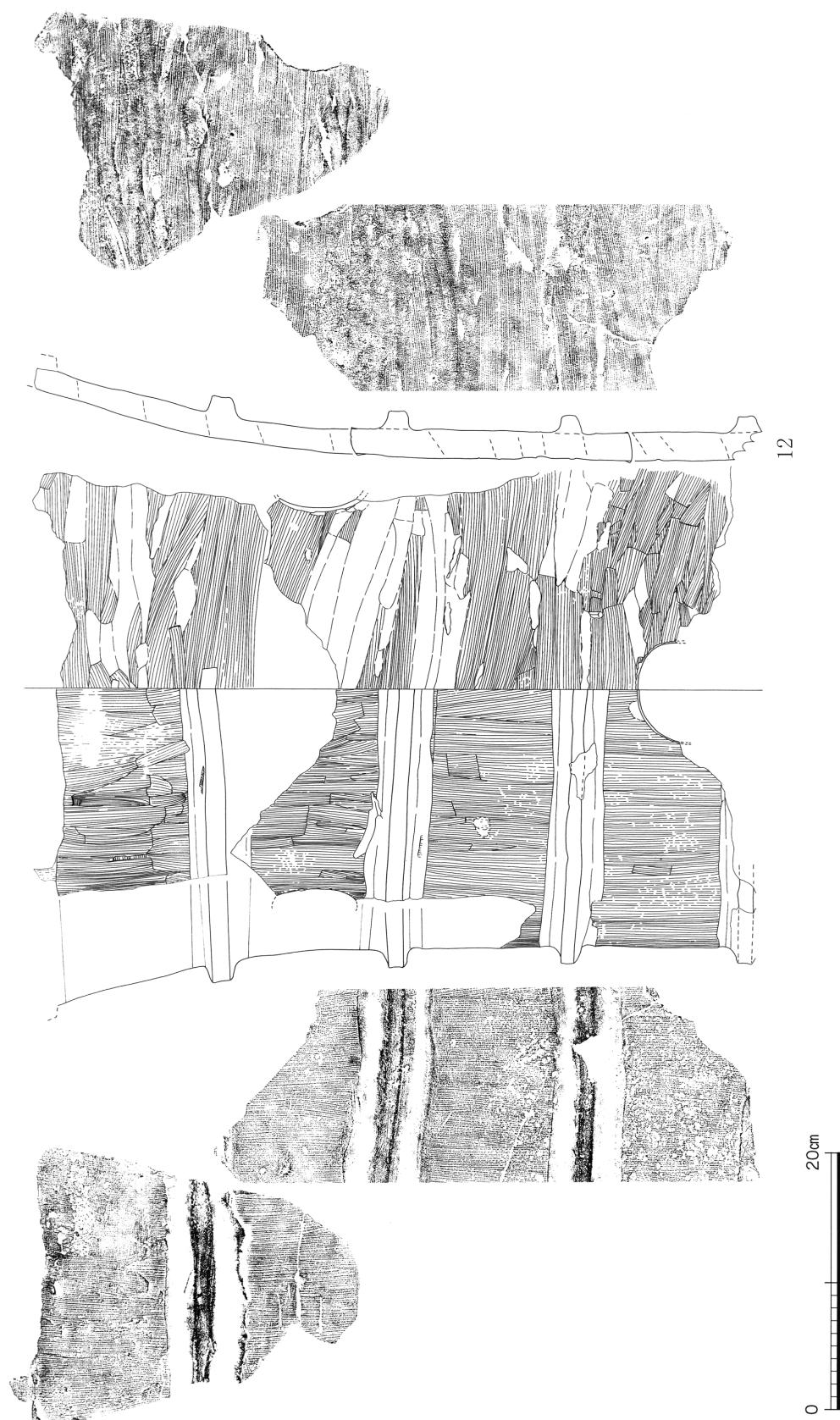
第29図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5



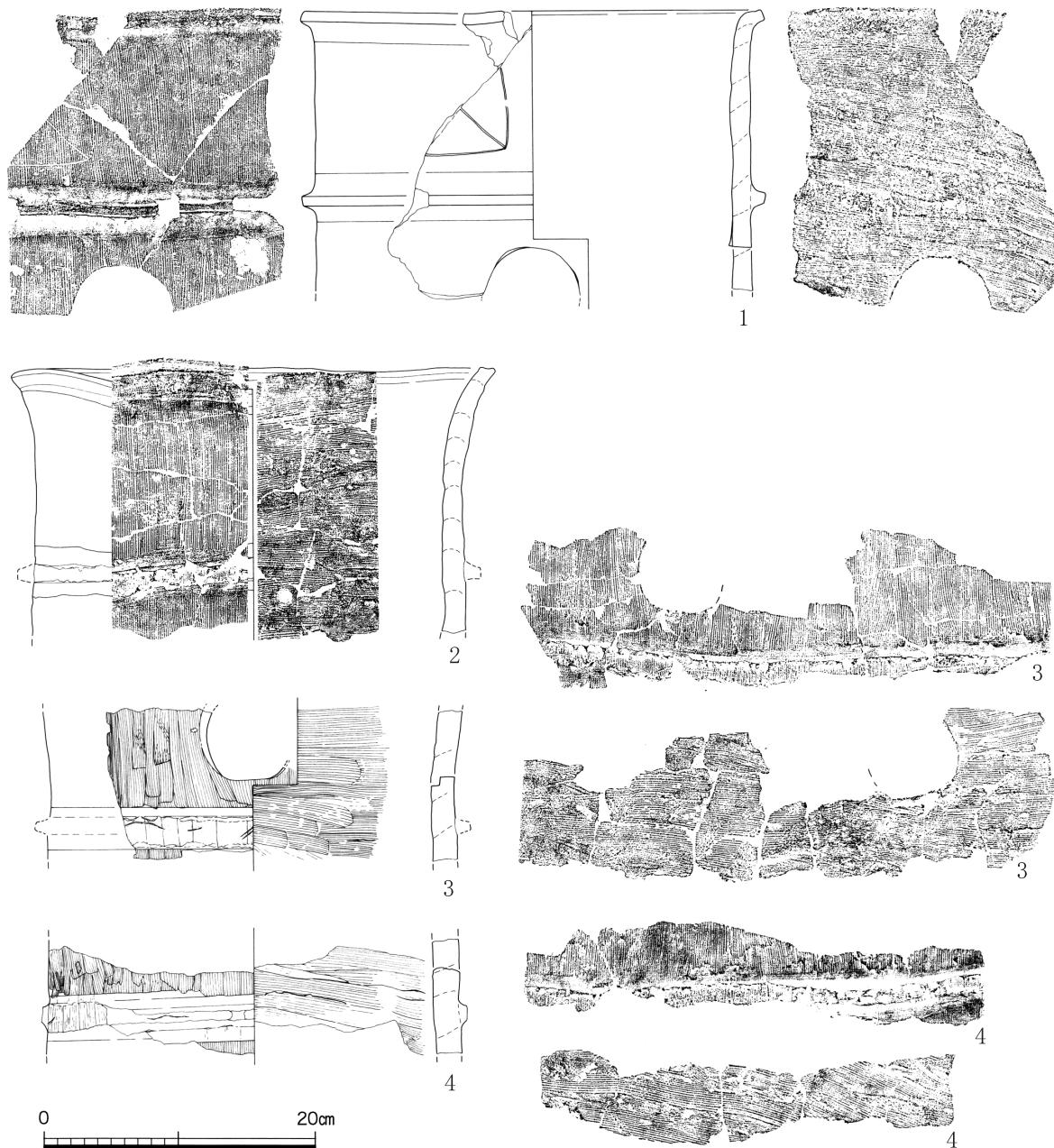
第30図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5



第31図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5



第32図 8トレンチ出土円筒埴輪実測図 $S = 1/5$

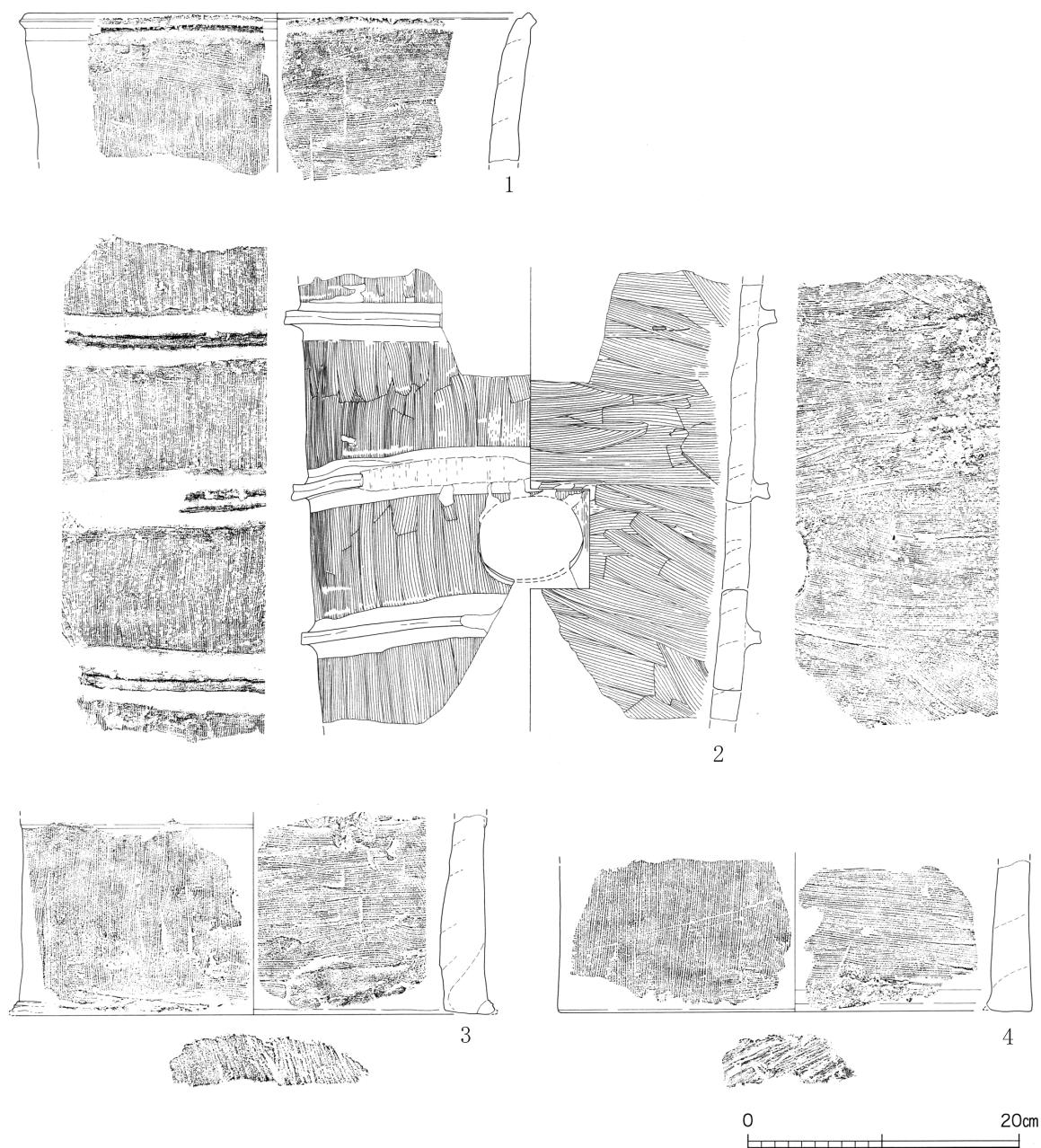


第33図 9トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5

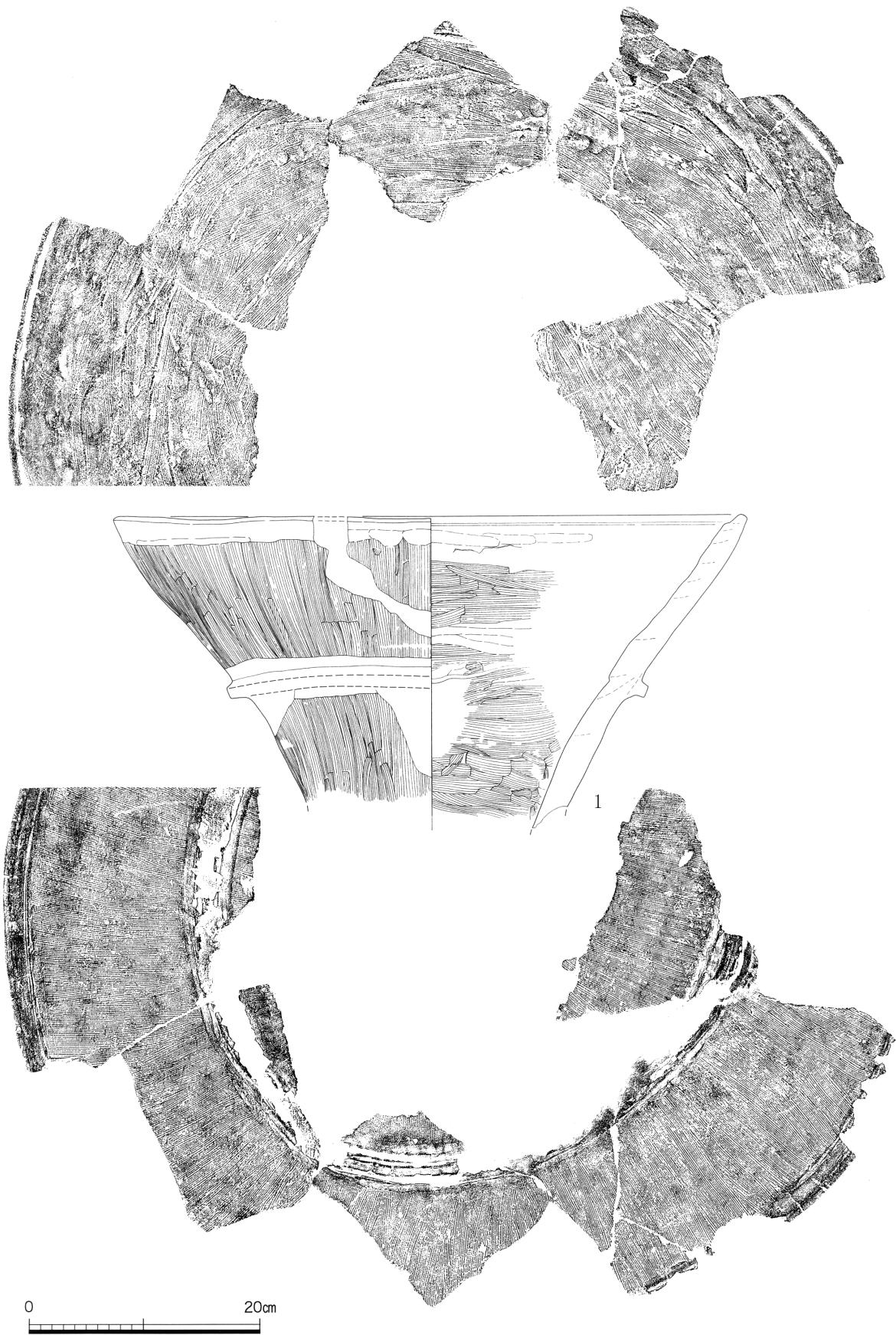
第46図1は小札とも考えられるが、幅が1.6cmで他の小札に比べて狭く、断定できない。第46図2～5は鉄鎌か鉄釘である。2は鋒により膨れているため、不明であるが3～5は断面形が長方形で先端にいくほど細くなる。第46図6・7は灰白色や黒色を呈する薄い板であり、X線撮影フィルムを見ると透過度が低いので、銀板と考えられる。連珠文や唐草文と判断でき、冠の破片と考えられる。

最も多いのは挂甲小札である。第47図1～7・11・14・15・16は緘孔1列偏円頭である。8・9・12・13は緘孔2列偏円頭である。26～31は隅切、29～31は3孔で、草摺と考えられる。1は幅3.0cm、残存長5.5cm、6は幅2.7cm、残存長4.9cm、27は幅3.0cm、残存長3.9cm、28は幅2.3cm、残存長3.5cm、31は幅3.5cm、残存長3.4cmである。第48図1は小札の中で唯一の完形品である。長さ9.0cm、下幅3.3cm、上幅2.8cmで、緘孔1列偏円頭で隅切である。X線撮影フィルムで12個の穴が確認できたが、中央の穴は不明である。第48図2は底部が方形、3は隅切である。

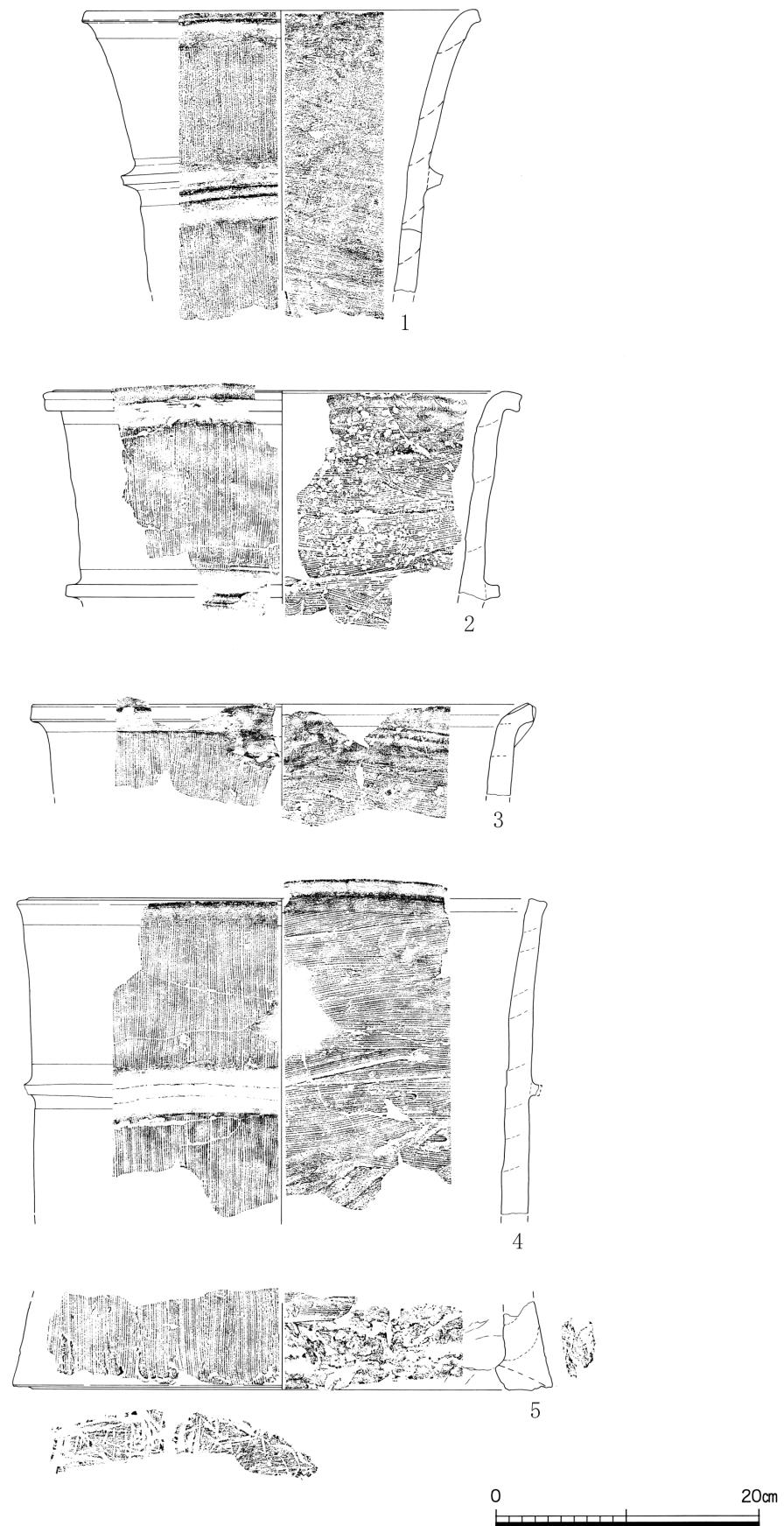
第48図4・5は鉄板であるが、縁が僅かに折り曲げられたり、切り抜かれたりしており、古墳時代のものでない可能性がある。第48図6・7はいずれも断面円形で、兵庫鎖、鉸具の可能性がある。第48図8・9は断面長方形で、鉄鎌の頸部、茎部である。第48図10は先端の鋒が著しく、形状が不明確である。基部の断面が長方形で、8に似ており、刀子か鉄鎌と考えられる。



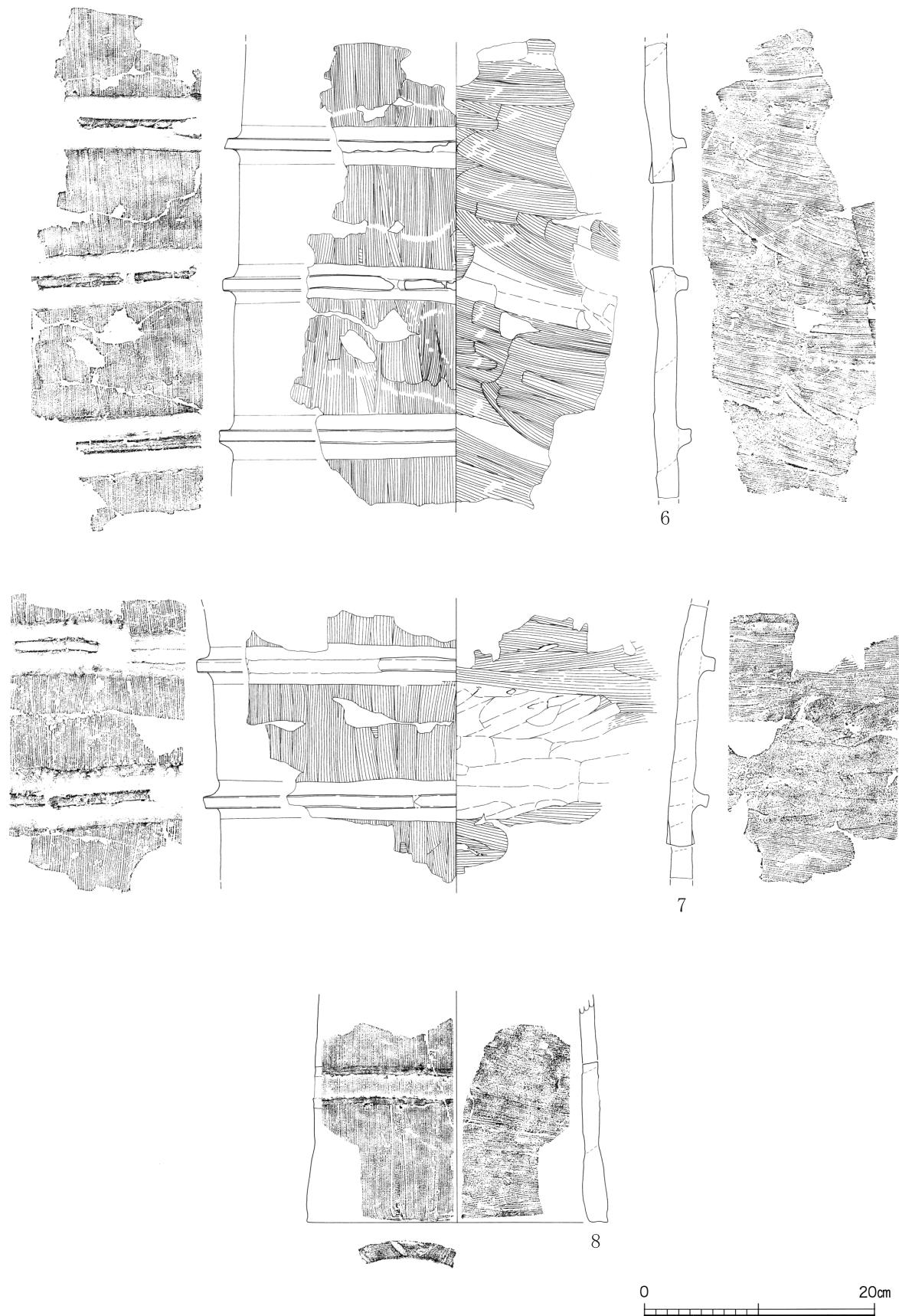
第34図 11 トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5



第35図 13 トレンチ出土朝顔形埴輪実測図 S = 1 / 5



第36図 14 トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5



第37図 14 トレンチ出土円筒埴輪実測図 S=1/5

第49図11は金銅製帶金具、12は銀製責金具、13は銀装刀子である。金銅製帶金具は縁辺がやや欠けているが、2cm四方の正方形で直径4mmの4つの穴がある。そのうちの一つに金銅製鉢が残っている。鉢頭は直径5mm、高さ3.5mmで甲高の卵形である。銀製責金具は長径3.65cm、短径2.0cm、厚さ2mmの倒卵形を呈する。二つに割れているが、片方の割れ口に制作時のつなぎ目が見られる。銀装刀子は、現存長15.3cm、茎幅4.15cm、刃幅13.9cmである。柄部分、刃部先端は欠損している。鞘の木質や有機質が付着しているが、腐蝕が著しく、原形は不明である。銀製の鉢を有する。刃側の茎との間には隙間が空くが、柄側の茎との間には木質が残存している。その幅18mm、長さ12.9mmで、銀板を筒状に巻いたもので、断面形は倒卵形を呈する。柄側には二条の歓を作り、その上に刻みを施している。刃部の断面形は長二等辺三角形である。

ガラス製品

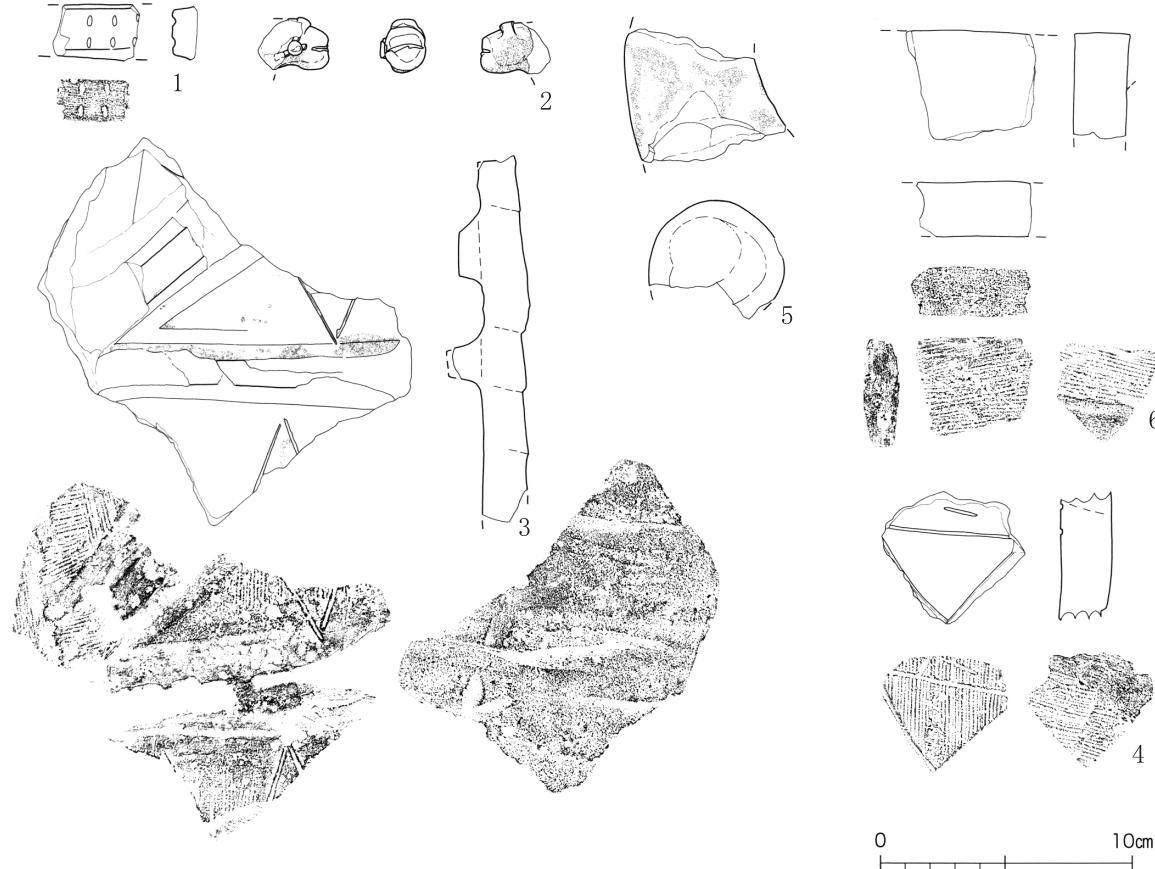
平成21年度調査区石室内から玉類が出土した。内訳は丸玉1点、小玉69点である。丸玉は表面が少し白く風化している。小玉はほとんどが直径3mm前後であるが、1だけ点5.4mmとやや大きいものがある。色調はマリンブルーである。1点のみ穴のないものがある。平成22年度調査区では小玉1点が出土したのみである。

第4章まとめ

第1節 外部施設について

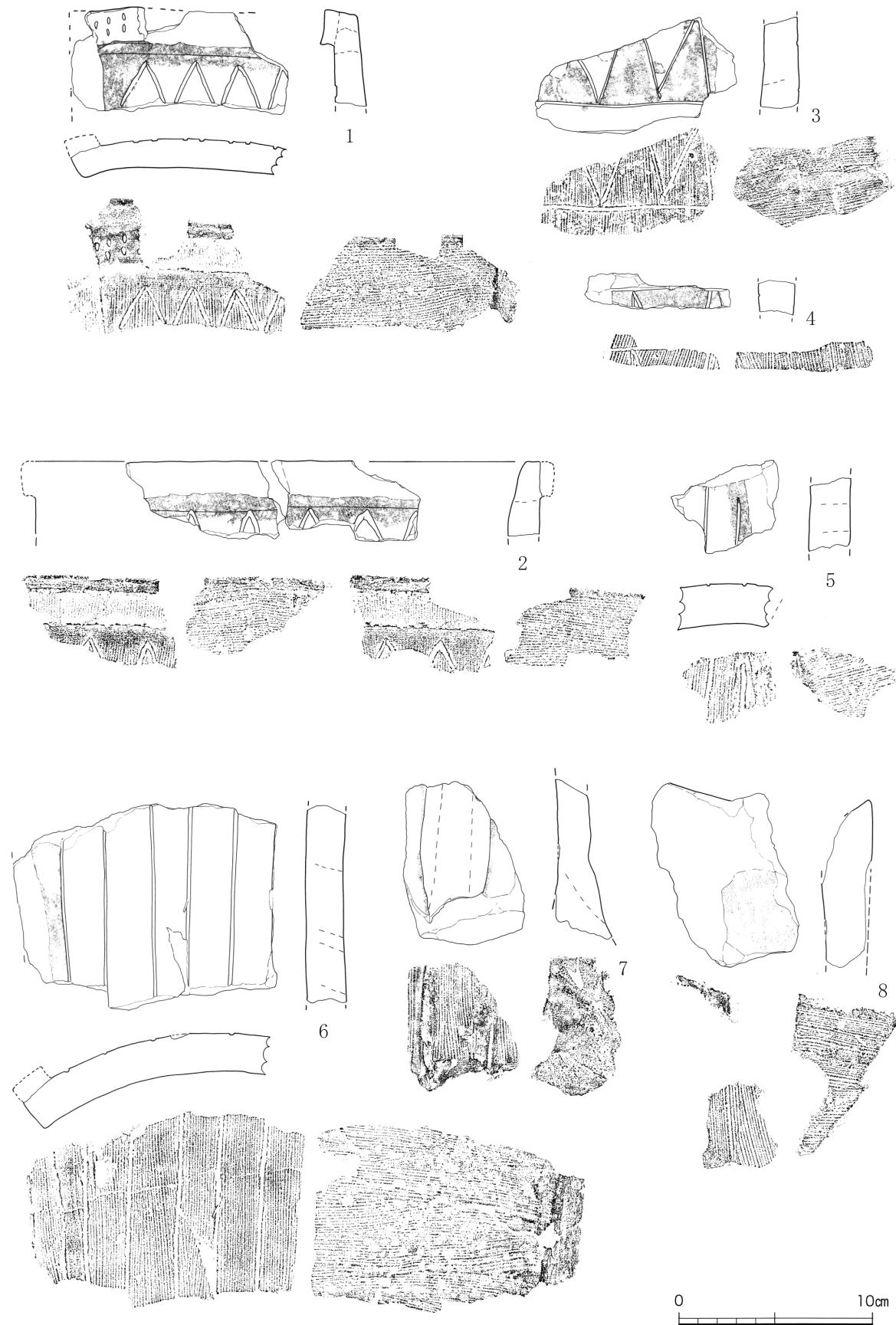
規模、範囲の問題

4・11トレンチで確認した主軸長は、周堀外縁162.12m、周堀内縁（墳丘第一段下端）127.85m、墳丘第一段平坦面外縁118.25m、第一段平坦面内縁（墳丘第二段外縁）82.78mである。従来墳丘長として記述されることが多かったのは墳丘第一段平坦面の長さである。9・13トレンチで確認した後円部直径は、周堀外縁120.78m、墳丘端88.04m、第二段墳丘端36.22m、墳頂平坦面8.00mである。8・14トレンチで確

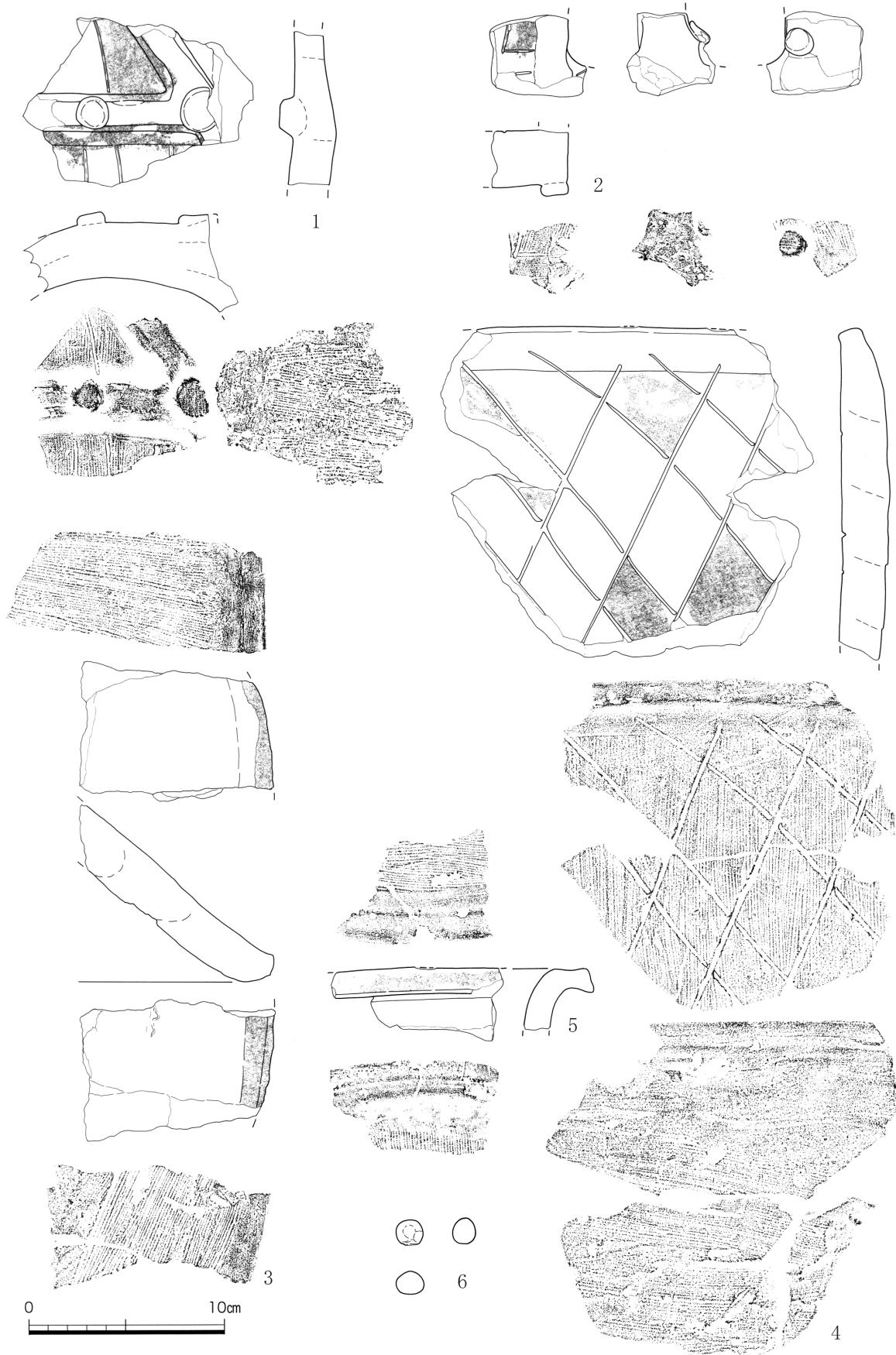


第38図 形象埴輪実測図(1) S=1/3

1：前方部頂 2・3・4：1トレンチ 5・6：4トレンチ

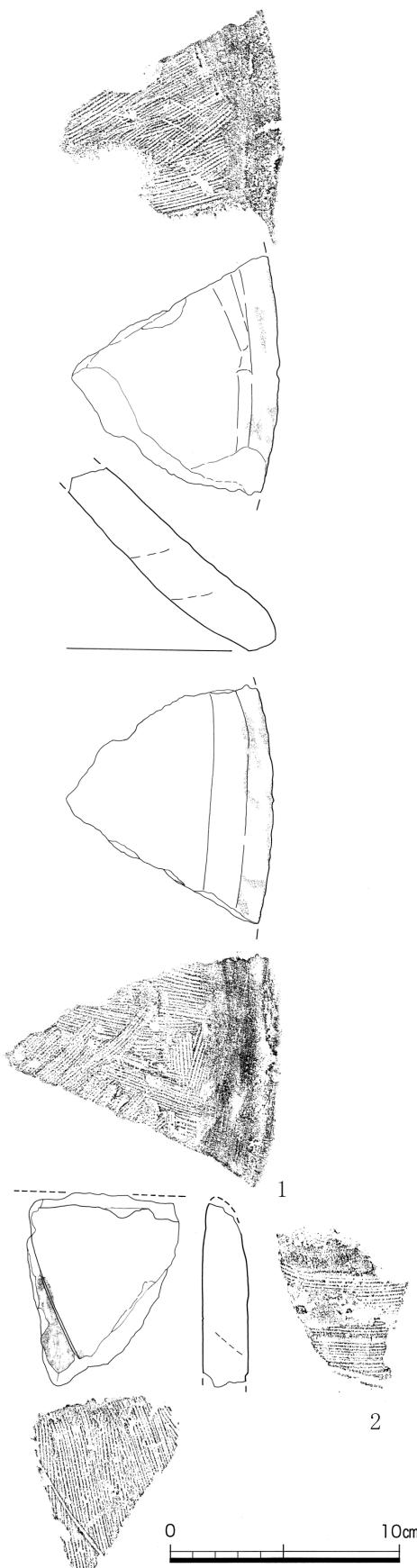


第39図 形象埴輪実測図（2） 7トレンチ S=1/3



第40図 形象埴輪実測図（3） S=1/3

1～4：7トレンチ 5・6：9トレンチ



第41図 形象埴輪実測図(4)

11トレンチ S=1/3

認した括れ部幅は、周堀外縁 110.90 m、墳丘端 77.30 m、第二段墳丘端 25.90 m、墳頂平坦面 4.00 m である。2・3・5・6 トレンチで確認した墳丘端から想定した前方部幅は 87.76 m である。

このことによって琵琶塚古墳の墳丘長 123.1 m を上回ることが判明し、栃木県内で最大の古墳であることが確認できた。この規模は県内では勿論、全国的に見ても有数の規模である。6世紀には古墳の規模は縮小の傾向を示すが、特に6世紀後半では大王陵とされる奈良県五条野丸山古墳(309 m)を除くと、日本最大の部類に入る。120 m を超える古墳は、奈良県別所大塚古墳、熊本県大野窟古墳くらいで、数えるほどしかない。前代の琵琶塚古墳との差は 4 m くらいで、格差は大きくないが、6世紀前半では福岡県岩戸山古墳、愛知県断夫山古墳、群馬県七輿山古墳、埼玉県二子山古墳といった、重要な古墳が各地で築造されているので、相対的な地位は高まっているとみることができる。ただし、二重周堀で墳丘第一段が高い琵琶塚古墳は、一重周堀で第一段が低平な吾妻古墳よりも占有面積、盛土量で上回っていると予想される。また、墳丘長では下回っていても、壬生愛宕塚古墳は土墨、茶臼山古墳は土墨や葺石を有しており、労働力の面で吾妻古墳がどれだけ他の大型古墳を凌駕していたかは明確ではない。吾妻古墳の卓越性は認めながらもさらに多面的な比較が必要である。

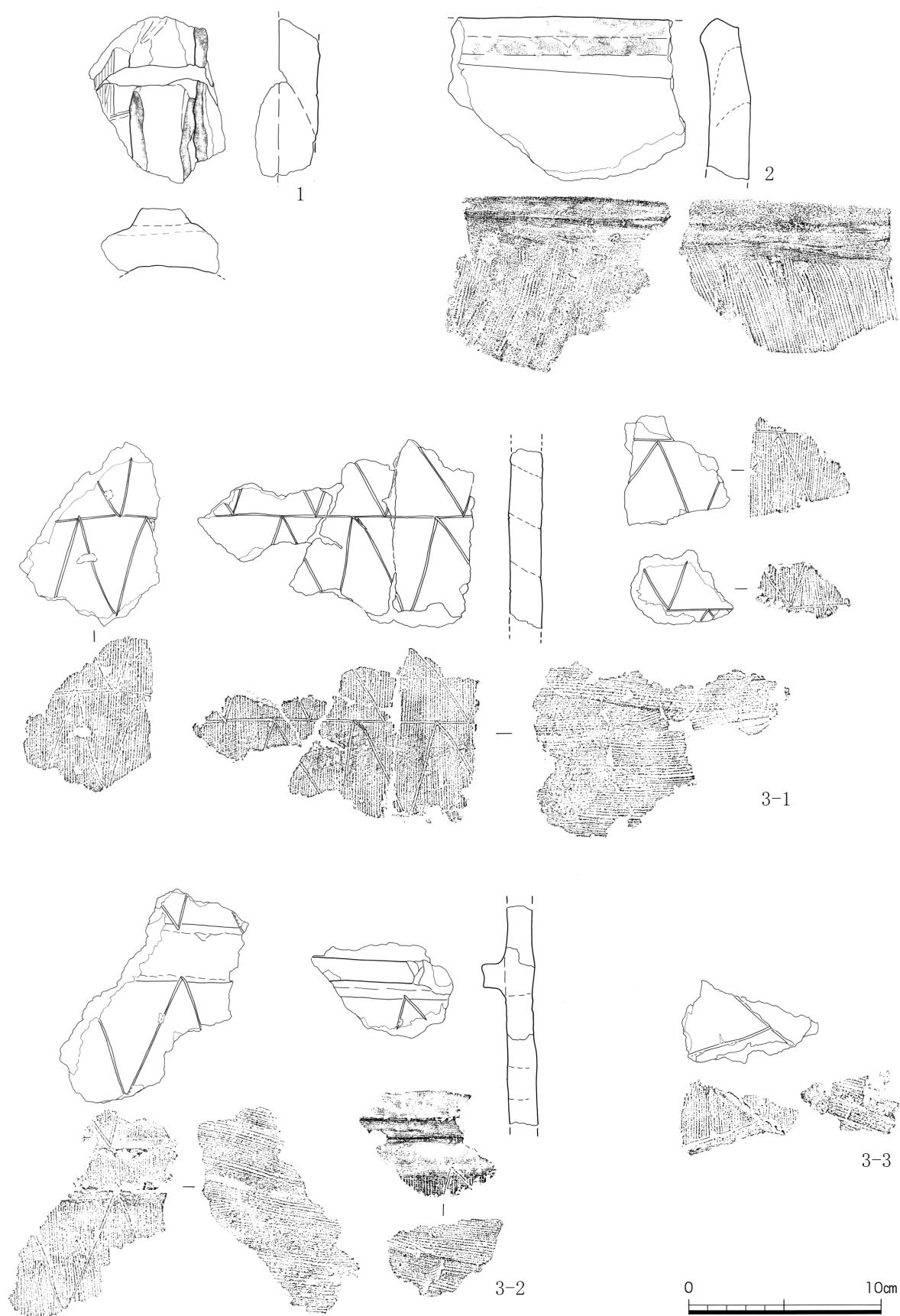
指定地内で確認できた唯一の古墳時代の遺構は、藤井 39 号墳の周堀である。藤井 39 号墳は平成 20 年度の壬生町教育委員会の調査によると、直径 35 m の円墳で、川原石小口積みで玄室に胴張りのある横穴式石室を持ち、吾妻古墳築造後に作られたとされている。今回の確認調査では吾妻古墳との層位的関係は確認できなかつたが、吾妻古墳の周囲は古墳時代の遺構、遺物が皆無であり、その中の立地は、39 号墳の意図的な選地を想定させる。吾妻古墳に近接する古墳としては他に藤井 38 号墳がある。直径 50 m の大型円墳で、主体部は藤井 39 号墳と同様で、鉄製壺鎧が副葬されていた。吾妻古墳と藤井 38・39 号墳は藤井古墳群の中の 1 基として位置づけられているが、吾妻古墳周辺の古墳分布はむしろ希薄で、藤井 38・39 号墳の規模や副葬品からは、群集墳というよりは吾妻古墳に後続して築造された大型古墳と見ることができる。

大型古墳では、国分寺愛宕塚古墳、山王塚古墳、丸塚古墳が近接して存在する。国分寺愛宕塚古墳は埴輪が確認されていないので、吾妻古墳より新しい時期と考えられるが、TK43 型式の須恵器が出土しているので、吾妻古墳とほぼ同時期と考えられる。山王塚古墳は、埴輪が出土していないので、吾妻古墳より新しい時期と考えられ、出土した鉄地銀張り帶金具の年代は TK209 型式に併行する時期と考えられているので、この地域の最後の前方後円墳と考えられる。丸塚古墳、藤井 38・39 号墳は埴輪を持たず、横穴式石室が採用される円墳なので、前方後円墳消滅後の築造と考えられる。このように見ると、国分寺愛宕塚古墳、山王塚古墳、丸塚古墳を吾妻古墳と同じ群とすることも可能であるが、やや離れていることを考慮して、吾妻古墳と国分寺愛宕塚古墳、丸塚古墳と藤井 38・39 号墳がそれぞれほぼ併行する時期とみて、同時進行する別の群とみることもできる。その場合、山王塚古墳と併行する時期の大型古墳が未確認なこと、丸塚古墳が 74 m の円墳で切石石室であるのに対し、藤井 38・39 号墳がそれぞれ 50 m・35 m で

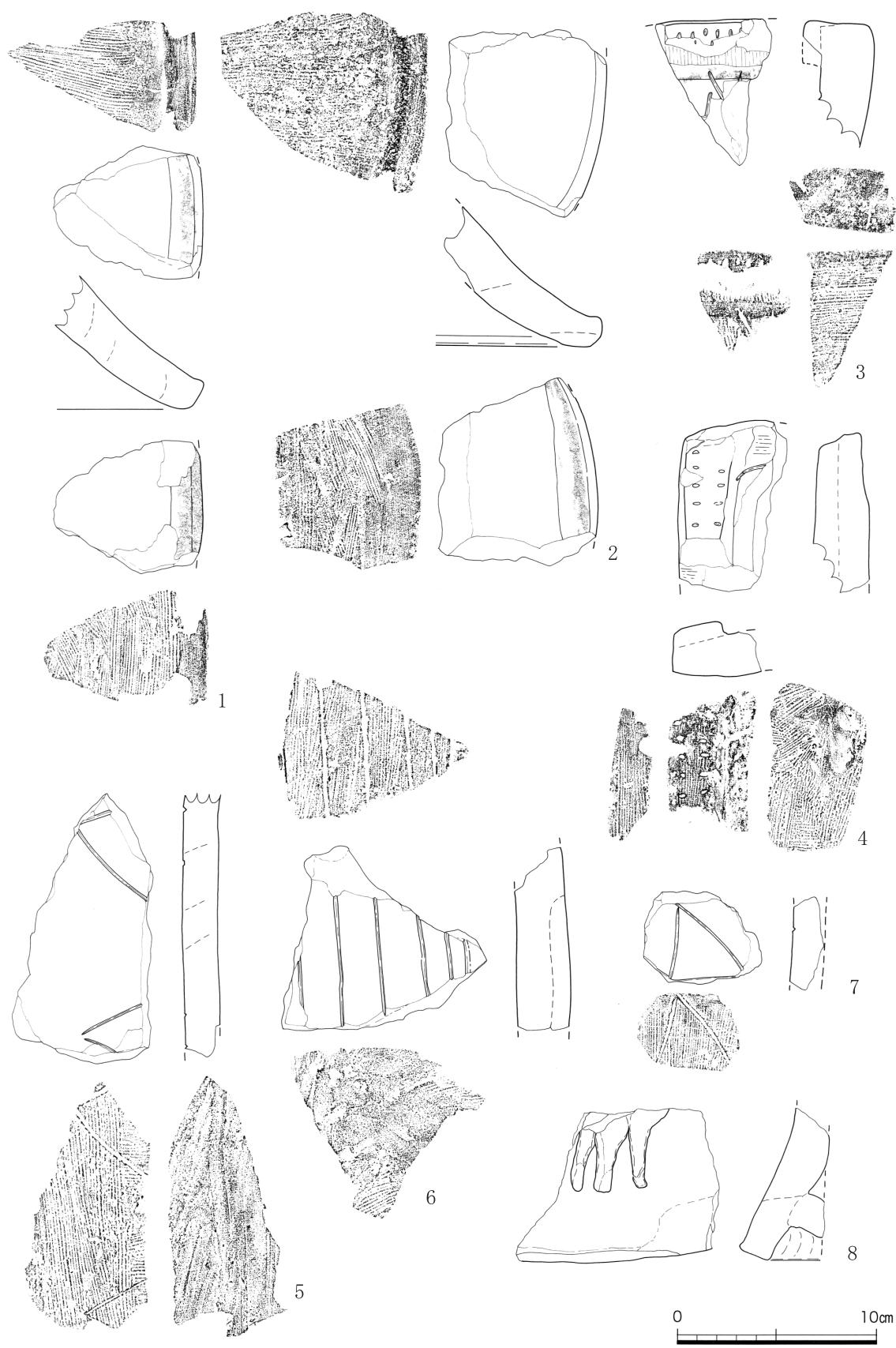


第42図 形象埴輪実測図(5) S=1/3

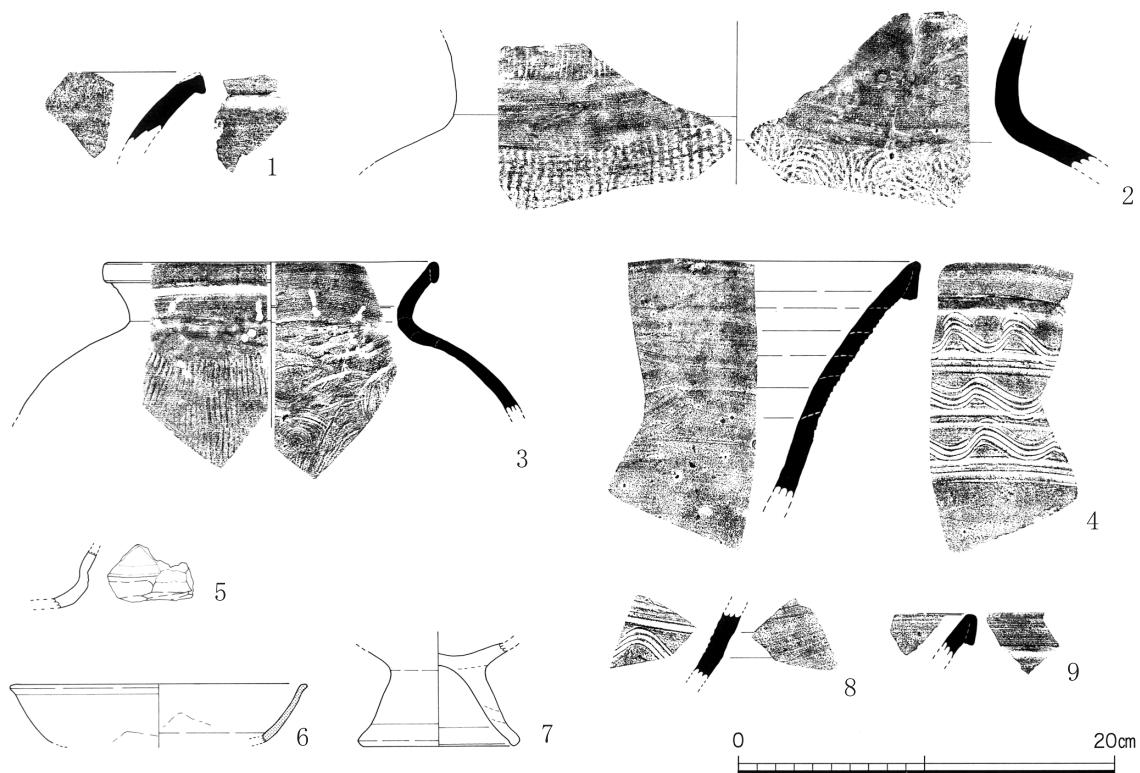
1・2:13トレンチ 3~5:14トレンチ



第43図 形象埴輪実測図（6） 14トレンチ S=1/3

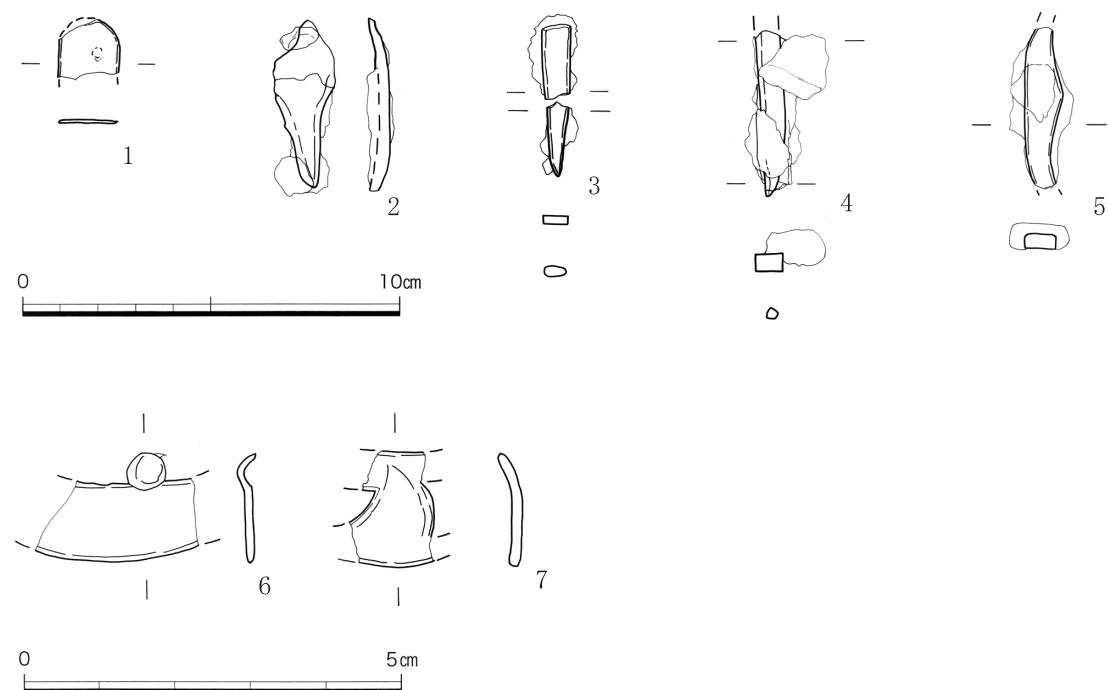


第44図 形象埴輪実測図（7）前方部主体部 S=1／3

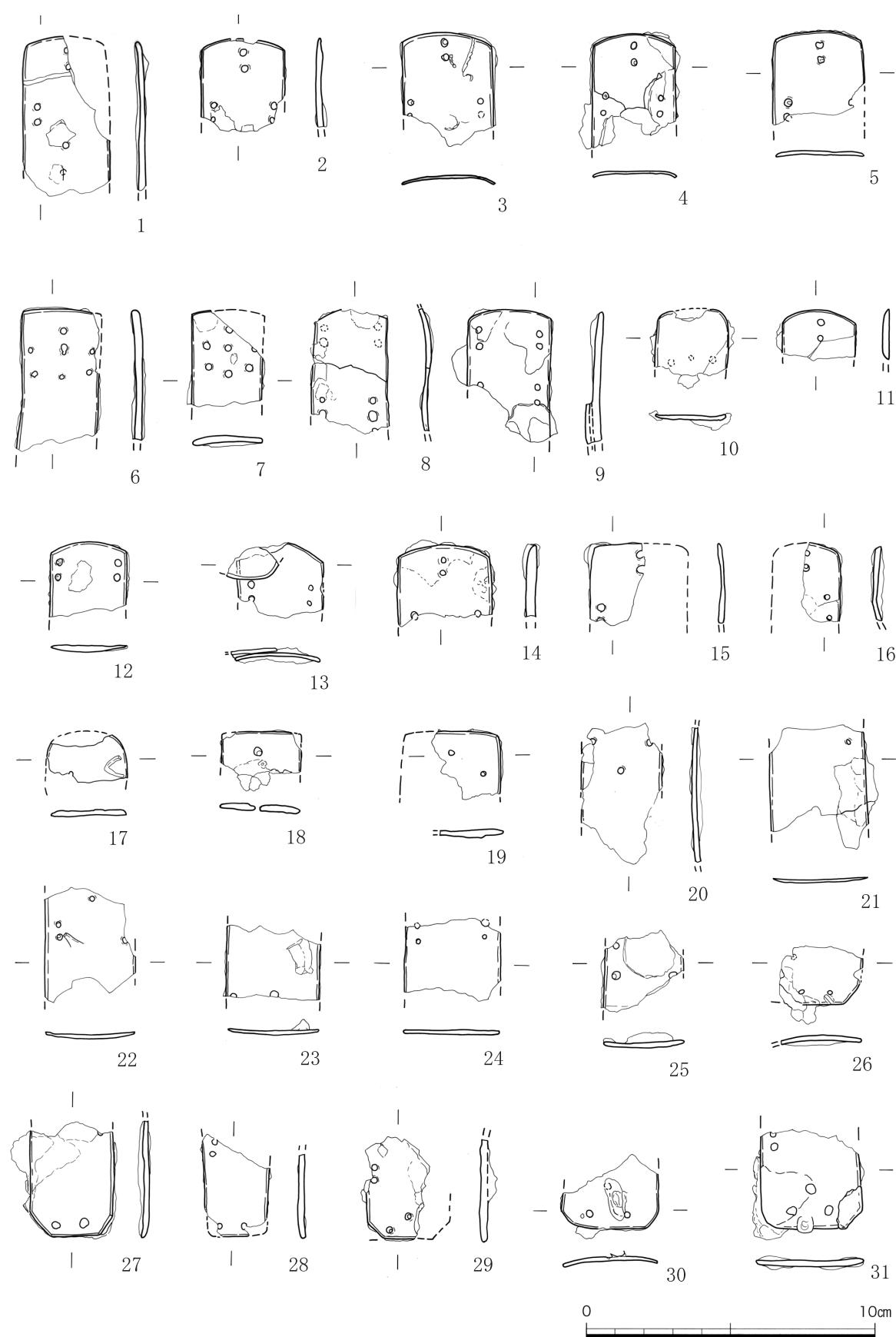


第45図 土器実測図 $S = 1/4$

1 : 前方部主体部 2 : 4 トレンチ 3・5 : 13 トレンチ 4・6・7・8・9 : 14 トレンチ



第46図 金属製品実測図 (1) $S = 1/2 \cdot S = 1/1$



第47図 金属製品実測図（2） S=1/2

第3表 円筒埴輪観察表（1）単位：cm

No.	器種	計測値	材質・混和材	色調・焼成	特徴	遺存度・出土状態	注記記号
第25図01	埴輪 円筒 口縁部	口径 44.0 * 一径 30.0 * 口高 11.3 全高 22.2+	白・黒・赤色 粒少量	内 10YRG/3 に ぶい黄橙 外 7YR7/4 に ぶい橙 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ・口縁部横ナデ、内面斜め・横方向ハケ→口縁部横ナデ	口縁部 1/8 遺存 墳丘二段裾覆土	01トレNo.6
第25図02	埴輪 円筒 口縁部	口径 38.0 * 全高 11.4+	黒・白・赤色 粒微量、石英 金雲母粒少量	7YR6/4 にぶい 橙 良好	外面縦ハケ→口縁部横ナデ、内面斜め・横方向ハケ→口縁部横ナデ	口縁部 1/8 遺存 墳丘二段裾・斜面覆土	01トレNo.32 C1071217 同一
第25図03	埴輪 円筒 口縁部	口径 36.8 * 全高 9.5+	黒・白・赤色 粒少量、石英 金雲母粒微量	5YR5/4 にぶい 赤褐 普通	外面縦ハケ→口縁部横ナデ、内面斜め・横方向ハケ→口縁部横ナデ 外面に赤色顔料？付着	口縁部 1/8 遺存 墳丘二段裾覆土	01トレNo.67・68・69
第25図04	埴輪 円筒 口縁部	口径 38.2 * 全高 2.7+	白色粒少量、 赤色粒・黒雲母粒微量	5YR6/6 橙 良好	外面口縁部横ナデ、内面横方向ハケ→口縁部横ナデ	口縁部 1/8 遺存 墳丘二段裾覆土	01トレC1071217・C1080109
第25図05	埴輪 円筒 底部	底径 42.8 * 一高 8.0+ 全高 9.6+ あり	白・赤色粒、 雲母粒微量 ザクロ石粒？	7.5YR6/6 橙 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ →突帯貼付→横ナデ、内面斜め方向ハケ 底面茎状の圧痕→ヘラケズリ 焼成前のひび割れ	底部 1/12 遺存 墳丘二段頂・斜面覆土	01トレNo.16・17・墳丘斜面
第26図06	埴輪 円筒 胴部	三径 31.8 二径 31.4 一径 31.6 三高 12.2 二高 12.1 全高 39.8+	黒・白・赤色粒、 黒雲母粒少量	5YR4/4 明赤褐 普通	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面下位横方向ハケ→中位ナデ→上位斜め方向ハケ、二段・四段目に円形の透かし穴	胴部 1/2 遺存 墳丘一段中央・二段斜面・頂覆土	01トレNo.1・35・94・97・131・138・139・140
第26図07	埴輪 円筒 底部	底径 29.5 * 全高 12.9+	黒・白・赤色粒、 黒雲母粒、 小石少量	10YR6/4 にぶい 黄橙 普通	外面縦ハケ、内面ナデ→斜め方向ハケ 底面茎状の圧痕	底部 1/2 遺存 墳丘二段斜面・裾覆土	01トレNo.34・58・61・136
第27図01	埴輪 円筒 口縁～胴部	口径 35.2 四径 35.0 三径 35.6 二径 35.6 一径 34.2 * 口高 14.5 四高 11.0 三高 12.1 二高 13.0 * 全高 52.8+	白・赤・黒色 細砂中量、白・ 赤色粗砂微量、 石英・黒・金 雲母粒微量 や や緻密	7.5YR6/6 橙 やや硬質	口縁部：外面縦ハケ→横方向ハケ→一部上位横方向のナデ 中位山形線刻・山は七つで一周、始めと終わりの間に隙間、内面斜め・横方向ハケ→横方向ナデ 体部：外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ 縦ハケは下一条から下四条まで一連、口縁部の縦ハケは別單位、内面斜め・横方向ハケ→一部ナデ→口縁部積み上げ 下三段に二方向の円形透かし穴	口縁部：外縦ハケ→横方向ナデ・中位山形線刻・山は七つで一周、始めと終わりの間に隙間、内面斜め・横方向ハケ→横方向ナデ 体部：外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ 縦ハケは下一条から下四条まで一連、口縁部の縦ハケは別單位、内面斜め・横方向ハケ→一部ナデ→口縁部積み上げ 下三段に二方向の円形透かし穴	07トレNo.300・313・316・333・335・350・385・421・441・444・450・453・455・473-1・473-2・473-3・473-4・473-8・473-9・503・509・511・512・513・514・515・516・518・519・520・523・525・527・527-2・528・557・558・560・561・561・567・きだん面・C1・南C108121・C1071127・C1071227・C1071226・南C1080107
第28図02	埴輪 円筒 口縁部	口径 39.2 * 全高 3.6+	白・赤色粒、 石英・雲母粒 少量	5YR6/6 橙 良好	外面縦ハケ→横ナデ、内面斜め・横方向ハケ →横ナデ	口縁部 1/4 遺存 墳丘二段斜面覆土	07トレNo.51・57
第28図03	埴輪 円筒 口縁部	口径 35.4 * 全高 6.4+	黒・白・赤色粒、 雲母粒少量	2.5YR6/6 橙 良好	外面縦ハケ→横ナデ、内面斜め・横方向ハケ →横ナデ	口縁部 1/8 遺存 墳丘二段斜面覆土	07トレNo.478
第28図04	埴輪 円筒 口縁部	口径 32.4 * 全高 5.2+	白・赤色粒、 石英・黒雲母 粒少量	7.5YR6/4 橙 良好	外面縦ハケ→横ナデ、内面斜め・横方向ハケ →横ナデ・ナデ	口縁部 1/8 遺存 墳丘二段裾覆土	07トレC1071127
第28図05	埴輪 円筒 底部	底径 38.2 * 一径 38.0 * 二径 36.0 * 一高 9.6 一高 9.6 全高 26.7+	黒・白・赤色 粒少量、石英、 黒雲母粒微量	7.5YR7/4 にぶい 橙 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面斜め方向ハケ 底面茎状の編み目圧痕 底部に焼成前のひび割れ 刺突による補修痕 外面底部に沿って線刻・刺突・2カ所の両面穿孔	体部下位、底部 1/6 遺存 墳丘二段裾覆土	07トレNo.225・239・240・251・304・445・南C1080107 底部：No.035・270・385・420・454、体部No.317・339・360・381・425・432・463・467・561・562・586・丘A3・南C1080107・C1071127・C1071226・C1080124、体部：No.315・532・南C1080107 同一
第28図06	埴輪 円筒 底部	底径 40.2 * 一高 17.0+ 全高 17.9+	黒・白・赤色粒、 雲母粒少量	5YR5/8 明赤褐 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面斜め方向ハケ 底面茎状の圧痕	底部 1/4 遺存 墳丘二段斜面覆土	07トレNo.490
第28図07	埴輪 円筒 底部	底径 37.0 * 一径 40.4 * 一高 10.0 全高 14.2+	黒・白・赤色粒、 雲母粒少量	7.5YR6/6 橙 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面縦ハケ→斜め方向ハケ 底面茎状の圧痕 接合痕	体部下位、底部 1/6 遺存 墳丘二段斜面覆土	07トレNo.115・176
第29図01	埴輪 円筒 口縁部	口径 41.0 * 全高 11.2+	白色粒、小石 少量	内 7.5YR8/6 浅 黄橙 外 5YR5/6 灰明 赤褐 不良	外面縦ハケ→口縁部横ナデ、内面斜め方向ハケ→口縁部横ナデ	口縁部 1/2 遺存 墳丘二段段裾覆土	08トレNo.165・176・189・206・C1091224・C1100107・C1100108
第29図02	埴輪 円筒 口縁部	口径 49.0 * 一径 48.6 * 一高 13.7 全高 14.7+	黒・白・赤色粒、 石英・雲母粒 少量	5YR5/6 明赤褐 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、 口縁部横ナデ、内面斜め方向ハケ→口縁部横ナデ	口縁部 1/4 遺存 墳丘二段段裾覆土	08トレNo.63・192・194・C1091217(No.8 同一?)
第29図03	埴輪 円筒 口縁部	口径 46.4 * 二径 42.3 * 一径 42.6 * 口高 14.5 二高 11.5 全高 32.1+	黒・白・赤色粒、 雲母粒、小石 少量	5YR4/4 にぶい 赤褐 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面斜め方向ナデ→上位斜め方向ハケ→口縁部横ナデ 円形の透かし穴	口縁部 1/4 遺存 墳丘二段段裾覆土	08トレNo.16・26・47・48・49・121・122
第29図04	埴輪 円筒 口縁部	口径 41.6 * 一径 40.4 * 一高 13.5 全高 18.5+	黒・白・赤色粒、 雲母粒少量	7.5YR6/4 にぶい 橙 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ・口縁部横ナデ、内面横方向ハケ→口縁部横ナデ 外面に黒色物質付着	口縁部 1/4 遺存 墳丘二段下位・裾覆土	08トレNo.55・85・105・106・132・134・185・C1100106・括100106(No.180・181・B下091221、No.32・56 同一?)
第29図05	埴輪 円筒 口縁部	口径 36.0 * 全高 3.7+	黒・白・赤色粒、 黒雲母粒少量	5YR5/6 明赤褐 普通	外面横方向ハケ→縦ハケ→口縁部横ナデ、内面斜め方向ハケ 口縁部横ナデ	口縁部 1/3 遺存 墳丘二段下位・裾覆土	08トレNo.64・B下091217・B下091221・C1091216・C1091217・C1091224
第30図06	埴輪 円筒 胴部	三径 39.3 * 二径 38.8 * 一高 14.0 二高 14.6 一高 14.5 全高 46.7+	黒・白・赤色 粒、金雲母粒、 小石少量	5YR6/8 橙 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面下位横方向ハケ→上位斜め方向ハケ 一段・三段目に円形二方向の透かし穴	胴部 1/3 遺存 墳丘二段段裾覆土	08トレNo.62
第30図07	埴輪 円筒 胴部	二径 42.0 * 二高 13.3 * 全高 26.5+	黒・白・赤色粒、 雲母粒、小石 少量	2.5YR5/6 にぶい 橙 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面ナデ→一部横方向ハケ→縦ナデ 円形二方向の透かし穴	胴部 1/4 遺存 墳丘二段裾覆土	08トレNo.45・56・115・139・163・B下091222
第30図08	埴輪 円筒 胴部	二径 21.0 * 一径 20.5 * 二高 12.2 全高 23.7+	黒・白色粒、 雲母粒少量	5YR6/6 橙 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面下位横方向ハケ、上位ナデ→斜め方向ハケ 円形二方向の透かし穴	胴部 1/4 遺存 墳丘二段段裾覆土	08トレNo.74・93・140 第28図10 同一?

第4表 円筒埴輪観察表（2） 単位：cm

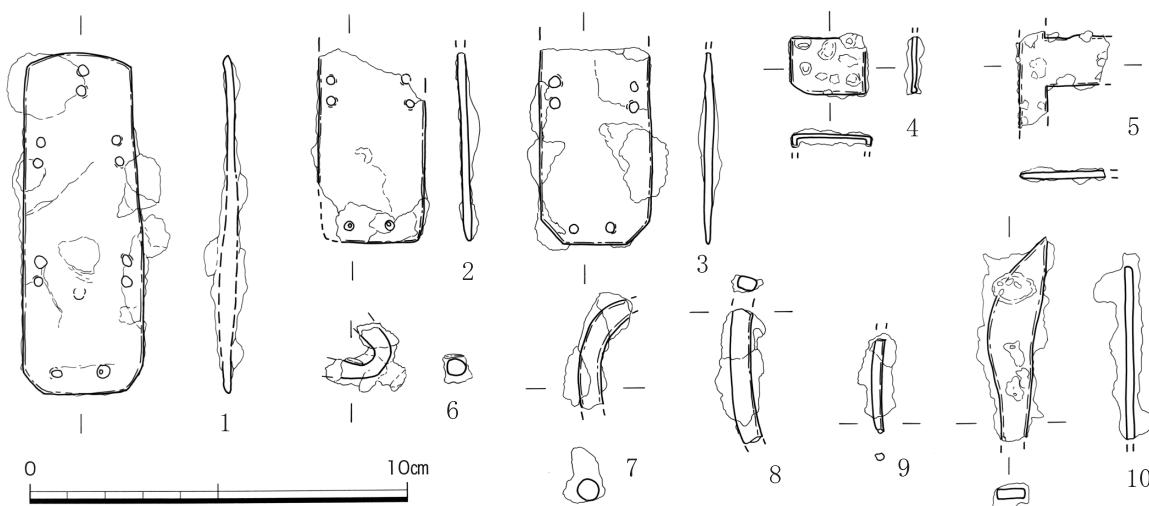
No.	器種	計測値	材質・混和材	色調・焼成	特徴	遺存度・出土状態	注記記号
第31図09	埴輪 円筒 胴部	三径 35.2 * 二径 35.3 * 一径 33.0 * 三高 10.0 二高 12.5 全高 34.9+	黒・白・赤色粒、 雲母粒少量	7.5YR7/4 にぶ い橙 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、 内面斜め方向ハケ→一部縦ナデ 円形透かし穴	胴部 1/4 弱遺存 埴丘二段裾覆土	08トレ№60・82・83・140・152、 60・131・134・137、105・108・ 168・184
第31図10	埴輪 円筒 胴部	二径 44.9 * 一径 43.0 * 二高 11.7 全高 34.2+	黒・白・赤色粒、 雲母粒、小石 少量	5YR5/8 明赤褐 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、 内面下位横方向ハケ、上位ナデ→斜め方向ハ ケ	胴部 1/5 遺存 埴丘二段段裾覆土	08トレ№52・54・66・190・205・ —括100106・100107 第27図 08と同一？
第31図11	埴輪 円筒 底部	底径 36.6 * 一高 14.4+ 全高 20.2+	黒・白・赤色 粒、金雲母粒、 石英粒少量	7.5YR6/4 にぶ い橙 良好	外面縦ハケ → 突帯貼付→横ナデ、内面斜め 方向ハケ 円形の透かし穴 底面茎状の圧痕	底部 1/5 遺存 埴丘二段段裾覆土	08トレ№147 (№69・77・90・ 95・174と同一?)
第32図12	埴輪 円筒 胴部	三径 43.0 * 二径 42.3 * 二径 42.0 * 三高 14.5 二高 14.8 全高 40.9+	黒・白・赤色 粒、金雲母粒、 黒雲母粒、小 石少量	5YR6/8 橙 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、 内面下位横方向ハケ→上位斜め方向ハケ 二段・四段目に円形二方向の透かし穴	胴部下位 1/2、上位 1/5 遺存 埴丘二段段裾覆土	08トレ№55・111・140・162・207
第33図01	埴輪 円筒 上半	口径 34.0 * 一径 34.0 * 口高 13.5 全高 20.4+	白・赤色粒、黒 金雲母粒微量	7.5YR6/4 にぶ い橙 断面黒色 良好	口縁部外面縦ハケ→横ナデ、内面斜め・横方 向ハケ→横ナデ 体部外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、中位直 角方向とその対角線に線刻 内面横方向ハケ 下一段に円形透かし穴 右回転穿孔	口縁部～下一条 1/5 遺存 埴丘二段段裾覆土	09トレ№104・C1081110
第33図02	埴輪 円筒 上半	口径 35.4 一径 30.6+ 口高 14.5 全高 19.5+	白色粒、砂、 黒雲母粒微量	5YR6/8 橙 良好	口縁部外面縦ハケ→横ナデ、内面斜め・横方 向ハケ→横ナデ 体部外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横 ナデ 縦ハケは一条から口縁まで一連 内面横方向 ハケ	口縁部 3/4 遺存、 突帯付近完存 埴丘一段平坦面～ 二段段裾覆土	09トレ№49・55・66・69・ 70・71・72・103・C1081111・ C1081117・C1081119・C2081022 第30図03・04と同一
第33図03	埴輪 円筒 胴部	一径 29.8+ 全高 11.4+	白・赤色粒少 量、黒雲母粒 微量	5YR5/6 明赤褐 良好	外面縦ハケ→3カ所に横方向の割り付け線→ 突帯貼付→横ナデ、内面斜め・横方向ハケ 円形透かし穴 左下から左上へと右へ回転穿 孔	突帯部一条 1/2 弱 遺存 突帯剥落 埴丘二段段裾覆土	09トレ№103・C1081117 第30図 02・04と同一
第33図04	埴輪 円筒 胴部	一径 31.4+ 全高 7.4+	白色粒少量、 赤色粒・黒雲 母粒微量	5YR5/6 明赤褐 良好	外面縦ハケ→1カ所に横方向の割り付け線→ 突帯貼付後横ナデ、内面斜め・横方向ハケ 円形透かし穴 左回転穿孔	突帯部一条 1/3 弱 遺存 突帯剥落 埴丘二段段裾覆土	09トレ№103 第30図02・03と同 一
第34図01	埴輪 円筒 口縁部	口径 37.0 * 全高 10.5+	白・赤・黒色粒、 石英・黒雲母 粒微量	7.5YR6/4 にぶ い橙 良好	外面縦ハケ→上位横方向ハケ→一部縦ハケ→ 横ナデ、内面斜め・横方向ハケ→横ナデ	口縁部 1/8 遺存 埴丘二段段裾覆土	11トレ№21
第34図02	埴輪 円筒 胴部	三径 34.4 * 二径 33.7 * 一径 33.3 * 三高 10.0 二高 12.9 全高 32.9+	黒・白・赤色 粒少量、石英・ 金雲母粒微量	5YR5/6 明赤褐 普通	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面斜め方 向ハケ→一部縦ハケ 円形透かし穴	胴部 1/3 遺存 埴丘二段段裾覆土	11トレ№19・23・25・30・ C1081121
第34図03	埴輪 円筒 底部	底径 35.6 * 一高 14.5+ 全高 14.5+	黒・白・赤色粒、 石英・黒雲母粒 少量	5YR6/6 明赤褐 良好	外面板押圧による基部調整→横方向ハケ→縦 ハケ→突帯貼付→横ナデ下から 3.5 cm の位 置に角棒で刺突、内面斜め方向ハケ 底面茎状の圧痕 接合痕	底部 1/4 遺存 埴頂・埴丘二段斜面 中位覆土	11トレ№2・9・10・43・№5と同一? 第31図04と同一?
第34図04	埴輪 円筒 底部	底径 35.0 * 全高 11.0+	黒・白・赤色粒、 石英・雲母粒 少量	5YR5/6 明赤褐 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ、内面斜め方向ハケ 底面茎状の圧痕	底部 1/8 遺存 埴丘二段斜面覆中 位土	11トレ№11・№5と同一? 第31 図03と同一?
第35図01	埴輪 朝顔 口縁	口径 54.1 一径 37.4 * 頸径 22.4 * 口高 14.5 全高 26.5+	粗砂中量、白・ 赤色粒中量、 石英・黒雲母 粒中量	5YR5/8 明赤褐 良好	外面縦ハケ→横方向のナデ→突帯貼付→横ナ デ、内面横方向ハケ→上位横方向ナデ・中位、 下位横方向ナデ	口縁部、一条突帯遺存 口縁部 3/4 遺存 埴丘二段中位覆土	13トレ№12・29・31・33・42・ B081202・B中081202
第36図01	埴輪 円筒 口縁部	口径 30.0 * 一径 24.0 * 一高 12.5 全高 21.0+	黒・白・赤色粒、 黒雲母粒少量	7.5YR7/4 にぶ い橙 普通	外面縦ハケ→口縁部横ナデ、内面斜め方向ハ ケ→口縁部横ナデ	口縁部 1/3 遺存 埴丘二段段裾覆土	14トレ№31、№12・23・256・ 258、№43・60・64・67・87・89・ 253・257
第36図02	埴輪 円筒 口縁部	口径 35.1 * 一径 32.8 * 一高 15.0 全高 15.7+	黒・白・赤色粒、 小石少量	内 5YR5/6 明赤 褐 外 7.5YR7/6 橙 普通	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面斜め方 向のナデ→口縁部横ナデ	口縁部 1/2 遺存 埴丘二段段裾覆土	14トレ№94・294・C1091216、№ 267・300・C1100106
第36図03	埴輪 円筒 口縁部	口径 38.4 * 全高 6.7+	黒・白・赤色 粒、黒雲母粒、 石英粒少量	7.5YR7/3 にぶ い橙 良好	外面縦ハケ→口縁部横ナデ、内面斜め方向ハ ケ→口縁部横ナデ 焼成前の割れに粘土塊貼付	口縁部 1/6 遺存 埴丘二段段裾覆土	14トレ№57・84 (№212・ C1091208、№71・112・C1091208、 №97・230と同一)
第36図04	埴輪 円筒 口縁部	口径 40.0 * 一径 39.0 * 一高 14.7 全高 23.6+	黒・白・赤色粒、 金雲母粒、 黒雲母粒、石 英粒少量	10YR7/3 にぶ い黄橙 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面下位斜 め方向のナデ→上位斜め、横方向のハケメ→ 口縁部横ナデ	口縁部 1/4 遺存 埴丘二段段裾覆土	14トレ№242・263・275・284・ 288・C1091215・C1100107 (№ 109・273・277・286・C1091215・ 100107と同一)
第36図05	埴輪 円筒 底部	底径 36.0 * 全高 3.7+	黒・白・赤色粒、 少量	10YR6/4 にぶ い黄橙 良好	外面縦ハケ、内面ナデ→横方向ハケ 底面茎状の圧痕	底部 1/6 遺存 埴丘二段段裾覆土	14トレ№61・126
第37図06	埴輪 円筒 胴部	三径 39.3 * 二径 39.6 * 一径 40.1 * * 三高 11.2 二高 13.0 全高 39.0+	黒・白・赤色粒、 小石少量	内 5YR5/6 明赤 褐 外 7.5YR6/6 橙 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、内面斜め方 向ハケ部分的にナデ 一段、三段・四段目に円形透かし穴	口縁部 1/2 遺存 埴丘二段下位、裾覆 土	14トレ№94・294・C1091216、№ 267・300・C1100107
第37図07	埴輪 円筒 胴部	二径 44.2 * 一径 43.2 * 二高 11.6 全高 20.7+	黒・白・赤色 粒、金雲母粒、 黒雲母粒少量	7.5YR7/4 にぶ い橙 普通	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、 内面下位横方向ハケ→中位ナデ→上位斜め方 向ハケ 円形の透かし穴	口縁部 1/2 遺存 埴丘二段段裾覆土	14トレ№29・81・100・202・215・ 217・270・272・299 (№41・ 207・208・C1091208・091215・ 091217、№301・C1100106・ 100107と同一)
第37図08	埴輪 円筒 底部	底径 26.0 * 一高 10.9+ 全高 19.5+	黒・白色粒少 量	5YR6/6 橙 断面黒色 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→突帯貼付→横ナデ、 内面下位横方向ハケ→中位ナデ 二段目に円形の透かし穴 底面茎状の圧痕	底部 1/3 遺存 埴丘二段段裾覆土	14トレ№119・120

第5表 形象埴輪観察表 単位: cm

No.	器種	計測値	材質・混和材	色調・焼成	特徴	遺存度・出土状態	注記記号
第38図01	埴輪 形象 鞠	幅 2.1 全長 3.3+	白・石英粒、砂粒微量	5YR5/6 明赤褐 普通	縦ハケ→横長に縁貼付→横ナデ→二列刺突	縫部破片 貼り付け部剥落埴丘二段頂覆土	前方部頂 081001
第38図02	埴輪 形象 人物・動物? 先端部	全長 2.8+	白・赤色粒、砂粒少量	5YR4/6 赤褐 良好	ナデ→上に粘土紐・側面に粘土粒貼付→先端に線刻→黒色塗彩	筒部破片 塩丘二段裾覆土	01トレ C1080109
第38図03	埴輪 形象 簡部	全長 14.4+	白・赤色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR5/6 明赤褐 普通	外面横方向ハケ→縦ハケ→横・斜めに縁貼付→鋸歯状に線刻→線刻間・縁側縁に赤色塗彩、内面ナデ	筒部破片 塩丘二段斜面覆土	01トレ No. 20
第38図04	埴輪 形象 簡部	全長 4.9+	白・赤色粒、黒雲母粒少量	5YR5/6 明赤褐 良好	外面縦ハケ→横・鋸歯状に線刻、内面ナデ→ハケ	筒部破片 塩丘二段裾覆土	01トレ C1080108
第38図05	埴輪 形象 人物 腕部	直径 5.0 全高 5.3+	白・赤色粒、金雲母粒、砂粒少量	5YR4/6 赤褐 良好	芯部に粘土板巻き付け→ナデ→黒色塗彩	腕部破片 塩丘一段平坦面覆土	H2004 トレ
第38図06	埴輪 形象 器材 端部	厚 2.2 全高 4.2+	白・赤色粒、金雲母粒、砂粒微量	5YR4/6 赤褐 良好	外面横方向ハケ→部分的にナデ、内面横方向ハケ→部分的にナデ、端面ナデ	端部破片 片面縁剥落? 片側貼り付け部剥落 黒色物質付着 周堀外縁覆土	04トレ周堀外縁 071120
第39図01	埴輪 形象 總部	幅 1.9 全長 11.2+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	7.5YR6/4 にぶい橙 良好	外面縦ハケ→縦横に縁貼付→端部横ナデ→縫線上に二列刺突・縫縫に鋸歯状に線刻→縫部内縁赤色塗彩、内面斜め方向ハケ→端部横ナデ	縫部破片 貼り付け部一部剥落 塩丘二段裾覆土	07トレ No. 222・229
第39図02	埴輪 形象 總部	径 * 26.0 全高 15.1+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	7.5YR6/4 にぶい橙 良好	外面縦ハケ→横長に縁貼付→端部横ナデ→縫内に鋸歯状に線刻→縫部内縁赤色塗彩、内面横方向ハケ→端部横ナデ	縫部破片 端部欠損 塩丘二段斜面・裾覆土	07トレ No. 287・483 (接合せず)
第39図03	埴輪 形象 簡部	全長 10.3+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	10YR7/4 にぶい黄橙 良好	外面縦ハケ→縦に突帯貼付→ナデ→横方向・鋸歯状に線刻→突帯・線刻間に赤色塗彩、内面ナデ→横方向ハケ	筒部破片 塩丘二段裾覆土	07トレ No. 139
第39図04	埴輪 形象 總部	全長 7.5+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	7.5YR7/4 にぶい橙 良好	外面縦ハケ→横方向・鋸歯状に線刻→線刻間に赤色塗彩、内面斜め方向ハケ	縫部破片 端部欠損 塩丘二段裾覆土	07トレ No. 279
第39図05	埴輪 形象 簡部	全長 5.6+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	7.5YR6/4 にぶい橙 良好	外面縦ハケ→縦長に縁貼付→縦線刻→縫部内縁赤色塗彩、内面横方向ハケ	筒部破片 塩丘二段斜面下位覆土	07トレ B下 070111
第39図06	埴輪 形象 總部	全長 7.5+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	7.5YR6/4 にぶい橙 良好	外面縦ハケ→縦長に縁貼付→縦線刻→縫部内縁赤色塗彩、内面横方向ハケ→端部横ナデ	縫部破片 貼り付け部剥落 塩丘二段裾覆土	07トレ No. 529
第39図07	埴輪 形象 簡部	全長 8.3+	白・赤・黒色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR5/8 明赤褐 良好	外面縦ハケ→縦横に突帯貼付→ナデ→突帯縫に赤色塗彩、内面ナデ	筒部破片 塩丘二段頂覆土	07トレ A071217 カクラン内
第39図08	埴輪 形象 簡部	全長 8.6+	白・赤・黒色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR5/6 明赤褐 普通	外面縦ハケ→白色塗彩、内面斜め方向ハケ	筒部破片 塩丘二段頂覆土	07トレ A071217 カクラン内
第40図01	埴輪 形象 簡部	全長 7.8+	白・赤色粒、黒雲母粒、石英粒少量	7.5YR6/4 にぶい橙 良好	円筒部に粘土板端部で貼付 外面縦ハケ→横・斜めに縁・円形貼付→縦線刻→縫縫に赤色塗彩、内面縦ハケ→縦長に縫縫に赤色塗彩、内面縦ハケ→	筒部破片 塩丘二段斜面覆土	07トレ No. 500
第40図02	埴輪 形象 簡部	全長 5.0+	白・赤・黒色粒、黒雲母粒、砂粒少量	7.5YR7/6 橙 良好	円筒部に粘土板端部で貼付 外面縦ハケ→縦長に縫縫に赤色塗彩、内面縦ハケ→縦線刻→縫縫に赤色塗彩、内面縦ハケ→縦長に縫縫に赤色塗彩、内面縦ハケ→	縫部破片 端部欠損 塩丘二段斜面覆土	07トレ No. 484
第40図03	埴輪 形象 盔	全長 12.9+	白・赤色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR5/8 明赤褐 良好	外面縦ハケ→端部横ナデ→端部赤色塗彩、内面斜め方向ハケ→端部横ナデ→端部赤色塗彩	笠部破片 塩丘二段頂覆乱内	7トレ A20071217
第40図04	埴輪 形象 屋根 部	全長 16.9+	白・赤色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR6/6 橙 普通	外面縦ハケ→端部横ナデ→格子状に線刻→市松模様に黒色・赤色塗彩、内面斜め方向ハケ→端部横ナデ	屋根部破片 塩丘二段斜面・裾覆土	09トレ No. 105・106・108
第40図05	埴輪 形象 器材? 總部	全高 3.1+	白・赤色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR6/6 橙 普通	外面縦・内面横方向ハケ→縫部横ナデ→端部赤色塗彩	縫部破片 円筒埴輪? 塩丘二段裾覆土	09トレ No. 59
第40図06	埴輪 形象 人物 玉飾 部	径 1.3	白・赤色粒少量	5YR4/6 赤褐 良好	外面ナデ 接合部で剥落	玉飾部破片 塩丘二段裾覆土	09トレ No. 60
第41図01	埴輪 形象 盔	全高 11.2+	白・赤色粒、小石少量	7.5YR6/6 橙 普通	外面縦ハケ→端部横ナデ→端部黒色塗彩、内面斜め方向ハケ→端部横ナデ→端部黒色塗彩	笠部破片 塩丘二段頂覆土	11トレ No. 14
第41図02	埴輪 形象 簡部	全長 8.1+	白・赤色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR5/6 明赤褐 普通	外面縦ハケ→鋸歯状に線刻→線刻間に赤色塗彩、内面ナデ→ナデ	筒部破片 先端は擬口縫 周堀覆土	11トレ D内 081014
第42図01	埴輪 形象 盾?	全長 25.4+	白・赤色粒、黒雲母粒少量	5YR5/6 明赤褐 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ→格子状に線刻→突帯上、線刻内市松模様に赤色塗彩、内面ナデ→ハケ	筒部破片 塩丘二段裾覆土	13トレ No. 36・54
第42図02	埴輪 形象 腕部	直径 2.8 全高 2.7+	白・赤色粒、砂粒微量	5YR6/6 橙 普通	ナデ→赤色塗彩	腕部破片 塩丘二段裾覆土	13トレ No. 41
第42図03	埴輪 形象 簡部	突径 31.4 * 全高 11.6+	白・赤色粒、黒・金雲母粒、砂粒少量	2.5YR5/6 明赤褐 良好	外面縦ハケ→突帯貼付→横ナデ→鋸歯状に線刻→線刻間に赤色塗彩、内面ナデ 円形の透かし穴	筒部破片 塩丘二段裾覆土	14トレ No. 269
第42図04	埴輪 形象 簡部	全長 6.2+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	2.5YR5/6 明赤褐 良好	外面縦ハケ→矢印状に線刻、内面ナデ	筒部破片 周堀覆土	14トレ D内
第42図05	埴輪 形象 總部	幅 3.0 全長 5.7+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	2.5YR5/6 明赤褐 良好	縦ハケ→縦長に縁貼付→横ナデ→二列刺突→側縫に赤色塗彩	縫部破片 貼り付け部剥落 塩丘一段平坦面覆土	14トレ No. 18
第43図01	埴輪 形象 簡部	幅 3.0 全長 5.8+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、砂粒少量	5YR5/6 明赤褐 普通	外面縦ハケ→縦に突帯貼付→ナデ→突帯側縫? に赤色塗彩、内面ナデ	筒部破片 周堀内縁覆土	14トレ No. 146・D内 091208
第43図02	埴輪 形象 盾?	全長 12.3+	白・赤・黒色粒、小石少量	5YR6/8 橙 普通	外面縦ハケ→端部横ナデ→端部黒色塗彩、内面斜め方向ハケ→端部横ナデ	縫部破片 塩丘一段平坦面覆土	14トレ No. 3
第43図03	埴輪 形象 簡部	全長 9.0+	白・赤・黒色粒、黒雲母粒、砂粒少量	10YR7/3 にぶい黄橙 普通	外面縦ハケ→突帯貼付 (-2) →横ナデ→横方向→鋸歯状に線刻、内面ナデ→横方向ハケ -3 のみ突帯斜め	筒部破片 塩丘二段裾覆土	14トレ C1091207・C1091208
第44図01	埴輪 形象 盔	全長 9.0+	白・赤・黒色粒、黒雲母粒、小石少量	2.5YR5/8 明赤褐 良好	外面縦ハケ→端部横ナデ→端部赤色塗彩、内面斜め方向ハケ→端部横ナデ→端部赤色塗彩	笠部破片 前方部主体部前室覆土	H21 前方部主体部 100108

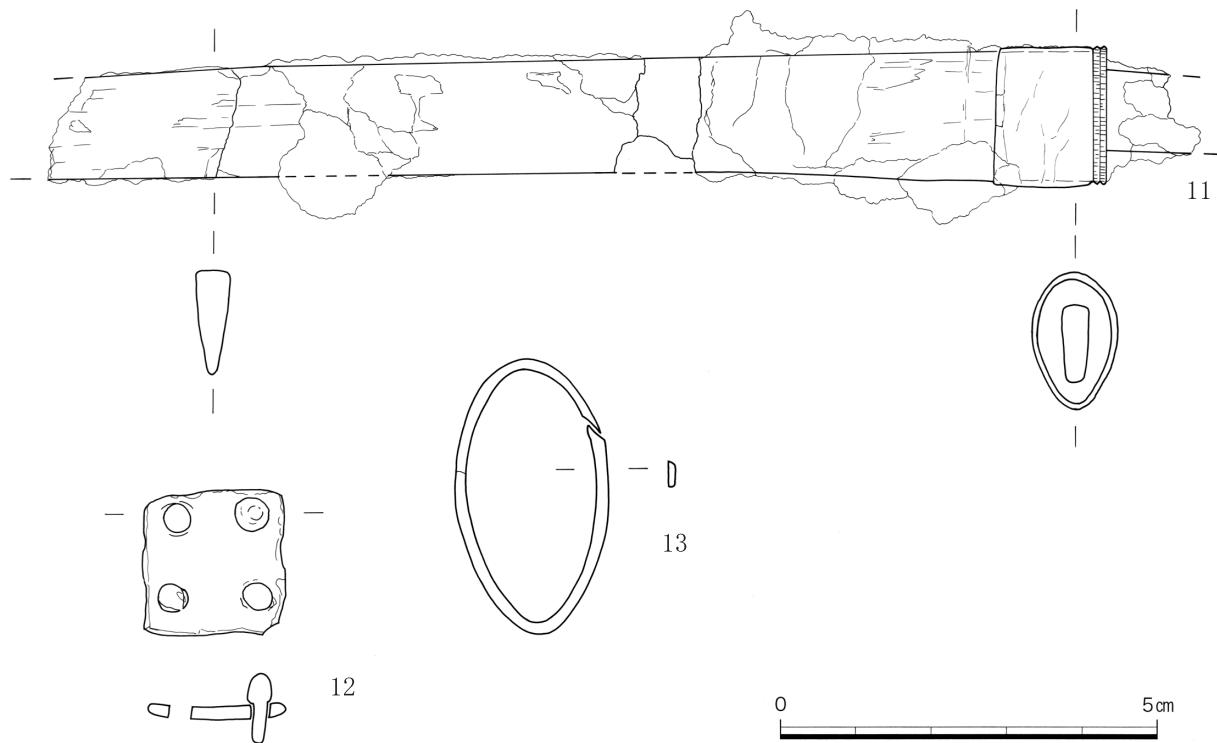
第6表 土器観察表 単位: cm

No	器種	計測値	材質・混和材	色調・焼成	特徴	遺存度・出土状態	注記記号
第44図02	埴輪 形象蓋 瓠部	全長 8.2+	白・赤色粒、黒雲母粒、小石少量	5YR5/6 明赤褐 良好	外面縦ハケ→端部横ナデ→端部赤色塗彩、内面斜め方向ハケ→端部横ナデ→端部赤色塗彩	笠部破片 前方部主体部前室覆土	H21 前方部主体部 091126
第44図03	埴輪 形象 鞠 緑部	全高 6.3+	白・赤色粒、金雲母粒、石英粒少量	5YR6/6 橙 普通	縦ハケ→縁貼付→横ナデ→二列刺突→縁下端に赤色塗彩、内面横方向ハケ、端面ナデ	縫部破片 前方部主体部前室覆土	H21 前方部主体部 100106
第44図04	埴輪 形象 鞠 緑部	全高 8.5+	白・赤色粒、黒雲母粒、石英粒少量	5YR5/6 明赤褐 普通	縦ハケ→縁貼付→横ナデ→二列刺突、内面横方向ハケ→縦・斜めハケ、端面縦ハケ→ナデ	縫部破片 前方部主体部前室覆土	H21 前方部主体部ベルト東 091211
第44図05	埴輪 形象 盾?	全高 13.5+	白・赤・黒色粒、金雲母粒、石英粒、チャート粒、砂粒少量	2.5YR5/6 明赤褐 良好	外面横方向ハケ→縦ハケ→鋸歯状線刻、内面縦ナデ	筒部破片 前方部主体部前室覆土	H21 前方部主体部ベルト東 091201
第44図06	埴輪 形象 鞠 簡部	全高 8.9+	白・赤色粒、黒雲母粒、石英粒、チャート粒、砂粒中量	5YR6/6 橙 良好	外面縦ハケ→縦線刻、内面ナデ→ハケ	筒部破片 前方部主体部前室覆土	H21 前方部主体部 091214
第44図07	埴輪 形象 簡部	全長 4.7+	白・赤色粒、黒雲母粒、石英粒少量	7.5YR7/4 にぶい 橙 良好	外面縦ハケ→鋸歯状線刻、内面剥落	筒部破片 前方部主体部前室覆土	前方部主体部上層 08120
第44図08	埴輪 形象 人物 指 先部	全長 7.7+	白・赤色粒、雲母粒、砂粒多量	5YR4/6 赤褐 良好	外面ナデ→上衣裾部に下向きの指3本貼付、内面接合部剥落、上衣裾部に指頭痕	指先部破片 前方部主体部前室覆土	前方部トレンチ石室内 101215
第45図01	須恵器 襲 口縁部	全高 3.0+	白色粒少量	5Y5/1 灰 良好	口縁部横ナデ	口縁部破片 前方部主体部前室覆土	H20 前方部主体部No.5
第45図02	須恵器 襲 頸部 *	頸径 29.8 全高 6.4+	黑色粒少量 群馬か柘木西部産	5Y5/1 灰 良好	体部外面格子タタキ、内面同心円當て具痕、口縁部貼付→横ナデ、カキメ	頸部、体部上位 1/4 遺存 周囲内縁覆土	04 トレD内
第45図03	須恵器 襲 口縁部	口径 17.2 * 頸径 15.0 * 口高 3.1 全高 7.8+	粗砂、白・赤色粒、石英、白雲母粒、白色針状物質微量	内 2.5Y6/3 にぶい 黄 外 5Y6/1 灰 良好	体部外面平行タタキ、内面同心円當て具痕、口縁部貼付→横ナデ	口縁、頸部、体部上位 1/4 遺存 墳丘二段頂覆土	13 トレNo.59 No.58...は同一個体
第45図04	須恵器 襲 口縁部	全高 12.5+	白色粒、石英粒微量	5Y6/1 灰 断 7.5YR5/4 にぶい 褐 良好	口縁部貼付→横ナデ→櫛描き施文	口縁部破片 墳丘二段裾覆土	14 トレNo.251
第45図05	土師器 杯 体部	全高 2.8+	白色粒、雲母粒少量	内 7.5YR6/4 にぶい 橙 外 10YR7/3 にぶい 黄橙 良好	体部外面窪削り、内面ナデ、口縁部横ナデ	体部破片 周囲外縁覆土	13 トレNo.5
第45図06	灰釉陶器 碗 上半部	口径 15.2 * 全高 3.2+	黒色粒微量 東濃産光ヶ丘1(N8型式)	灰白色 良好	口縁部横ナデ→ハケ塗り施釉	口縁部、体部上位 1/8 遺存 周囲外縁覆土	14 トレNo.190・192
第45図07	土師器 台付 脚部	底径 8.0 * 全高 5.3+	白・赤色粒、金雲母粒少量	7.5YR6/6 橙 不良	底部横ナデ	体部 1/3、脚部 1/8 遺存 周囲外縁覆土	14 トレNo.160
第45図08	須恵器 襲 口縁部	全高 2.3+	白・黒色粒少量	内 N6 灰 外 N3 暗灰 良好	口縁部貼付→横ナデ	口縁部破片 周囲内縁覆土	14 トレD内
第45図09	須恵器 襲 口縁部	全高 12.5+	白・黒色粒少量	内 N6 灰 外 N3 暗灰 良好	口縁部横ナデ→櫛描き施文	口縁部破片 周囲外縁覆土	14 トレNo.179



第48図 金属製品実測図 (3) S=1/2

1・2・3・8・9 前方部主体部 4・5:18トレンチ 6・7・10:17トレンチ

第49図 金属製品実測図（4） $S=1/1$

11・12・13：前方部主体部

川原石積みの石室であることから、吾妻古墳の系譜を引く集団は相対的に地位が低下していたと見ることができる。ただ、後期後半から終末期には、栃木県内では大型古墳が複数地域で築造されているため、それらも念頭に置いて変遷や階層構造を考慮しなければならない。

墳形の問題

平面形

吾妻古墳の最大の特徴は、墳丘第一段と第二段の形状が異なっており、相似形にならないことである。吾妻古墳に劣らず第一段と第二段が非相似形なのが、羽生田茶臼山古墳で、いずれも墳丘第一段の方が括れが弱い。下台原古墳、長塚古墳、壬生愛宕塚古墳、三王山古墳は第一段が明確に括れており、第二段と相似形を成していることから別類型の墳形であると判断できる。

墳丘第一段の平面形は、後円部径と前方部幅がほぼ同じであるものの、西側では周堀と共に前方後円形を描く。それに対して、東側では墳丘第一段の括れが弱く、西側とは形状が異なっている。周堀外縁は前方部側面が最も膨らむため、盾型に近い形状を呈する。このような、左右非対称の平面形の様相は、周堀、立面形においてかなり異なった外観を呈するものの、構成原理においては琵琶塚古墳と共通している。吾妻古墳の平面形は、左右非対称だけでなく、墳丘第一段の平面形、横穴式石室の位置まで類似した飯塚27号墳のような例が存在することから、当時の古墳を築造する集団の中では規範となつた平面形であると言える。規模による隔絶性は高まつたものの、平面形による共通性は強まつてゐるという様相からは、それぞれの規模の古墳を築造する集団同士がひとつの規範の中で階層化しているとみることができる。この様相は、琵琶塚古墳が、同時期の帆立貝形古墳や円墳に対して規模だけでなく平面形においても異なつておらず、質的な隔絶性が高いこととは様相を異にしており、社会構造の変化を想定させる。

墳丘第二段の平面形は、左右対称で比較的整つてゐる。後円部径と前方部幅がほぼ同じで、前方部が長いのが特徴である。類似した墳形としては、御鷺山古墳、八木岡瓢箪塚古墳、国分寺愛宕塚古墳が挙げられる。崩壊が著しく不明確であるが、国分寺愛宕塚古墳と同企画と考えられている山王塚古墳（小森・齋藤1992）も同様と考えられる。埴輪列が描く綿貫觀音山古墳の墳形も類似してゐる。国分寺愛宕塚古墳、山王塚古墳は吾妻古墳と至近距離にあり、同じ古墳群に属すると見なすことが可能であるが、御鷺山古墳、八木岡瓢箪塚古墳はやや離れており、別の古墳群と見なすことができる。それらより近い距離、水系にある壬生古墳群

の愛宕塚古墳、羽生田古墳群の茶臼山古墳、長塚古墳は前方部が幅広で墳形が異なっていることから、墳形の選択には地理的関係ではない、被葬者や集団同士の関係が反映しているとみることができる。

周堀の問題

周堀は、現況でも非常に明瞭に視認できるが、調査の結果、それが古墳の原形を非常に良好な状態で保つたものであることが確認できた。それと共に、周堀の外には古墳に伴う施設（周堤や二重、三重目の周堀）が認められないことも確認できた。

周堀の底面付近の掘削角度は、南側から西側にかけて（5・6・7・8・9トレンチ）は外側が急峻で、内側が緩やか、北側から東側にかけて（1・2・11・13・14トレンチ）は外側が緩やかで、内側が急峻である。南東隅角（3トレンチ）のみは外側も内側も緩やかである。これは吾妻古墳が立地する地形が北から南、西から東へ傾斜しているため、高い方に接する縁辺側が急峻になったためと考えられる。

周堀内は覆土の堆積が非常に薄いことが確認できた。1・4・5・9・11・14トレンチ周堀底面やや上位で浅間B軽石層（A s -B）を検出した。その降灰年代は天仁元年（西暦1108年）とされており、古墳築造直後の状態からほとんど埋没が進行していない状況が窺われる。墳丘上の埴輪の崩落が集中する地点でもA s -Bが覆土に混じる状況が窺われ、A s -B降灰前後に埴輪の崩落が一気に進んだと考えることができる。

埋没の少なさは、地理的に近い甲塚古墳でも指摘されていることから、自然環境によるものと考えることもできるが、要因の一つとして、盛土量の少ない基壇墳形による墳丘の崩落の少なさが挙げられる。しかし、隣接地への古墳築造の少なさを考えると、築造後の浚渫等の、周堀内の埋没を防ぐための活動を考慮する必要がある。A s -B降灰以降の浚渫は認められないものの、平安時代の土器や古銭が出土していることから、何らかの活動が行われた可能性がある。周堀外でも黒色土層が広く確認されており、周堀内の黒色土、墳丘第二段裾の黒色土と対応すると考えられるが、二次的移動の有無は確定できない。

墳丘における基壇の問題

栃木県の古墳の墳形の特異性は、基壇という言葉と共に認識されていた。長塚古墳では墳丘第一段平坦面（基壇）に扁平な川原石が敷かれている。川原石の敷設によって墳丘第一段（基壇）を積極的に造作していることが分かるが、墳丘第一段（基壇）上の盛土の状況が明確でなかった。桃花原古墳では墳丘第一段（基壇）平坦面の盛土は、厚さ平均20cmで中央のみに存在し、落ち際には明確な盛土は存在しないとされている。富士山古墳では墳丘第一段（基壇）平坦面の盛土が確認されているが全面にわたって確認されたわけではない。甲塚古墳では旧表土を削ってロームへの漸移層の面で墳丘一段目を造り出していることが確認されている。これらの発掘例からは、墳丘第一段への盛土はそれほど厚くないであろうことが想定でき、吾妻古墳の墳丘第一段も従来、周囲とほとんど同じ高さで、盛土はほとんどないものと認識されていた。今回実測した結果、僅かではあるが、墳丘第一段が周堀外より高いことが判明した。さらに表土除去、部分的には立ち割りによって、墳丘第一段全面に盛土が施されていることが確認できた。このことから、低いとはいえ、基壇面も墳丘の一部と見なすことができる。

第一段平坦面（基壇）はほぼ水平で、中央から外縁にかけてロームによる盛土が上面を覆っている。第二段裾付近ではつま先上がりに高くなり、その先で急激に立ち上がる様相がどのトレンチでも確認できた。盛土の質もその部分で変化しており、黒色土か鹿沼土による盛り土が主体になる。その幅は後円部側が広く、前方部側が狭い。石室のある前方部側が狭いのは甲塚古墳と共通しており、その規格論的検討が今後の課題である。

墳丘第二段の問題

墳丘には葺石はなく、盛土表面は軟らかいので墳丘面の確認が困難であったが、平成19・20年度の調査で埴輪が集中する地点において、やや平坦な面を成す状況が確認できた。また、20トレンチ付近では現況でもやや平坦な面を成す状況が確認できる。このことから、墳丘第一段（基壇）を含めて三段以上の段築を想定することが可能である。ただ、トレンチによって平坦面の位置が異なっており、幅も狭く、平坦面が墳丘全体に巡ることは確認できていないため、墳丘の崩落によるものとみることも可能である。盛土は、黒色土か鹿沼土による盛土が主体である。頂上では後円部や括れ部ではロームによる盛土が主体であるが、前方部では鹿沼土による盛土が主体となっている。第一段平坦面でもロームによる盛土が主体であることから考えると、斜面ではロームによる盛土が滑落している可能性がある。ただ二段目裾に周堀内の黒色の覆土と同様な

覆土が全面で確認できるので、滑落が始まったのは A s -B 降灰後で、元の平面形が崩れるほどではなかったと思われる。

埴輪列の問題

埴輪の出土は、周堀外ではほとんどない状況であり、周堀外縁における埴輪列の樹立はなかったと判断できる。周堀内でも非常に少なく、周堀内縁即ち墳丘第一段外縁や墳丘第一段中央にも埴輪列はなかったと判断できる。出土量から埴輪列の存在が想定できるのは墳丘第二段である。墳頂では出土したものの据え付け痕は発見できなかった。墳丘第二段斜面からも出土し、部分的には集中する状況も確認できた。壬生町史では、墳丘中位に埴輪列が存在することが指摘されている。しかし、段築とみるには幅が狭いので、埴輪列の存在を想定するにはやや難がある。墳丘第二段裾は出土量が最も多く、この部位に埴輪列を持つと想定することができるが、原位置を確認できたものは皆無であり、断定はできない。実際、この部位に埴輪列を有する古墳の事例は殆ど無く、富士山古墳、甲塚古墳では埴輪列が墳丘第一段平坦面中央に巡っていた。これらのことから、埴輪列の存在が確実なのは墳頂のみということになる。しかし墳丘第二段斜面出土の埴輪をすべて墳頂からの崩落とするには、吾妻古墳の墳頂の狭さを考えると、量が多すぎる印象がある。

その設置に際しては、すべて墳丘面から浮いた状態の出土なので、簡便な方法を探っていた可能性が高い。

埴輪列を原位置で確認することはできなかったが、トレンチごとの埴輪の出土量によって埴輪列の様相をある程度想定できる。今回の調査における埴輪の出土量は、トレンチ調査という限界を差し引いても、多いとは言えない状況にある。古墳の規模を考えるなら、予想外の観がある。埴輪が多く出土する墳丘第二段から第一段平坦面にかけての位置に、入れることができたトレンチは前方部3本（1・4：前方部・7トレンチ）、後円部3本（9・11・13トレンチ）、括れ部2本（8・14トレンチ）である。これらのトレンチではすべて埴輪が出土しており、最も少ないトレンチでも約9kg出土していることから、埴輪列は最低でも墳丘を一周していたと考えられる。その中でも埴輪の多寡には偏りがある。部位ごとに見た場合、後円部では84.666kg、前方部では136.741kg、括れ部では198.655kgである。方向で見た場合、東側（1・13・14トレンチ）では146.946kg、西側（7・8・9トレンチ）では225.909kg、南側（4：前方部主体部トレンチ）では23.948kg、北側（11トレンチ）では21.152kgである。横穴式石室の開口部が近い南側が少なく、北側と約2kgしか違わないのが注目できる。このことは埴輪祭祀が横穴式石室祭祀と一致するものではないことを示している。最も多いのが括れ部であること、西側の方が東側より約80kg多いことは、最も崩落しやすい方向に集中した結果の自然現象と考えられるが、確かとは言えない。

形象埴輪の出土から埴輪群像の存在も予想される。甲塚古墳では、特別な区画を作るのではなく、円筒埴輪列の中に形象埴輪群が存在する様相が認められた。造出等の施設が存在しないことが判明した現時点では、吾妻古墳においても同様である可能性が高い。

第2節 内部主体について

吾妻古墳の主体部についてはこれまで二つの説があった。一つは、前方部の石室が墳丘築造当初のものでないとする説である。使用された石材が切石加工という新しい技術によること、その築造位置が前方部という付属的な場所であることから、墳丘築造後に付け加えられたものとする解釈である（大和久震平、池上悟、上野恵司）。それによって、本来の主体部が後円部に存在することを想定している。もう一つは、前方部の石室が墳丘築造当初のものとする説である。栃木県の「切石」は凝灰岩の軟質石材で、近畿地方の「切石」とは実体的には違ったものであり、年代を下らせて考える必要はなく、その築造位置も茨城県や千葉県の事例からすると、本来のものと考えて差し支えないという解釈である（秋元陽光・大橋泰夫）。こちらの説では後円部に主体部が存在しないと想定している。栃木県の近年の研究では後者の説に傾く傾向があった。今回の調査で後円部にトレンチや電気探査で主体部の有無を調査したが、確実な主体部は確認できなかった。もとより限定された範囲内の調査であるので、埋葬主体が他には皆無とは言えないものの、前方部の主体部に匹敵する規模のものはなく、前方部の主体部が吾妻古墳本来の埋葬主体であると言って差し支えないと考えられる。さらに前方部主体部はそれを覆う主体部付近の盛土内にも拳大の川原石や粘土が多数混ぜ込まれている。このことは前方部の主体部構築が墳丘構築と一体になったものであることを示しており、古墳築造当初のものでないとする説に対する反証となるものである。このような盛土法は今のところ他に例を見ない。

吾妻古墳の主体部は、従来から前方部前端に「吾妻の岩屋」と呼ばれる石室が存在すると言われていた。

今回の調査でその実物を確認することができ、「下野國古墳図誌」が比較的忠実に石室を描写していたことが判明した。これまでも玄室が一枚石であることから、切石石室の一種と考えられてきたが、他の切石石室とのさらに詳細な比較検討が可能となった。一番大きな成果は石材の違いが明らかになったことである。現地に残された奥壁、側壁が凝灰岩ではなく、閃緑岩であることが判明した。近隣に産地を求めるなら、黒川、思川上流から切り出されたと推定できるが、断定はできない。壁面は赤色塗彩されており、顔料はX線回析の結果、針鉄鉱を主体とする褐鉄鉱であることが判明した。この顔料はベンガラ、水銀朱、鉛丹といった代表的な赤色顔料とは違い、その入手経路を推定することは今のところ困難である。

現在壬生城址公園に保管されている、凝灰岩の玄門と硬質石材の天井石が吾妻古墳出土として言い伝えられていたが、それらの寸法が現地の奥壁幅や側壁長に一致することが判明し、吾妻古墳の玄室が玄門のみ凝灰岩を使用し、奥壁・側壁・天井を閃緑岩の一枚石で構成したものであったことが判明した。このことによって、藤井小学校所蔵の吾妻古墳出土が伝えられる石材は、玄室内に組み合う余地がなく、羨道や前室に使われた可能性が高くなった。思川・田川流域の一枚石の切石石室は凝灰岩のもののみが知られており、閃緑岩の一枚石は例がない。凝灰岩は軟質で加工が容易であるのに対し、深成岩である閃緑岩は硬質で加工が困難であり、労力がかかるだけでなく、高度な技術が必要である。従来、このような硬質石材の加工は畿内でもその出現が7世紀以降と考えられてきた。しかし吾妻古墳の年代は、出土遺物等からみても7世紀まで降るものではない。硬質石材を加工する技術は、京都府蛭子山古墳で花崗岩を加工した4世紀後半の舟形石棺で確認されていることから、従来の系譜と違った技術が古い段階から断続的に伝播していた可能性がある。吾妻古墳の場合も高度な加工技術から年代を降らせて考えるよりも、むしろ墳丘の巨大さと共に、同時期の古墳に対する卓越性を示すために、より高度な加工技術を採用したとみることができる。

一枚石から成る玄室の前面には、川原石小口積みの側壁部分が続き、入口には凝灰岩切石積みの羨門が取り付けられている。奥壁から羨門前端までの石室全長は8.40m、奥壁から玄門が取り付く一枚石側壁の割り込みまでの玄室の内法長が2.40mであることから、玄門の厚さと玄室外の一枚石部分と川原石小口積み側壁部分、羨門先端までの長さは6.00mあることになる。川原石小口積み部分で仕切りとなる施設は発見できなかったものの、この長さを全て羨道と見なすには長すぎる感がある。石室の幅は、奥室の奥壁部分で1.70m、川原石小口積み側壁北端部分で1.70m、羨門部分で1.40mであり、入口へ向かって幅を狭めていることが分かり、奥側と入口側を区別する意識が窺われる。さらに前述の藤井小学校所蔵の吾妻古墳出土と伝えられる石材の小ささと割り込みを前門と羨道部分に架けるためと見るならば、一枚石の奥室の前の部分を前室と羨道と見なし、複室構造と考えることが可能である。このような構造は奥室のみ凝灰岩一枚石の切石で羨道、前室が川原石小口積みの桃花原古墳に類似する。前方後円墳で年代の近い御鷺山古墳、距離的に近い壬生車塚古墳が奥室、前室とも切石であることから、巨大一枚石の使用頻度が年代的、地理的に変化するものではないと言うことができる。羨門は、西側壁は一石のみの残存であったが、東側壁は二石を確認できた。東側壁の上段の切石は斜めに面取りされており、その面が墳丘斜面に露出していたと考えられる。その石材に切組技法が確認できた。これは栃木県内で確認されたものとしては最古の切組技法である。従来、切組技法が多く見られる群馬県では6世紀後半に出現し、7世紀に盛行したと考えられていたが（右島1994、若狭2008）、今回の発見例はそれと比べて年代的に変わらないだけでなく、技法的に劣るものではなく、群馬県とほぼ同時期に截石切組技法が出現したことが分かる。

石室の前の墳丘面では前庭部、墓道等の施設は確認できなかったが、石室内と墳丘第一段平坦面の間に大きな段差がないことが判明した。石室前に前庭部、墓道を有する甲塚古墳、御鷺山古墳、桃花原古墳は相対的に深い位置にあり、地下式と言うことができる。それに対して吾妻古墳は、墳丘第一段平坦面が広大に広がっており、その平坦面から立ち上がる第二段斜面に直接開口する、切石積みの羨門が墳丘外からも見えるような見通しの良い景観であったと想定できる。この構造は下石橋愛宕塚古墳や車塚古墳と同じであったと判断できる。

第3節 遺物について

埴輪の問題

埴輪は今回の調査で出土した遺物の大部分を占める。トレンチによる調査のため、完全な形に復元できるものは発見することができなかつたが、吾妻古墳の埴輪の特徴を知ることができた。

吾妻古墳の円筒埴輪は、分厚く、ハケメが細かく、飯塚埴輪窯跡出土埴輪との類似性が指摘されていたが

県内の古墳ではあまり類例がなく、その位置づけが不明確であった。今回の調査での新たな知見を加えた円筒埴輪の特徴は以下の通りである。直径 40 cm 前後、35 cm 前後、30 cm 前後のものがある。突帯は 4 条以上で大型であるが、低位置突帯は確認できない。突帯の貼り付け位置には間隔を割り付けるための短い線刻が付けられる。突帯間の長さは 10 ～ 12 cm で口縁長のみわずかに長い。口縁端は直口縁もあるが、つまみ出したように強く屈曲する口縁が目立ち、突帯を貼り付けたような口縁も存在するが、いわゆる貼り付け口縁のような低いものではなく、つまみ出し口縁の一変形と見られる。ハケメ調整は横方向後に縦方向を施し、突帯を貼付する。線刻を施すものがあり、中には波状のものがある。これらの特徴は中期の埴輪に多く見られるもので、一見古相を呈するが、後述するように、後期の一部の埴輪に見られるものである。類似した埴輪として、栃木県富士山古墳、群馬県七輿山古墳（志村）、綿貫觀音山古墳（徳江 1998）、大阪府日置荘遺跡 IV 調査区埴輪窓 P-1、大阪府日置荘西町窓跡群（森屋 1995、十河 2003）の例が挙げられる。

大型古墳に採用される埴輪は大型のものが多いが、吾妻古墳の埴輪は、琵琶塚古墳の埴輪より大きく、摩利支天塚古墳より大きいかほぼ同じである。大型埴輪の例として大型前方後円墳以外で、佐野市中山 4 号墳、米山古墳、壬生町富士山古墳が挙げられる。富士山古墳は直径 86 m の円墳であるが、吾妻古墳の後円部直径 88 m に匹敵する、大型古墳である。墳丘から出土した須恵器の無蓋高杯は陶邑編年 TK10 型式併行期のものとされ、古墳の年代は 6 世紀中葉から後半と考えられている。富士山古墳の円筒埴輪は低位置突帯を持つ七条で、吾妻古墳の埴輪を大きさで上回っているが、横方向のハケメや貼り付け口縁を持つ点では吾妻古墳と共通している。後期で横方向のハケメを持つ例は他に足利市海老塚古墳（前沢・橋本 1981）がある。海老塚古墳は直径 53 m の円墳で、常見古墳群を構成する大型古墳である。ただ富士山古墳も海老塚古墳も横方向のハケメは最後に施されるのに対し、吾妻古墳の横方向のハケメは縦ハケメの前に施されるものが大半で、最後に施されるものは口縁に施されるものがわずかにあるのみである。富士山古墳の埴輪の横方向のハケメは、各段部の一部や全体を埋めるように施されており、吾妻古墳より多く施されている。口縁部に横方向のハケメが施される例は、貼り付け口縁の上に施されるので全く同じとは言えないが、綿貫觀音山古墳に見られる。突帯間隔の割り付けは富士山古墳の埴輪でも見られるが、富士山古墳例は沈線であるのに対し、吾妻古墳例は短い単位の線刻である点が異なっている。七輿山古墳は富士山古墳の埴輪との共通性が指摘されており、6 世紀前半の築造と考えられている。綿貫觀音山古墳は 6 世紀後葉の築造と考えられている。日置荘西町窓跡群の埴輪は、口縁部突帯を用いる等の「復古調」な形態を探り、古市古墳群の埴輪とは差異が著しい。七輿山古墳に類似する埴輪があることから、関東地方と畿内の埴輪製作集団の交流が想定されている（高橋 1994）。このような埴輪は、栃木県域で前代までの大型古墳に多くみられる「塚山系」（秋元 2001）と言われる、琵琶塚、摩利支天塚古墳に採用された埴輪とは違った系譜と考えられる。波状の線刻は、鹿沼市下台原古墳で内面に施した例が見られるが、県内では多くない。埼玉二子山古墳に見られるが全周するものではない。須恵器ではあるが、類似した一本の櫛描きによる波状線刻が御鷺山古墳、下石橋愛宕塚古墳の甕口縁部にみられ、それとの関係も考慮する必要がある。吾妻古墳の埴輪は、低位置突帯が存在しないことから、低位置突帯出現以前の製作時期を想定することができる。反面、古墳の規模に対しての出土量の少なさや類例の希少性を埴輪消滅直前の様相と見なし、年代を下らせることも不可能ではない。そのように考えると 6 世紀後半でもそれほど遡らない時期とみることができる。

6 世紀には、飯塚埴輪窓跡と唐沢山ゴルフ場埴輪窓跡が知られている。唐沢山ゴルフ場埴輪窓跡は、低位置突帯を持つ埴輪が作られ、約 25 km 離れた壬生町ナナシ塚古墳の武人埴輪がその製品と考えられており（水沼 1990）、広域の供給が想定されている（橋本 1996）。富士山古墳も同様な経路で埴輪の供給を受けたと考えられる。飯塚埴輪窓跡は吾妻古墳以外にはその供給先はほとんど不明であるが、唐沢山ゴルフ場埴輪窓跡と共に、それまでの塚山系埴輪の製作者とは別の系譜で導入されたと考えられる。

形象埴輪の発見は従来知られていなかった所見である。器材埴輪と考えられるものが多いが、わずかに人物埴輪と考えられるものも存在する。この様相は富士山古墳と共に通するが、近隣の甲塚古墳における大量の埴輪群像の採用とは様相が異なっている。

土器の問題

須恵器の出土量は僅少で、土師器は確実に古墳に伴うものが全く確認できなかった。通常、土器類が多く出土する、石室前面の 4・17・18 トレンチでもこのような状況であることは、周堀からつづく前庭部が確認できることとも関連して、墳丘第一段（基壇）上の埋葬儀礼を考える上で注意すべき様相である。

13 トレンチ後円部墳頂出土の須恵器甕は、供献又は埴輪の代用と考えられるが、未確認の埋葬主体への副

葬品である可能性も否定できない。

金属製品の問題

前方部主体部の前面にあたる、17・18トレンチから鉄器の破片が出土した。その形態から鉄鏃、帶金具若しくは小札と考えられるが、小片であり、断定できないものが多い。副葬品の一部が主体部築造後に外に持ち出されたと考えられる。横穴式石室部分から最も多く出土したのは挂甲小札である。挂甲の小札は、緘孔1列偏円頭系で、藤ノ木型に比定されるものが多く、緘孔2列のものが少量ある。緘孔1列は幅3.0～3.5cmで幅広のものが多く、緘孔2列は幅2.5～3.0cmのものが多い。この違いは甲冑が二領以上あるためなのか、部位の違いのためなのか、遺存状態が良くないので不明である。完形のものは全長9.0cmで通常の小札に比べてやや大きく、挂甲本体以外の部品である可能性がある。これら的小札は後期第2段階(TK43段階)で6世紀後葉の所産と考えられる(内山2006)。挂甲は大型古墳にしか副葬されない武具で、吾妻古墳の被葬者が持つにふさわしいと言える。ただ北関東は例外的に群集墳からも出土しており、その性格付けが課題となる。

銀板と考えられる小片は、その形状から、連珠文、唐草文の一部と判断でき、冠の一部と考えられる。銀冠は近隣では茨城県土浦市武者塚古墳、千葉県栄町浅間山古墳から出土している(白石他2002)。いずれも7世紀代と考えられており、吾妻古墳の年代としては新しすぎる印象がある。ただこの問題は浅間山古墳でも提起されており、単純に追葬に帰するだけでなく、銀冠の年代の再検討も必要と言える。銀製責金具は装飾付大刀の部品である。銀を使用した飾付大刀は別処山古墳の頭椎大刀の例があるが、6世紀後葉では方頭大刀の例もある。他の部品が不明であるため、全体の拵えを復元することは困難である。銀装刀子は、鑓部分が銀板で、先端に刻みを有する。銀装刀子は綿貫觀音山古墳、横塚古墳、下石橋愛宕塚古墳に見られる。金銅製帶金具は2cm四方の正方形で4つの鉢の穴があり、一つだけ鉢頭が残っている。6世紀後半の馬具は鉄地金銅張りが多数を占め、金銅製は少ない。類例は綿貫觀音山古墳、下石橋愛宕塚古墳に見られるが、同じ形のものはない。このような金銀製品の多さは後期後半における関東地方各地の大型前方後円墳における様相と共通し、最高首長の副葬品の様相を表しているとみるとみることができる。

第4節 古墳の年代について

1トレンチ盛土直下の旧表土中から検出された灰白色軽石は、6世紀中葉に噴出されたとされる榛名山二ヶ岳渋川テフラ(Hr-FP)に由来すると考えられること、挂甲小札、銀装刀子、金銅製帶金具はTK43型式併行期(6世紀後葉)と考えられることから、吾妻古墳の築造年代はTK43型式併行期(6世紀後葉)と考えられる。従来、下野型古墳の嚆矢としての位置づけから、他の基壇・埴輪を持つ古墳より古く位置づけられていたが、本調査の所見からは際だった古さは認められない。

第5節 古墳の性格について

6世紀後半は、全国的に大型前方後円墳が数や規模を縮小する中で、関東地方は大型古墳が数や副葬品の優秀さで卓越することが知られている。そのような時期に、吾妻古墳の墳丘が栃木県域で最大になったことをどのように位置付けるかが、その性格を検討する上で重要である。

関東地方でそれぞれの地域で古墳が最大化する年代は地域によって異なっている。神奈川県、東京都が前期、群馬県、茨城県、千葉県が中期に最大化する点で、栃木県とは大きく異なっている。しかし、全国的に見た場合、前期や中期で古墳が最大化する地域の方がむしろ目立つ傾向がある。それに対し、埼玉県は栃木県よりやや古いものの、後期に最大化する点で栃木県と共にしている。さらに埼玉県の場合、埼玉古墳群にのみ集中して大型古墳が作られるという点は、栃木県ではやや集中の度合いが低いものの、思川と田川に挟まれた、都賀・河内郡の一部の地域に大型古墳が集中する様相(秋元2007、広瀬2008)と共にする。埼玉古墳群中最古の古墳は稻荷山古墳であり、都賀・河内郡の大型古墳中最古の古墳である摩利支天塚古墳と対応する。そのように見ると、埼玉二子山古墳と琵琶塚古墳、埼玉鉄砲山古墳と吾妻古墳が対応し、鉄砲山古墳以降、埼玉古墳群以外で大型古墳の真名板高山古墳、小見真觀寺古墳が築造される様相は、吾妻古墳以降の大型古墳として、足利市正善寺古墳や真岡市八木岡瓢箪塚古墳が都賀・河内郡以外で築造されることと対応している。群馬県は太田天神山古墳以降、大型古墳の規模は縮小気味であったが、前述の七輿山古墳において再び巨大化する。七輿山古墳は吾妻古墳よりやや古いと考えられるが、墳丘長146mの大型前方後円墳である(志村1990・1991・1992)。日本列島全体で大型古墳が激減する時期での築造としては、国内屈指の規模という点で吾妻古

墳と共に通する。出土した埴輪も大型で一部横ハケを施した特徴的なもので、大阪府日置荘遺跡の埴輪との類似が指摘されており、吾妻古墳の埴輪とも一部共通性を有する。日置荘遺跡の埴輪は畿内の埴輪生産の中でその系譜を辿ることができないもので、当時埴輪生産が下火になりつつあった畿内に群馬県域の埴輪工人を派遣して作らせたものという説がある（高橋 1994）。その供給先は現在の所、不明ではあるが、河内大塚山古墳への供給を想定する意見もある（橋本 2010）。このような地域内での位置付けにおける七輿山古墳と吾妻古墳の類似性に対して、年代的には、綿貫觀音山古墳の類似性が窺われる。石室における切組技法の採用、挂甲、銀装刀子、金銅製馬具の出土といった共通性が見られるが、大陸系遺物、低位置突帯の有無という違いも見られる。栃木県内では、金銀製品、甲冑を持つ副葬品の様相は、横塚古墳、御鷲山古墳のような大型前方後円墳にのみ共通性が認められる。ただし大型帆立貝形古墳の下石橋愛宕塚古墳では金銀製品の副葬は見られるが、甲冑の副葬は見られない。下石橋愛宕塚古墳と御鷲山古墳は出土馬具の年代ではほぼ同時期であるが、墳形の違いによる階層差なのか、埴輪の有無に見られる僅かな年代差なのは明確にし難く、さらに詳細な分析が必要である。いずれにしても吾妻古墳が栃木県域における最高首長であることは異論のないところであろう。吾妻古墳築造後には藤井 38 号、39 号墳が築造されるものの、古墳以外に目立ったものがなく、墓域としての意識から、集落域とは区別されていたため、竪穴住居等が作られなかったと考えられる。ただ平安時代、中世の遺物は墳丘や周堀でわずかに見られることから、古墳の再利用はある程度行われたと考えられる。墳丘東側の突出部は、この部分のみ遺物が多いことから、そのような後世の再利用に伴うものと考えられる。しかし、墳丘上に墓壙や石塔が多数見られるような状況ではなく、墳丘を目立って改変するほどのものではない。前方部主体部内から銅製懸仏が出土しており、江戸時代以前に開口して、仏堂として使用されていたと考えられる。

参考文献（第2章既出は除く）

- 秋元陽光 2001 「栃木県における円筒埴輪編年（試論）」『埴輪研究会誌』第 5 号埴輪研究会
 内山敏行 2006 「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』Vol. 7 古代武器研究会
 小森紀男・齋藤恒夫 1992 「大形前方後円墳の築造企画（1）一栃木県国分寺町山王塚古墳の復元をめぐつて」『研究紀要』第 1 号 （財）栃木県文化振興事業団
 清水和明 1988 「挂甲の基礎的考察」『関西大学考古学資料室紀要』5
 志村哲 1990・1991・1992 『七輿山古墳』範囲確認調査報告書V・VI・VII 藤岡市教育委員会
 白石太一郎・白井久美子・萩原恭一・荻悦久・亀井宏行・石橋宏克・郷堀英司・吉野真如・永嶋正春・比佐陽一郎・鈴木三男・永嶋千鳥・小林謙一・今村峯雄・坂本稔 2002 『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県
 十河良和 2003 「日置荘西町系円筒埴輪の検討」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－発表要旨集第 52 回埋蔵文化財研究集会』第 52 回埋蔵文化財研究集会実行委員会
 高橋克寿 1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』第 41 卷第 2 号（通巻 162 号）考古学研究会
 徳江秀夫 1998 「埴輪」『綿貫觀音山古墳 I 墳丘・埴輪編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 242 集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 橋本博文 1980 「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
 橋本博文 1996 「埴輪の需給関係」『第 26 回企画展 佐野の埴輪 展示図録』佐野市郷土博物館
 橋本達也 2010 「樋野ヶ池窯と河内大塚山古墳 - 橋本明一資料の紹介をかねて - 」菊池徹夫編『比較考古学的新地平』同成社
 前沢輝政・橋本勇 1981 『海老塚古墳』足利市埋蔵文化財報告第 2 集 足利市教育委員会
 水沼良浩 1990 「第 3 章 壬生勢力と古墳、第 4 章 墓の世界」『壬生町史 通史編 I』 壬生町史編さん委員会
 右島和夫 1994 『東国古墳時代の研究』学生社
 森田久男・鈴木勝 1985 「栃木県における後期古墳出土埴輪の一様相-最下段における「低位置凸帯埴輪」資料の紹介-」『栃木県史研究』19 栃木県史編さん委員会
 森屋美佐子 1995 「古墳時代後期の遺物」『日置荘遺跡-近畿自動車道松原すさみ線及び都市計画道路松原泉大津線建設に伴う調査報告書-』大阪文化財センター
 若狭徹 2008 「岩野谷丘陵の開発と山名伊勢塚古墳-佐野三家をめぐる雑考-」『山名伊勢塚古墳』高崎市文化財調査報告書第 223 集 高崎市教育委員会

写真図版

図版1 遺構(1) 1トレンチ



1 トレンチ周堀外調査前状況（西から）



1 トレンチ周堀内縁発掘前状況（東から）



1 トレンチ周堀外縁断面（南西から）



1 トレンチ周堀断面（東から）



1 トレンチ周堀断面テフラ確認状況（南から）



1 トレンチ墳丘頂断面（南から）



1 トレンチ墳丘第二段断面（東から）



1 トレンチ墳丘第一段盛土断面（南から）



1 トレンチ周堀外調査終了状況（西から）



1 トレンチ周堀～墳丘調査終了状況（東から）



2 トレンチ周堀外断面（南東から）



2 トレンチ周堀外縁断面（西から）



2 トレンチ周堀外縁断面（南から）



2 トレンチ周堀外調査終了状況（西から）



3 トレンチ周堀調査前状況（北から）



3 トレンチ周堀外断面南半（南西から）

図版3 遺構(3) 3・4トレンチ



3トレンチ周堀外縁断面（西から）



3トレンチ周堀外縁断面（北から）



3トレンチ周堀外縁調査終了状況（北から）



4トレンチ周堀外調査前状況（北から）



4トレンチ周堀内縁調査終了状況（南から）



4トレンチ周堀外縁断面北半（南西から）



4トレンチ周堀外縁断面（北西から）



4トレンチ周堀内縁断面（南から）



4 トレンチ周堀内縁底面付近断面（南西から）



4 トレンチ周堀外調査終了状況（南から）



4 トレンチ周堀内縁調査終了状況（南から）



5 トレンチ周堀外断面北半（西から）



5 トレンチ周堀外断面南半（西から）



5 トレンチ周堀外縁断面（北西から）



5 トレンチ周堀外縁調査終了状況（北から）



6 トレンチ周堀調査前状況（東から）



6 トレンチ周堀外断面（南東から）



6 トレンチ周堀外縁断面（南東から）



6 トレンチ周堀外調査終了状況（東から）



7 トレンチ周堀調査前状況（東から）



7 トレンチ周堀内縁調査前状況（南西から）



7 トレンチ墳丘第二段発掘前状況（南西から）



7 トレンチ周堀外断面（南東から）



7 トレンチ周堀外縁断面（南東から）



7トレンチ周堀内縁断面（南西から）



7トレンチ墳丘第二段裾断面（南から）



7トレンチ墳丘第二段裾埴輪出土状況（南西から）



7トレンチ墳丘第一段盛土断面（南から）



7トレンチ周堀外縁調査終了状況（東から）



8トレンチ墳丘調査前状況（西南から）



8トレンチ周堀調査前状況（東南から）



8トレンチ墳丘第二段裾埴輪出土状況（西から）



8 トレンチ周堀外縁断面（北東から）



8 トレンチ周堀内縁断面（南西から）



8 トレンチ墳丘第二段堀断面（南西から）



9 トレンチ周堀調査前状況（北から）



9 トレンチ墳丘調査前状況（西から）



9 トレンチ周堀外縁断面（南東から）



9 トレンチ周堀内縁断面（南西から）



9 トレンチ墳丘第一段断面（南から）



9 トレンチ墳丘第二段断面（西から）



9 トレンチ墳丘頂断面（南から）



9 トレンチ周堀～墳丘調査終了状況（西から）



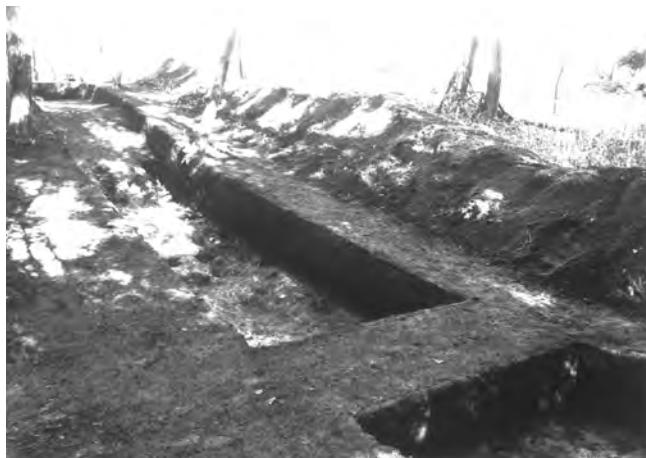
11 トレンチ墳丘調査前状況（北から）



11 トレンチ周堀調査前状況（南から）



11 トレンチ周堀内縁断面（北西から）



11 トレンチ周堀外縁断面（南西から）



11 トレンチ周堀外断面（北西から）



11 トレンチ墳丘頂埴輪出土状況（北東から）



11 トレンチ墳丘第一段断面（北西から）



11 トレンチ墳丘第二段断面（北から）



11 トレンチ周堀～墳丘調査終了状況（北から）



11 トレンチ周堀外調査終了状況（北から）



12 トレンチ周堀外調査前状況（北東から）



12 トレンチ周堀外縁断面（北東から）



12 トレンチ周堀外調査終了状況（北から）



13 トレンチ周堀外調査前状況（東から）



13 トレンチ墳丘調査前状況（東から）



13 トレンチ周堀内縁断面（南東から）



13 トレンチ周堀外縁断面（南西から）



13 トレンチ墳丘頂断面（南西から）



13 トレンチ墳丘断面（南東から）



13 トレンチ周堀外断面（南東から）



13 トレンチ墳丘第二段埴輪出土状況（南東から）



13 トレンチ周堀外調査終了状況（東から）



13 トレンチ周堀～墳丘調査終了状況（東から）



14 トレンチ突出部発掘前状況（北から）



14 トレンチ突出部内縁断面（南東から）



14 トレンチ突出部外縁断面（南西から）



14 トレンチ突出部外縁断面（南西から）



14 トレンチ突出部外縁遺物出土状況（南東から）



14 トレンチ墳丘発掘前状況（南東から）



14 トレンチ墳丘第二段裾埴輪出土状況（南東から）



14 トレンチ墳丘断面（東から）



15 トレンチ調査前状況（北東から）



15 トレンチ墳丘断面（西から）



15 トレンチ墳丘断面（南西から）



15 トレンチ墳丘断面（南東から）



16 トレンチ調査前状況（北から）



16 トレンチ藤井39号墳周堀断面（南西から）



16 トレンチ調査終了状況（西から）



前方部主体部調査前状況（南から）



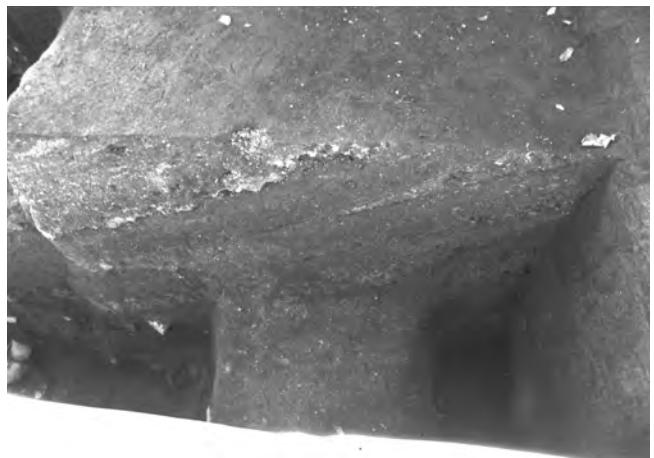
前方部主体部確認状況（南から）



前方部主体部上部埋没状況（西から）



前方部主体部下部埋没状況（東から）



前方部主体部玄室埋没状況（東から）



前方部主体部玄室・前室埋没状況（東から）



前方部主体部前室確認状況（南から）



前方部主体部前室確認状況（北から）



前方部主体部玄室確認状況（南から）



前方部主体部玄室東側壁確認状況（西から）



前方部主体部玄室西側壁確認状況（東から）



前方部主体部羨道確認状況（南から）



前方部主体部前室遺物出土状況（西から）



前方部主体部埋没状況（北から）



前方部主体部調査後処理状況（西から）



前方部主体部調査終了状況（南から）



前方部主体部入口部分上層確認状況（南から）



前方部主体部入口部分土層断面（西から）



前方部主体部羨門・川原石積み側壁（南西から）



前方部主体部羨門・川原石積み側壁（西から）



前方部主体部羨門・川原石積み側壁（東から）



前方部主体部羨門・川原石積み側壁（北から）



前方部主体部調査後処理状況（南東から）



2 トレンチ周堀内縁断面（南から）



3 トレンチ周堀内縁断面（西から）



5 トレンチ周堀内縁断面（南西から）



6 トレンチ周堀内縁断面（北から）



17 トレンチ墳丘第一段覆土断面（南東から）



18 トレンチ墳丘第一段覆土断面（南西から）

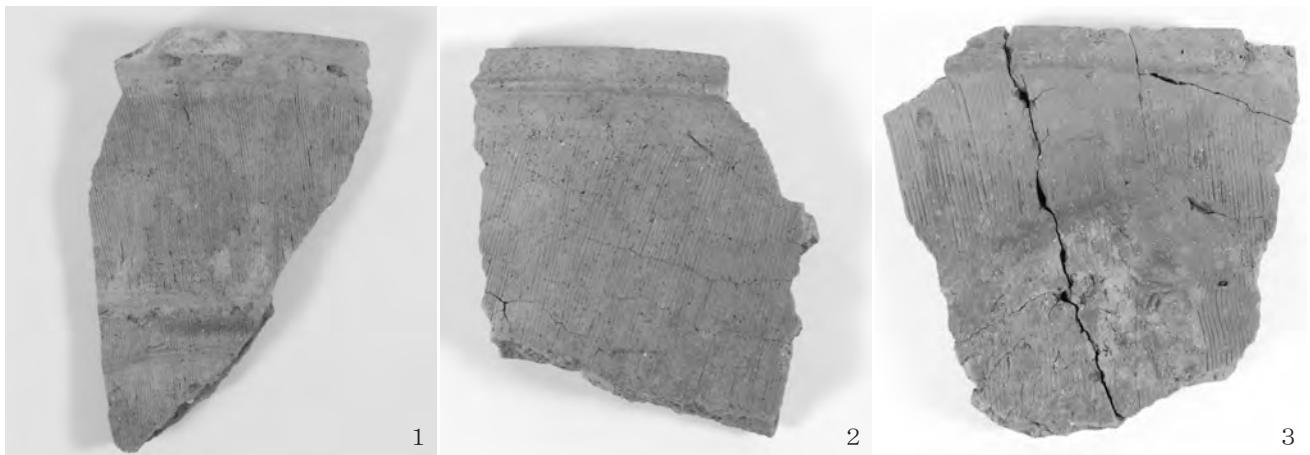


19 トレンチ墳丘第二段斜面状況（南東から）

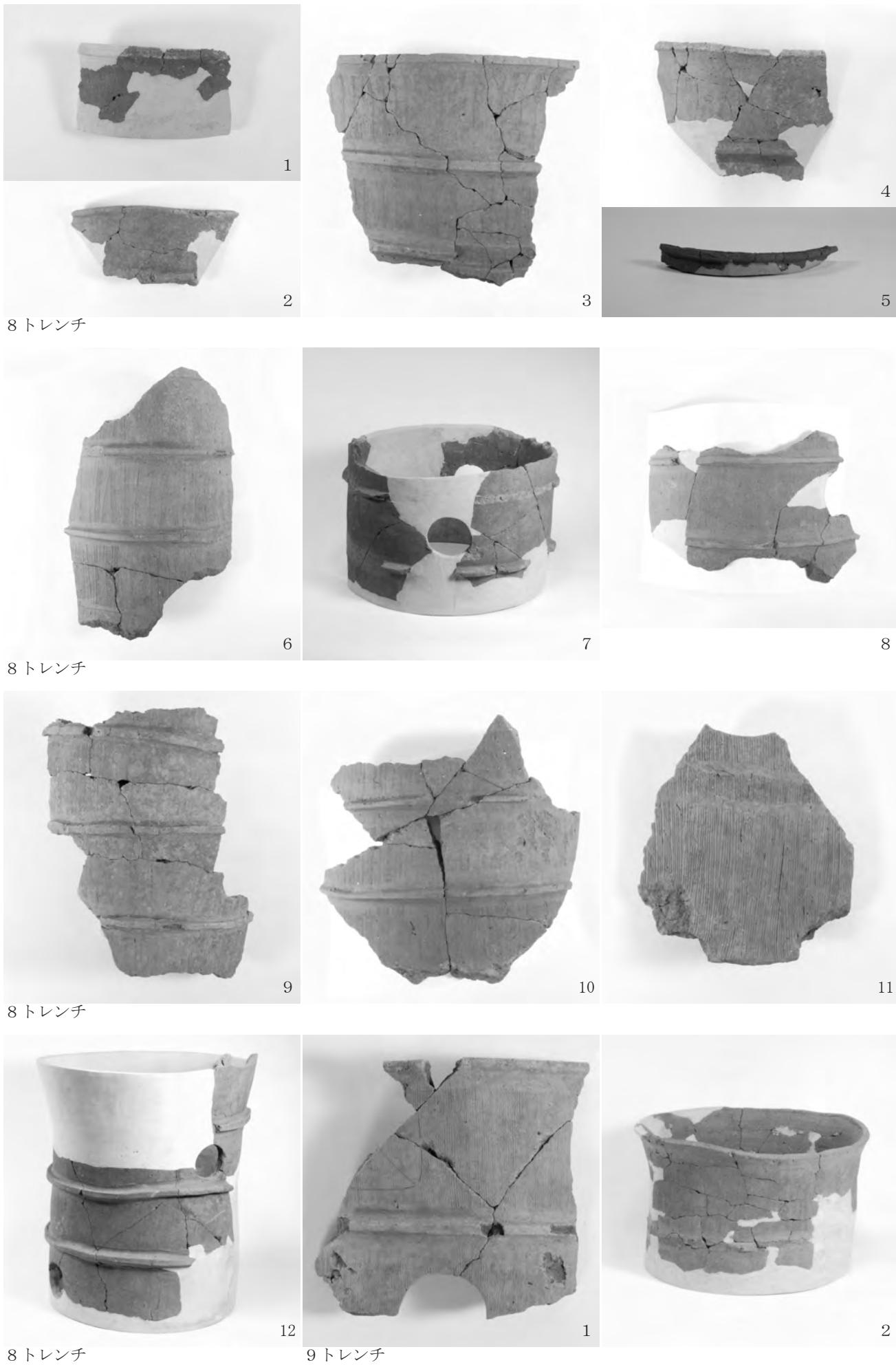


20 トレンチ墳丘第二段埴輪出土状況（南東から）

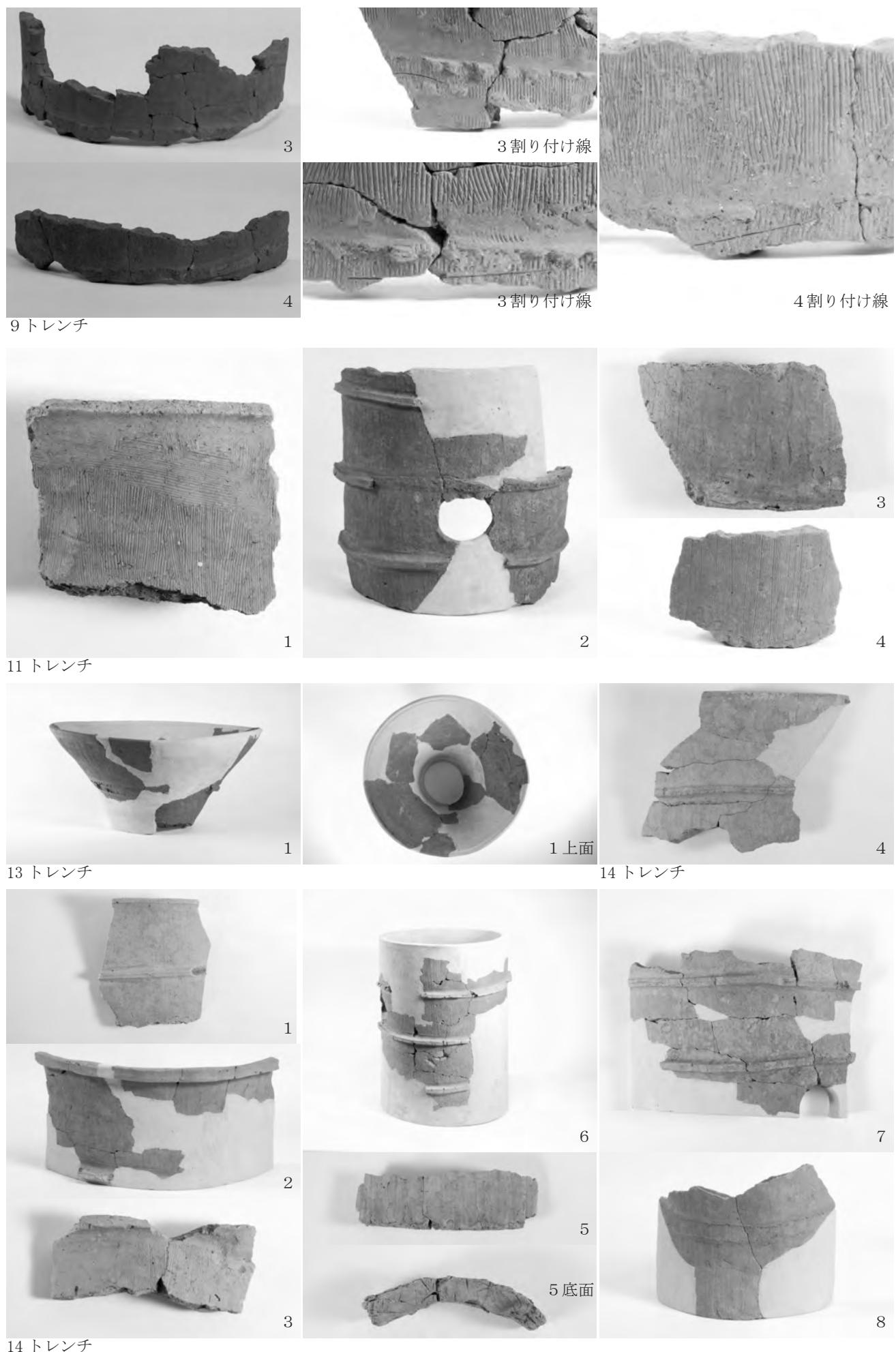
図版17 円筒埴輪(1) 1・7トレンチ



図版18
田筒埴輪
(2)
8・9・トレンチ



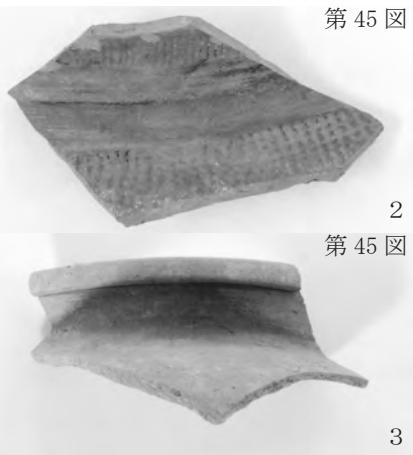
図版19 円筒埴輪(3) 9・11・13・14トレンチ



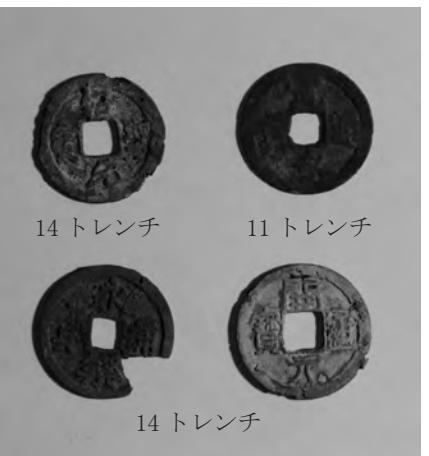
図版 20
形象埴輪
1・7・9・
11・
13・
14トレンチ・前方部主体部



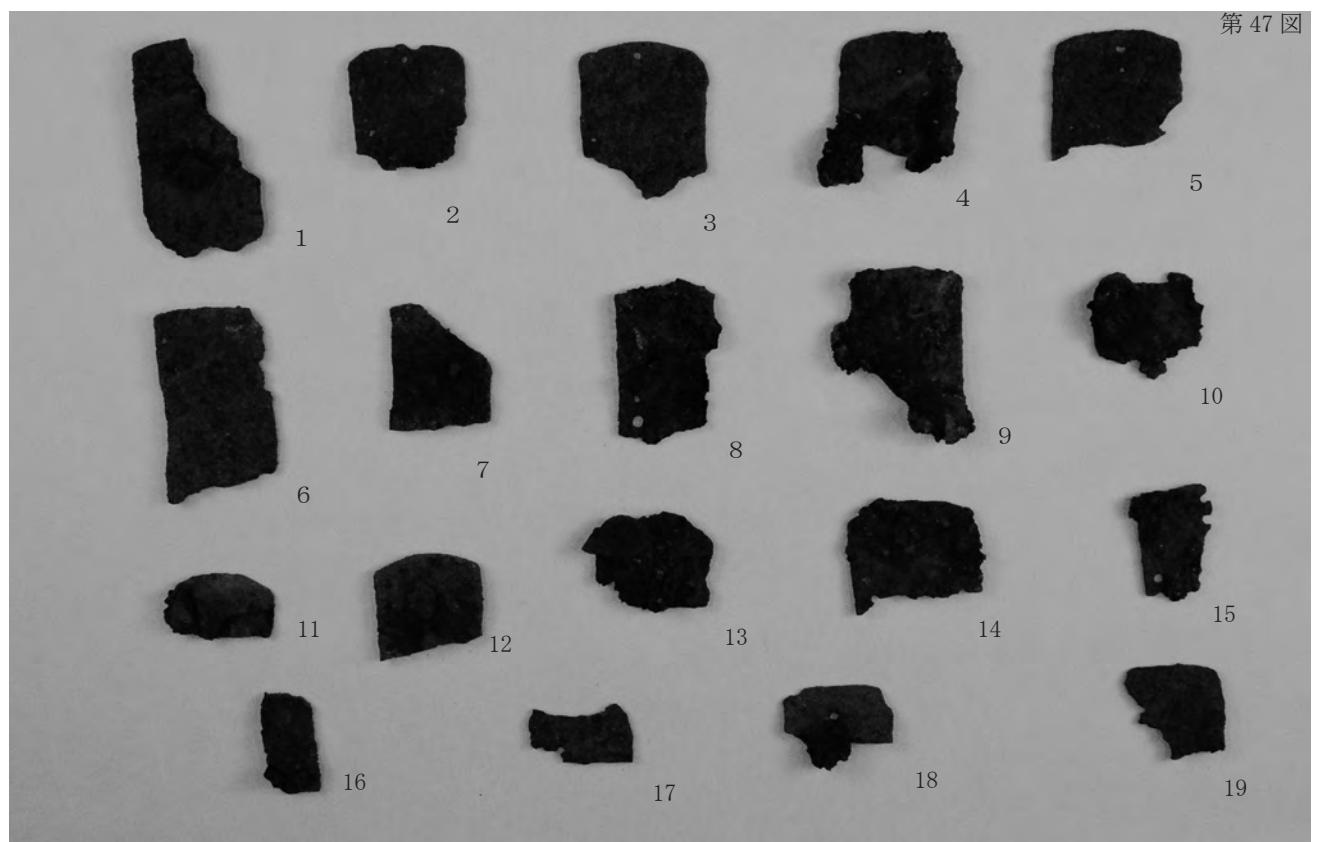
図版21
形象埴輪・土器・鉄製品・銅錢



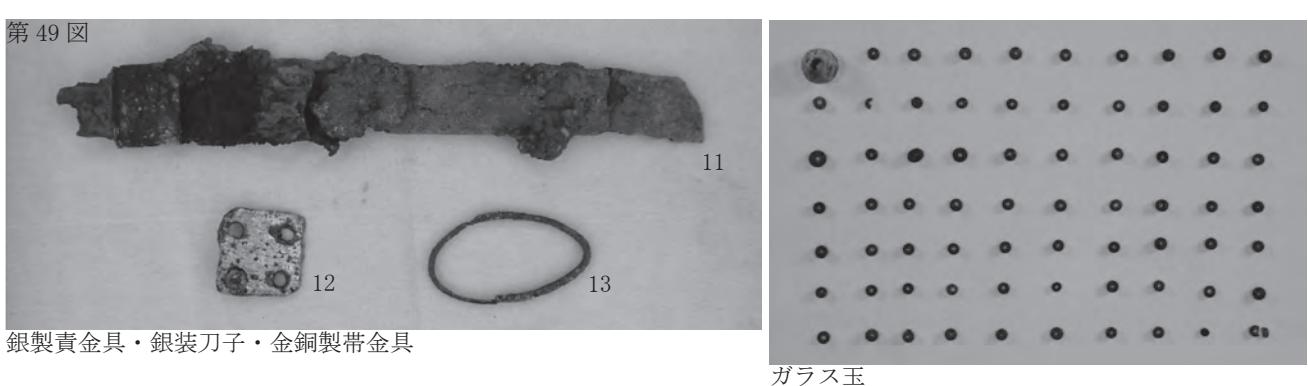
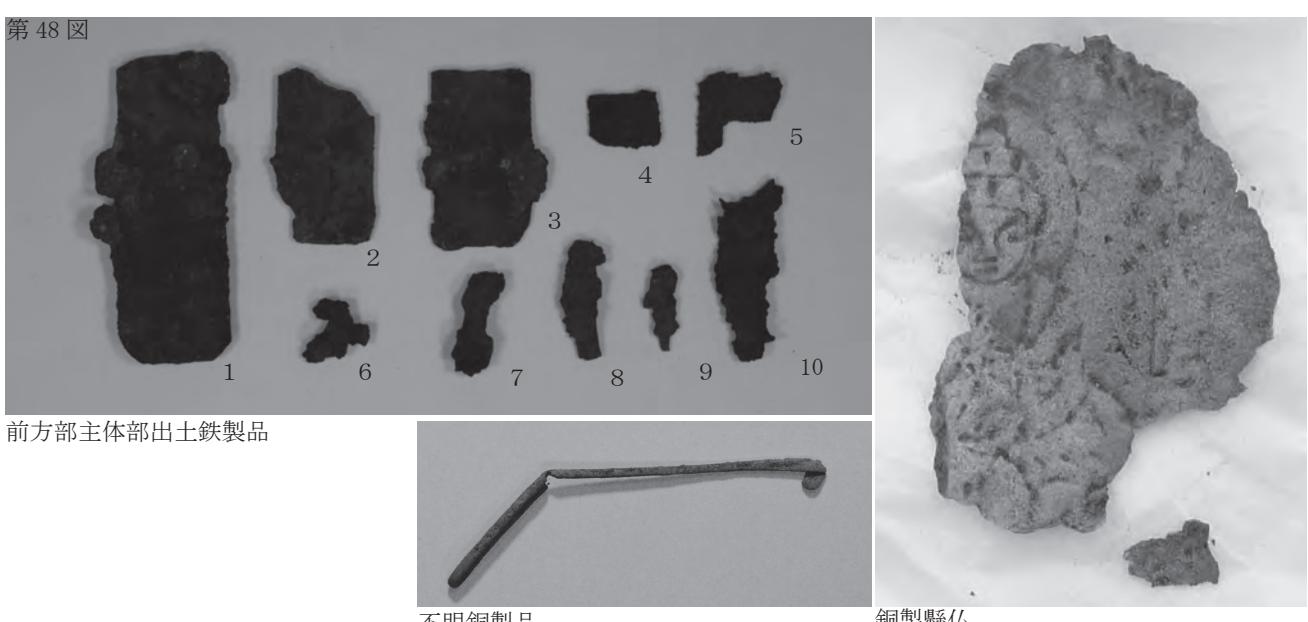
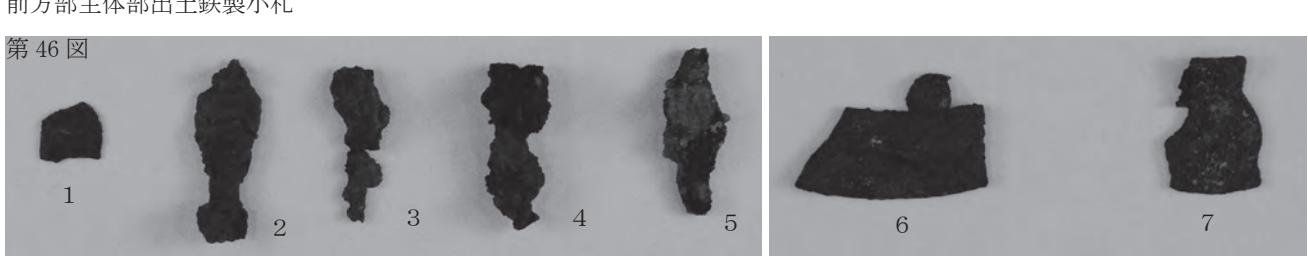
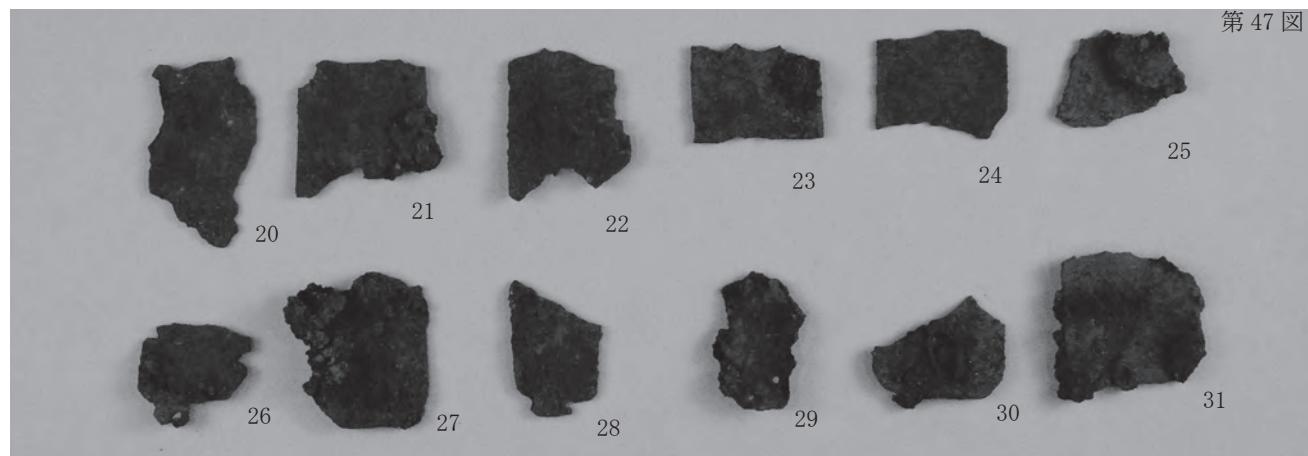
前方部主体部・4・13・14 トレンチ



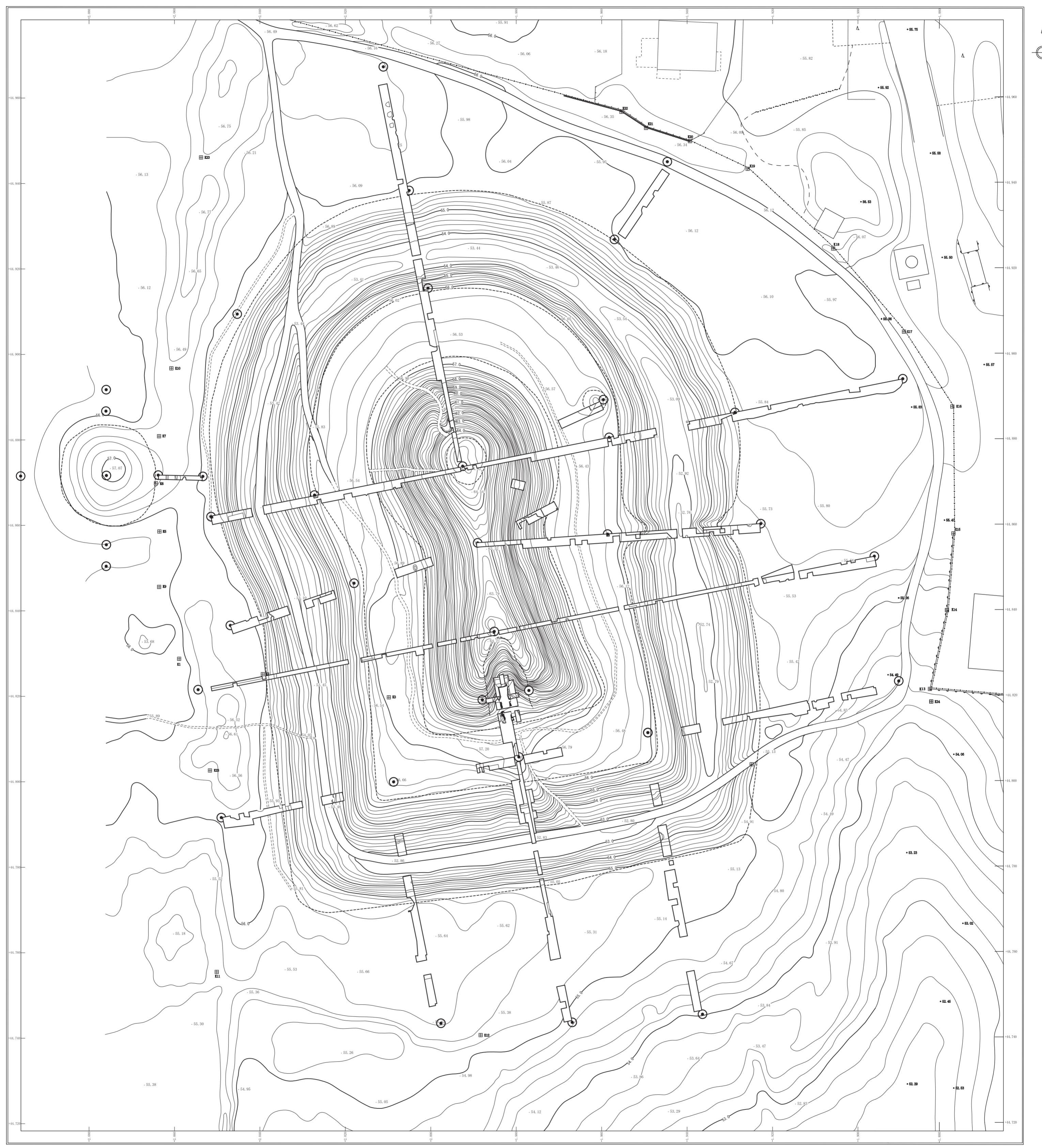
13・14 トレンチ



前方部主体部出土鉄製小札



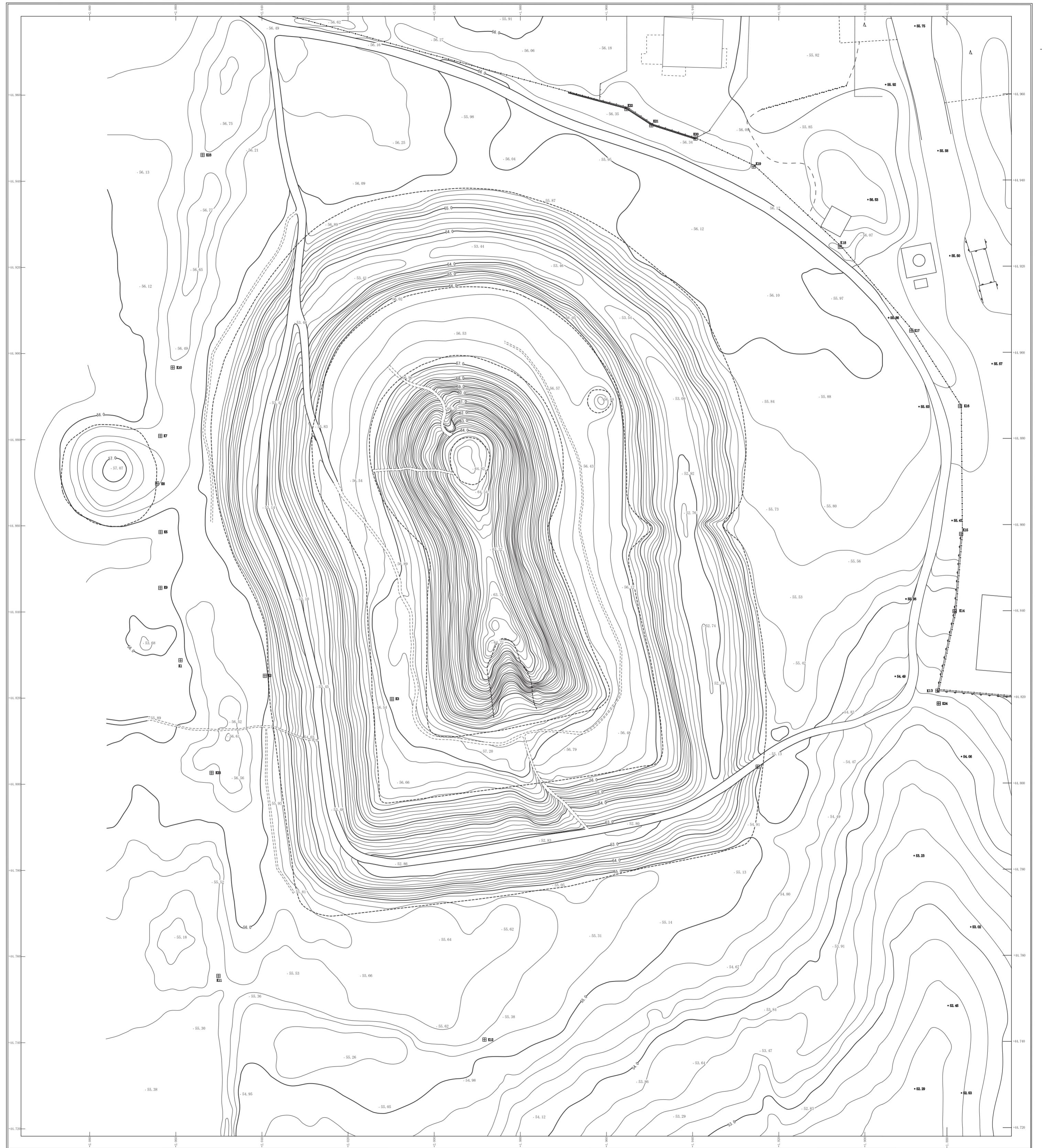
付図2 吾妻古墳発掘区測量図



昭和59年3月測図
平成21年3月修正
等高線間隔 20cm
座標系 第IX系

0m 5 10 20 30 40 50m

付図 1 吾妻古墳測量図



報告書抄録

ふりがな	あずまこふん
書名	吾妻古墳
副書名	重要遺跡範囲調査
卷次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第333集
編著者名	中村享史・齋藤恒夫
編集機関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
発行年月日	西暦 2011年3月30日（平成23年3月30日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あずまこふん 吾妻古墳	とちぎし 栃木市 だいこうじまち 大光寺町 あざあざま 字吾妻 みぶまちふじい 壬生町藤井 あざあずまはら 字吾妻原	09203	3938	33° 00' 00"	129° 30' 00"	20080402～ 20110330	1,052	重要遺跡範 囲調査
		09361	5980- 42					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吾妻古墳	古墳	古墳時代	吾妻古墳1基：墳丘、周堀、横穴式石室	埴輪、須恵器、挂甲小札、鉄鎌、鉸具？、兵庫鎖？、鉄釘？、装飾付大刀銀製責金具、銀装刀子、銀板、金銅製帶金具、ガラス玉	・前方後円墳 ・幅の広い墳丘第一段平坦面（基壇）を持つ ・前方部前端の横穴式石室
		古墳時代	藤井39号墳1基：周堀		
		平安時代		灰釉陶器・土師器	
		中世		銅錢、銅製懸仏	
		近世以降		銅錢・陶器・簪？	

要約	吾妻古墳は墳丘全長127.85 m、周堀外縁長162.12 mの栃木県最大の前方後円墳である。墳丘第一段平坦面（基壇）は幅が広く低いが、盛り土が施されている。墳丘頂と第二段中位、裾から埴輪が出土した。前方部の横穴式石室は、全長8.4 m、破碎状閃緑岩の一枚石を組み合わせた玄室、川原石積みの羨道（前室）、凝灰岩切石積みの羨門から成る。玄室は江戸時代に「吾妻の岩屋」と呼ばれていたものである。装飾付大刀、銀装刀子、金銅製馬具、挂甲小札、鉄鎌、ガラス玉が出土した。
----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第 333 集

吾妻古墳

－重要遺跡範囲確認調査－

発 行 栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市塙田 1-1-20

TEL 028 (623) 3424

財団法人とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市本町 1-8

TEL 028 (643) 1011

平成 21 年 3 月 30 日発行

編 集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441

印 刷 株 式 会 社 泰 明 グ ラ フ ィ ク ス
